

京都府遺跡調査概報

第 72 冊

1. 石ヶ原古墳群
2. 引地城跡・南有路城跡
3. 千代川遺跡第20次
4. 宮川遺跡
5. 興戸宮ノ前遺跡
6. 柿添遺跡第2次

1 9 9 6

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成7年度に実施した発掘調査のうち、京都府丹後土地改良事務所、京都府土木建築部、京都府亀岡土木事務所、京都府農林水産部の依頼を受けて行った石ヶ原古墳群、引地城跡・南有路城跡、千代川遺跡第20次、宮川遺跡、興戸宮ノ前遺跡、柿添遺跡第2次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、丹後町教育委員会・大江町教育委員会・亀岡市教育委員会・田辺町教育委員会・精華町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に取めた概要は、下記のとおりである。

1. 石ヶ原古墳群 2. 引地城跡・南有路城跡 3. 千代川遺跡第20次
4. 宮川遺跡 5. 興戸宮ノ前遺跡 6. 柿添遺跡第2次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 石ヶ原古墳群	竹野郡丹後町三宅石ヶ原	平7.12.4～ 平8.2.28	京都府丹後土地改良事務所	村田 和弘
2. 引地城跡・南有路城跡	加佐郡大江町南有路	平7.11.21～ 平8.2.28	京都府土木建築部	筒井 崇史
3. 千代川遺跡第20次	亀岡市千代川町湯井	平7.11.6～ 12.8	京都府亀岡土木事務所	野々口陽子
4. 宮川遺跡	亀岡市宮前町宮川	平7.5.9～ 8.11	京都府農林水産部	野々口陽子
5. 興戸宮ノ前遺跡	綴喜郡田辺町興戸宮ノ前・川原谷	平7.8.17～ 12.18	京都府土木建築部	伊賀 高弘
6. 柿添遺跡第2次	相楽郡精華町北稲八間柿添	平7.8.21～ 11.29	京都府土木建築部	有井 広幸

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

目 次

1. 石ヶ原古墳群発掘調査概要-----	1
2. 引地城跡・南有路城跡発掘調査概要-----	11
3. 千代川遺跡第20次発掘調査概要-----	21
4. 宮川遺跡発掘調査概要-----	27
5. 興戸宮ノ前遺跡発掘調査概要-----	51
6. 柿添遺跡第2次発掘調査概要-----	73

挿 図 目 次

1. 石ヶ原古墳群

第1図	調査地位置図及び周辺遺跡分布図	2
第2図	調査地配置図	3
第3図	1号墳地形測量図	4
第4図	1号墳主体部平面・断面実測図	5
第5図	3～7・9号墳地形測量図	6
第6図	3号墳主体部平面・断面実測図	7
第7図	9号墳主体部平面・断面実測図	8
第8図	出土遺物実測図	9

2. 引地城跡・南有路城跡

第9図	調査地周辺主要遺跡分布図	11
第10図	引地城跡地形測量図	13
第11図	引地城跡調査後地形測量図	14
第12図	帯郭1～通路土層断面図	15
第13図	焼土坑実測図	16
第14図	出土石器実測図	17
第15図	出土土器実測図	18
第16図	南有路城跡調査地地形測量図	18

3. 千代川遺跡第20次

第17図	調査地位置図	21
第18図	トレンチ配置図	22
第19図	第1トレンチ遺構平面図	23
第20図	土層断面図	24
第21図	包含層遺物実測図	25

4. 宮川遺跡

第22図	調査地位置図	27
第23図	トレンチ配置図	28
第24図	第1トレンチ遺構平面図	30
第25図	第1トレンチ東壁標準土層図	30
第26図	竪穴式住居跡1・4実測図	31

第27図	竪穴式住居跡2・3実測図	32
第28図	土坑1・2及び土器溜まり実測図	33
第29図	第1トレンチ出土遺物実測図(1)	35
第30図	第1トレンチ出土遺物実測図(2)	36
第31図	第1トレンチ出土遺物実測図(3)	37
第32図	第2・3トレンチ遺構平面図	38
第33図	流路1及び集石遺構2実測図	39
第34図	第2・3トレンチ出土遺物実測図	40
第35図	第4トレンチ遺構平面図	41
第36図	第4トレンチ北壁土層断面図	42
第37図	竪穴式住居跡8・掘立柱建物跡7実測図	43
第38図	竪穴式住居跡9実測図	44
第39図	古墓実測図	45
第40図	第4トレンチ出土土器実測図	46
第41図	第4トレンチ出土石器実測図	46
第42図	第4トレンチ出土遺物実測図	48

5. 興戸宮ノ前遺跡

第43図	調査地及び周辺遺跡分布図	52
第44図	工事対象路線図	54
第45図	トレンチ名称図	55
第46図	興戸宮ノ前遺跡調査地周辺地形図	56
第47図	1トレンチ遺構実測図	57
第48図	1トレンチSK9501～9504実測図	58
第49図	2トレンチ平面図	60
第50図	2トレンチ断面図	61
第51図	土塁・堀切・郭実測図(1) 土塁盛り土Ⅱ除去段階	62
第52図	土塁・堀切・郭実測図(2) 土塁盛り土Ⅱを残した段階	63
第53図	土塁・堀切・郭断面図	66
第54図	出土遺物実測図	68

6. 柿添遺跡第2次

第55図	調査地位置図	73
第56図	調査地周辺遺跡分布図	74
第57図	トレンチ配置図・土層柱状図	75
第58図	A～Eトレンチ平面図・SD01断面図	76
第59図	I区中世遺構配置図	77

第60図	I区土坑・溝断面図	78
第61図	I区古墳時代遺構配置図	79
第62図	S H 23実測図	80
第63図	S B 30実測図	80
第64図	S B 33・36～38実測図	81
第65図	S K 31実測図	82
第66図	S K 19・26・32、P 27実測図	83
第67図	S D 13～15・23・24・35実測図	84
第68図	出土遺物実測図(1)	85
第69図	出土遺物実測図(2)	86
第70図	出土遺物実測図(3)	87

付 表 目 次

1. 石ヶ原古墳群

付表1	石ヶ原古墳群一覧表	3
付表2	出土遺物観察表	9

図版目次

1. 石ヶ原古墳群

- 図版第1 (1)調査地遠景(北東から) (2)調査前状況(5・7・9号墳)(南から)
- 図版第2 (1)3～7・9号墳全景(東から) (2)1号墳全景(北西から)
- 図版第3 (1)1号墳調査風景(西から)
(2)調査風景(手前：5号墳、奥：6号墳)(北から)
- 図版第4 (1)1号墳主体部遺物出土状況(北から)
(2)5号墳主体部検出状況(北から)
- 図版第5 (1)9号墳第1主体部遺物出土状況(南から)
(2)9号墳第2主体部遺物出土状況(北から)
- 図版第6 出土遺物

2. 引地城跡・南有路城跡

- 図版第7 (1)引地城跡遠景(南西から) (2)引地城跡全景(西から)
- 図版第8 (1)引地城跡全景(南西から) (2)引地城跡全景(真上から)
- 図版第9 (1)引地城跡土塁・横堀掘削作業(南から)
(2)引地城跡帯郭1全景(北西から)
- 図版第10 (1)引地城跡柱穴掘削作業(西から)
(2)引地城跡焼土坑土層堆積状況(北から)
- 図版第11 (1)南有路城跡全景(西から) (2)関係者説明会風景
- 図版第12 引地城跡出土遺物

3. 千代川遺跡第20次

- 図版第13 (1)第1地点調査地遠景(北西から)
(2)第2・3・4地点調査地遠景(東から)
- 図版第14 (1)第1地点トレンチ遺構検出状況(北西から)
(2)第1地点トレンチ遺構完掘状況(北西から)
- 図版第15 (1)第4地点グリッド土層断面(西から)
(2)第5地点グリッド土層断面(西から)
- 図版第16 (1)第3地点トレンチ東壁土層断面(西から) (2)出土遺物

4. 宮川遺跡

- 図版第17 (1)調査地遠景(東から) (2)第1トレンチ空中写真
- 図版第18 (1)第2トレンチ空中写真 (2)第3トレンチ空中写真

- 図版第19 (1)第4トレンチ空中写真 (2)第4トレンチ竪穴式住居跡7(真上から)
- 図版第20 (1)第1トレンチ竪穴式住居跡1完掘状況(南から)
(2)同上 竪穴式住居跡3完掘状況(東から)
(3)同上 竪穴式住居跡4完掘状況(南東から)
- 図版第21 (1)第1トレンチ土坑2完掘状況(西から) (2)同上 土坑1完掘状況(西から)
(3)同上 土器溜まり土器出土状況(東から)
- 図版第22 (1)第2トレンチ掘立柱建物跡2完掘状況(北西から)
(2)同上 ピット1(P1)完掘状況
(3)第3トレンチ流路1及び集石遺構2完掘状況
- 図版第23 (1)第4トレンチ宮川2号墳完掘状況(西から)
(2)第4トレンチ竪穴式住居跡8完掘状況(南から)
(3)第4トレンチ中世墓(石材除去後)
- 図版第24 出土遺物(1)
- 図版第25 出土遺物(2)
- 図版第26 出土遺物(3)

5. 興戸宮ノ前遺跡

- 図版第27 (1)調査地遠景(井手町万灯籠山展望台から、東から)
(2)調査地遠景(航空写真、東から)
- 図版第28 (1)調査地遠景(航空写真、北から) (2)2トレンチ全景(航空写真、南から)
(3)調査地全景(航空写真、垂直、上が北)
- 図版第29 (1)1トレンチ全景(南から)
(2)1トレンチS K9502～S K9504検出状態(南西から)
(3)1トレンチS K9501～S K9504検出状態(南から)
(4)1トレンチS K9502半掘状態(西から)
- 図版第30 (1)1トレンチS K9502半掘状態(北から、背後にS K9503・9504)
(2)1トレンチS K9502坑内礫堆積状態(東半部、北から)
(3)1トレンチS K9501～S K9504掘削状態(S K9502完掘段階、南西から)
(4)1トレンチS K9502～S K9504完掘状態(北西から)
- 図版第31 (1)2トレンチ山頂A掘削調査前風景(北から)
(2)1トレンチ南半全景(山頂Bから山頂Aの諸遺跡を望む、北北西から)
- 図版第32 (1)2トレンチ土塁・堀切・郭全景(土塁I期段階、北から)
(2)2トレンチ土塁・堀切・郭全景(土塁I期段階、北から)
(3)2トレンチ土塁・堀切(堀切底から土塁を望む、北から)
(4)2トレンチ土塁・堀切・郭全景(土塁I期段階、北北東から)
- 図版第33 (1)2トレンチ堀切全景(西から) (2)2トレンチ堀切全景(南から)

- (3) 2 トレンチ郭内掘立柱検出状況(南西から)
 (4) 2 トレンチ S D9513・S K9516全景(南西から)
- 図版第34 (1) 2 トレンチ S D9513・S K9516全景(南南東から)
 (2) 2 トレンチ S D9513北半検出状態(北北西から)
- 図版第35 (1) 2 トレンチ S X9520全景(東から)
 (2) 2 トレンチ S X9520北側斜面(切岸、南から)
- 図版第36 (1) 2 トレンチ S X9516焼土・焼灰検出状態(南西から)
 (2) 2 トレンチ S D9513横断面(V-W断面、北から)
 (3) S-1 トレンチ検出状態(V字断面の溝、拡張前、北西から)
 (4) S-3 トレンチ S K9519全景(北北西から)

6. 柿添遺跡第2次

- 図版第37 (1) 調査地全景(南から) (2) 調査地全景(東から)
- 図版第38 (1) A・B・D トレンチ全景(東から) (2) A トレンチ S D01検出状況(西から)
 (3) D トレンチ S D02検出状況(北から) (4) E トレンチ北壁(南西から)
- 図版第39 (1) I 区第1 遺構面(南から)
 (2) I 区 S D01・S K03・S K07、畦畔7 全景(東から)
 (3) I 区第2 遺構面全景(手前が東)
- 図版第40 (1) 竪穴式住居跡 S H23断面(南から)
 (2) 竪穴式住居跡完掘状況(南から)
 (3) 建物跡全景(手前が東)
- 図版第41 (1) S K31断面(北から) (2) S K31遺物出土状況(北から)
 (3) S K19掘削状況(南から) (4) S K19遺物出土状況(手前が北)
- 図版第42 (1) S K26・P27遺物出土状況(東から)
 (2) S K32遺物出土状況(北から)
 (3) S D24・S D25・S D35全景(南から) (4) S D15掘削状況(東から)
- 図版第43 (1) S D13・S D14全景西側(南から)
 (2) S D13・S D14遺物出土状況(西から)
 (3) S D13・S D14全景東側拡張部分(南から)
 (4) S D13・S D14東側拡張部分遺物出土状況(西から)
- 図版第44 出土遺物(1)
- 図版第45 出土遺物(2)
- 図版第46 出土遺物(3)

1. 石ヶ原古墳群発掘調査概要

1. はじめに

石ヶ原古墳群は、京都府竹野郡丹後町字三宅小字石ヶ原に所在する。この古墳群の発掘調査は、京都府丹後土地改良事務所が計画している「府営広域営農団地農道整備事業(三宅地内)」に先立ち、同事務所の依頼を受け実施した。

今回の発掘調査は、昨年度に当調査研究センターが試掘調査を実施し、9基の古墳状隆起のうち7基を古墳と確認した地区で行った^(注1)。今年度は、昨年度に発掘調査を実施した3号墳(旧C地点)の墳丘の追加調査と、古墳と確認された1・4～7・9号墳の発掘調査を実施した。

発掘調査は、平成7年12月4日から開始し、平成8年2月28日に終了した。調査面積は、約540㎡であった。現地調査は、当調査研究センター調査第1係長伊野近富・同調査員柴 暁彦・村田和弘が担当した。概要報告の執筆は村田が担当した。期間中、調査を進めるにあたり、京都府丹後土地改良事務所・京都府教育委員会・丹後町教育委員会をはじめ、各関係機関からは多大なご協力を得た。また、実際に発掘調査にご尽力いただいた作業員・補助員・整理員の方々には記して謝意を表したい^(注2)。

なお、調査に係わる経費は京都府丹後土地改良事務所が負担した。

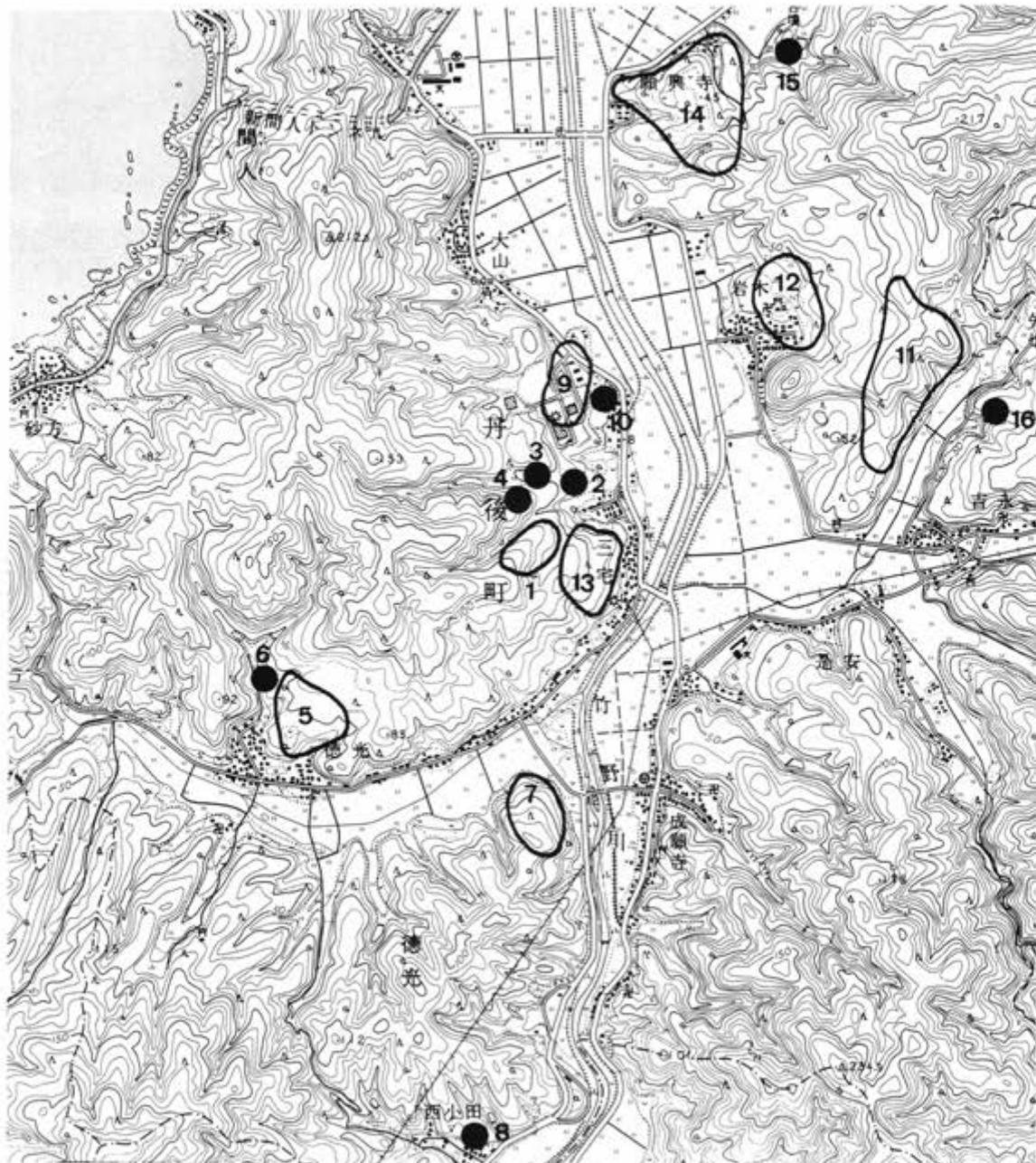
2. 位置と環境

石ヶ原古墳群が所在する丹後町は、丹後半島にあって、京都府最北の町である。丹後町の中央部には、丹後半島最大の河川で、全長約31kmの竹野川が蛇行して北流している。竹野川は、弥栄町内では氾濫原を形成しながら北へ流れ、丹後町との境付近では狭隘部となり、一旦氾濫原を狭めて河口部へと至る。また、河口部周辺は古代には潟湖であったと言われている。竹野川流域では、古代から人の行き来がなされていたことが竹野川流域に分布する数多くの遺跡から想像できる。

石ヶ原古墳群がある地域は、南側の弥栄町との境界付近であり、多くの遺跡が密集して分布するところである。丹後町側の丘陵上には石ヶ原古墳群のほか、上野古墳群や滝谷古墳・滝谷遺跡・三宅古墳群・高山古墳群・七ツ塚古墳群などの多くの遺跡が存在し、弥栄町側には、黒部銚子山古墳や西小田古墳群など、多くの遺跡がこの地域周辺に存在する(第1図)。

石ヶ原古墳群は、三宅地区の竹野川左岸の丘陵斜面上に立地しているが、1989年度版の『京都府遺跡地図』には記載されておらず、丹後町教育委員会が平成3～6年にかけて町内の遺跡分布調査を実施し、調査対象地内に9基、古墳群全体として合計15基の古墳状隆起が確認された^(注3)。昨年度の調査開始当初は、上野古墳群と仮称していたが、本来の古墳群とは丘陵を異にしていることから、丹後町教育委員会と協議の上、「石ヶ原」という遺跡名称が付けられた。今回の調査対

象地内の9基の古墳状隆起のうち、昨年の試掘調査によって7基が古墳であると判断し、今年度はこの7基の古墳について発掘調査を実施することとなった(第2図)。昨年度に付けられた調査地区番号A～Iは、今年度の調査時に1～9号墳に置き換えた。B・H地区の古墳状隆起は、昨年度の試掘調査で古墳ではないと判断したが、古墳番号が与えられている。



第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

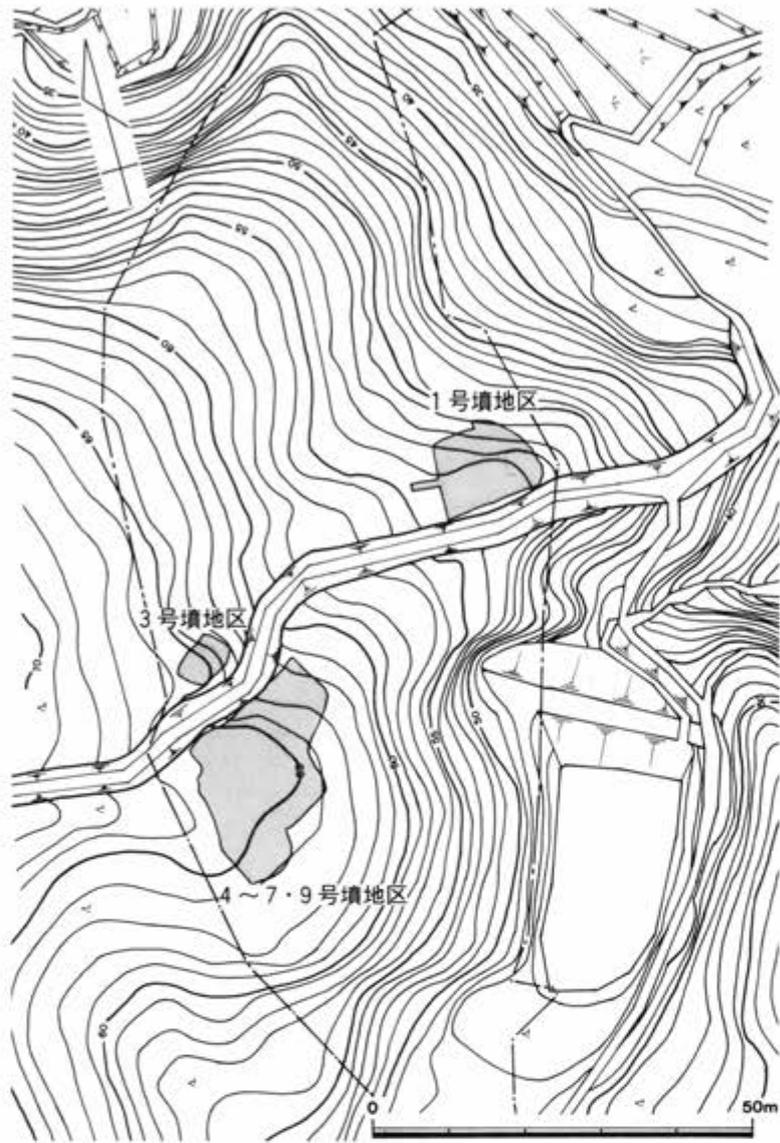
- | | | | | |
|-------------|------------|-----------|------------|----------|
| 1. 石ヶ原古墳群 | 2. 上野1・2号墳 | 3. 滝谷遺跡 | 4. 滝谷古墳群 | 5. 高山古墳群 |
| 6. 椿原古墳群 | 7. 七ツ塚古墳群 | 8. 西小田遺跡 | 9. 大山墳墓群 | 10. 大山遺跡 |
| 11. 矢畑古墳群 | 12. 岩木遺跡 | 13. 三宅古墳群 | 14. 願興寺古墳群 | 15. 丸山古墳 |
| 16. 八坂神社西古墳 | | | | |

3. 調査概要

石ヶ原古墳群は、1号墳を除く3～7・9号墳が丘陵斜面の狭い空間に小規模で、密集する形で築かれていることから、後期古墳にみられる密集型の群集墳であると調査当初から予想された。ここでは今回、発掘調査した1・3～7・9号墳の概要を順に報告する。規模などの詳細は、付表1に示すとおりである。

① 1号墳

1号墳は、標高約54mのところ、他の古墳とは離れた場所に立地している。丘陵斜面は西から東に向かって傾斜している(第3図)。調査地の西側は、B地点では古墳のなかった地区で、調査範囲とはせず、また、南側は現在使用されている山道によって丘陵が削られているため、墳形及

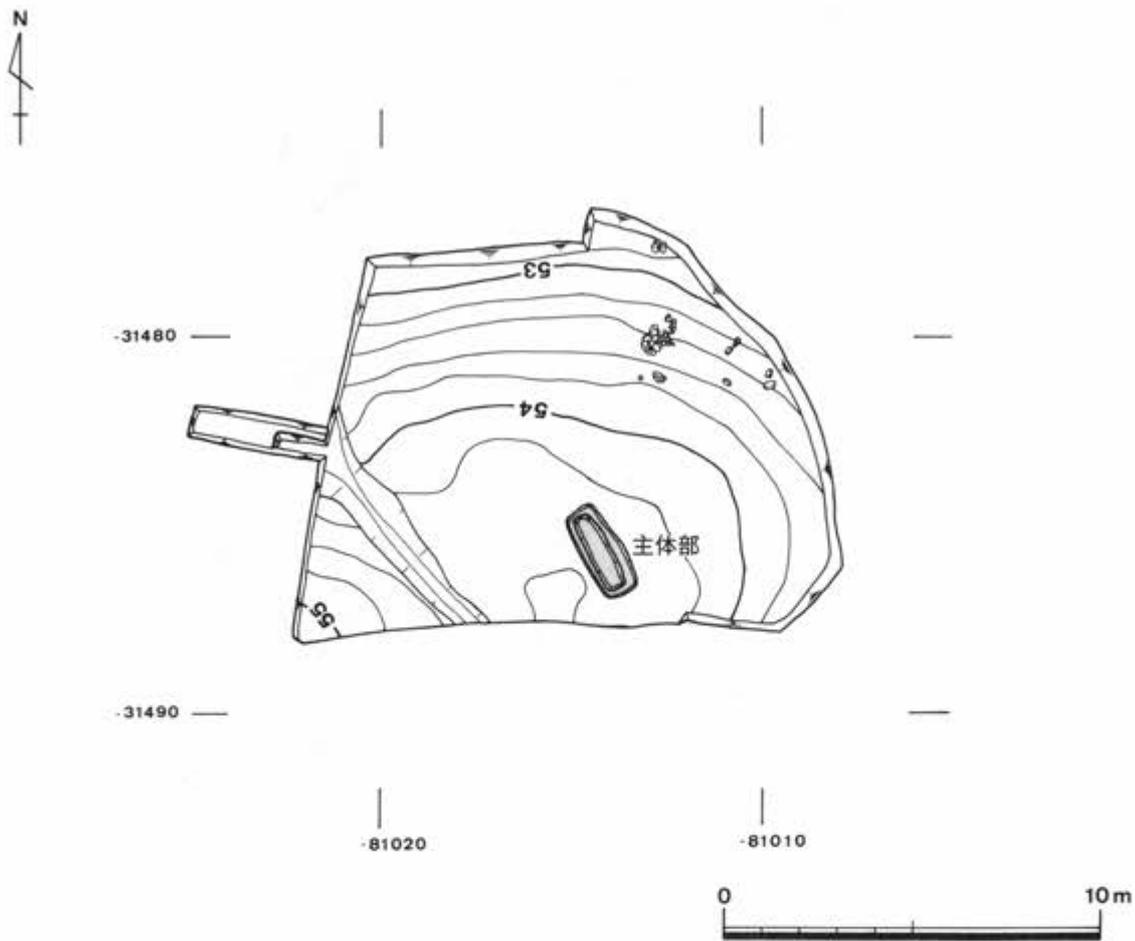


第2図 調査地配置図

び斜面の調査は、北側斜面のみで実施した。1号墳は、西からのびる丘陵斜面の途中の平坦地に位置する。この地区は、調査直前まで植林がされており、墳頂部と思われる平坦地は削平を受けていたと考える。1号墳は、盛り土された墳丘を持たず、丘陵斜面を一部整形して北側から見る

付表1 石ヶ原古墳群一覧表

番号	墳形	規模	主体部	埋葬施設	規模(m)	出土遺物
1号墳	不定形	最大長約9m(残存部)	1基	木棺直葬	2.48×1.02	須恵器甕(棺上)、須恵器片(土城内)
3号墳	円墳	最大長約6m(残存部)	1基	土壙	1.3×0.4	須恵器甕(墓壙上)
4号墳	墳丘裾部の一部分のみ調査のため詳細不明					
5号墳	円墳	全長約12m	1基	木棺直葬	2.5×1.85	土師器片(墓壙内)
6号墳	円墳	全長約8m	1基	土壙	1×0.7	なし
7号墳	削平	推定全長約8m	1基	土壙	1.5×0.85	須恵器甕(墓壙外周辺)
9号墳	不定形	最大長約10m(残存部)	2基	第1 土壙	1.95×0.78	須恵器甕・土師器高杯(墓壙上)
				第2 土壙	1.72×0.74	土師器高杯(墓壙内)



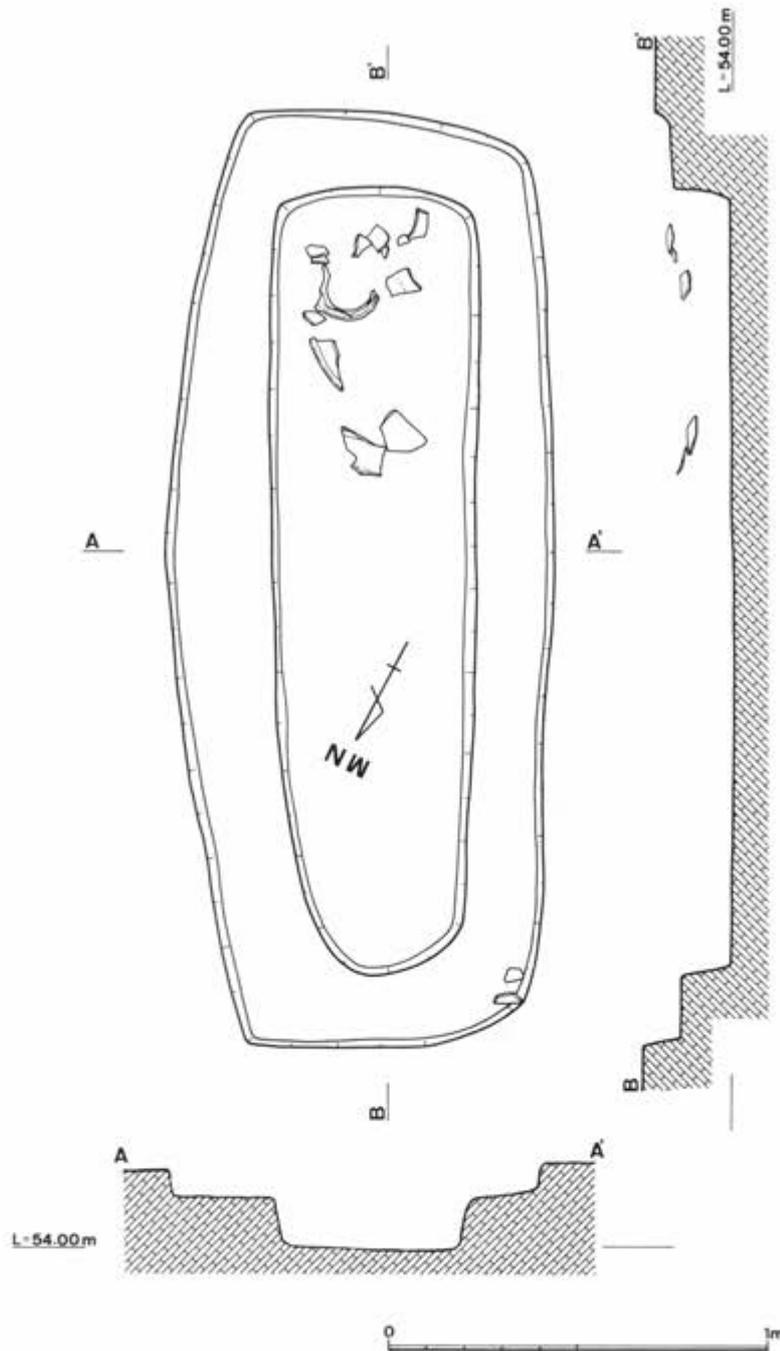
第3図 1号墳地形測量図

と古墳に見えるような墳丘に整形している。北側の墳丘斜面は、標高53m付近で斜面が一旦なだらかになることから、墳丘の裾部であろうと考える。墳頂部と墳丘裾の高低差は1mほどである。西側では、明確な墳丘の裾は確認できず、当初、西側にある溝を丘陵と墳丘を切り放す溝かと考えたが、溝が墳頂の平坦部を斜めに切って北西方向に進んでいくことを確認したことから、古墳には伴わない溝と判断した。溝からの出土遺物はなく、時期・用途も不明である。また、墳頂部から墳丘斜面にかけて、直径5～10cmほどの石が数か所にかたまってみつかったが、古墳に伴うかどうかは不明である。

墳頂部で木棺直葬墓と思われる埋葬施設を1基検出した。主体部は、南東－北西方向に墓壙を掘り、さらに木棺部分を掘って安置している。木棺跡は、長さ2.28m・幅(中央部)0.54mを測る。棺内部には棺上からの落ち込みと思われる須恵器甕が出土した(第4図)。その同一個体の破片が表土掘削の段階から出土していたため、棺上遺物が後に落ち込んだのものと判断した。また、棺内には別個体の須恵器の小片が数点出土したが、器種は不明である。

②3号墳

3～8・9号墳は、標高64～67mあたりの丘陵斜面が一旦なだらかになる場所に密集して築か

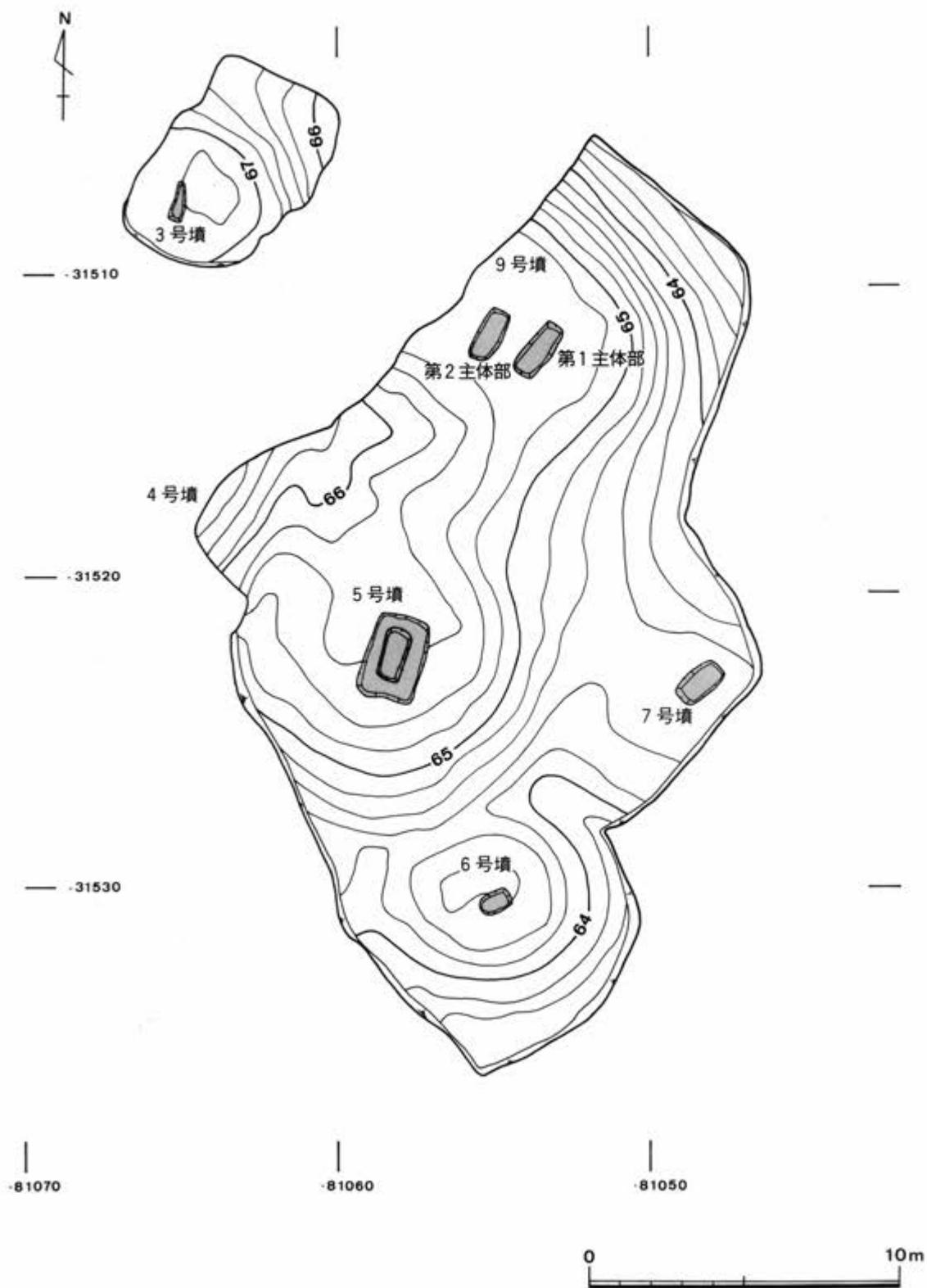


第4図 1号墳主体部平面・断面実測図

れている(第5図)。

3号墳は、昨年度に埋葬主体部の調査を実施しており、今年度は墳丘の調査を実施した。昨年度の埋葬主体部の調査報告についても併せて報告する。

3号墳の調査範囲は狭く、墳頂部と北側の斜面のみであった。3号墳は、標高67mあたりの狭い平坦地に立地している。調査地が狭く、墳丘裾が確認できず、規模は不明であるが、盛り土された円墳であることを確認した。墳頂部では、埋葬主体部と思われる土壙墓1基と土坑1基を検出した。土壙墓内から須恵器の甕が一個体分出土したが、平面精査の際に同一個体の破片が出土しており、墓壙上の遺物と考える(第6図)。



第5図 3～7・9号墳地形測量図

③ 4号墳

4号墳などの立地する地点は、調査区の中で最も広い調査地であり、古墳が密集するところである。3号墳も、現在は山道によって切り放されているが、同一グループのものと思われる。

4号墳は、調査範囲の西端に位置するが、墳丘裾の一部がかかるだけである。墳形・規模などは調査できず不明である。

④ 5号墳

5号墳は、4号墳の東側に位置し、盛り土された墳丘をもつ古墳である。断ち割り調査の結果、墳丘の北側は西からの多量の流土で墳丘の裾が埋まっていることが判明した。墳形は直径約12mの円墳で、墳丘の高さは約1.4mである。墳頂部で木棺直葬墓を検出した。今回の調査の中では最大規模であるが、棺内には副葬品はなく、墓壙内から数点の土師器の小片が出土したのみであった。

⑤ 6号墳

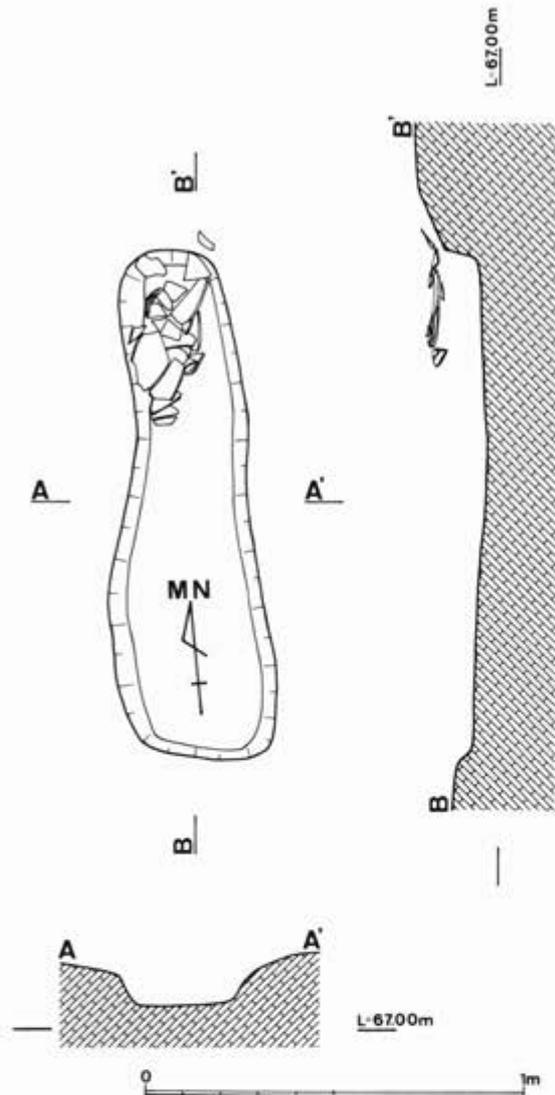
6号墳は、5号墳の南東に接する形で造られている。墳形は完全な円形ではなく、5号墳と重なっている。6号墳も5号墳と同じく丘陵の旧地形を利用し、盛り土をして古墳を造っている。墳頂部には、埋葬施設と思われる土壙が1基検出されたが、規模が小さく、遺物も出土しなかった。

⑥ 7号墳

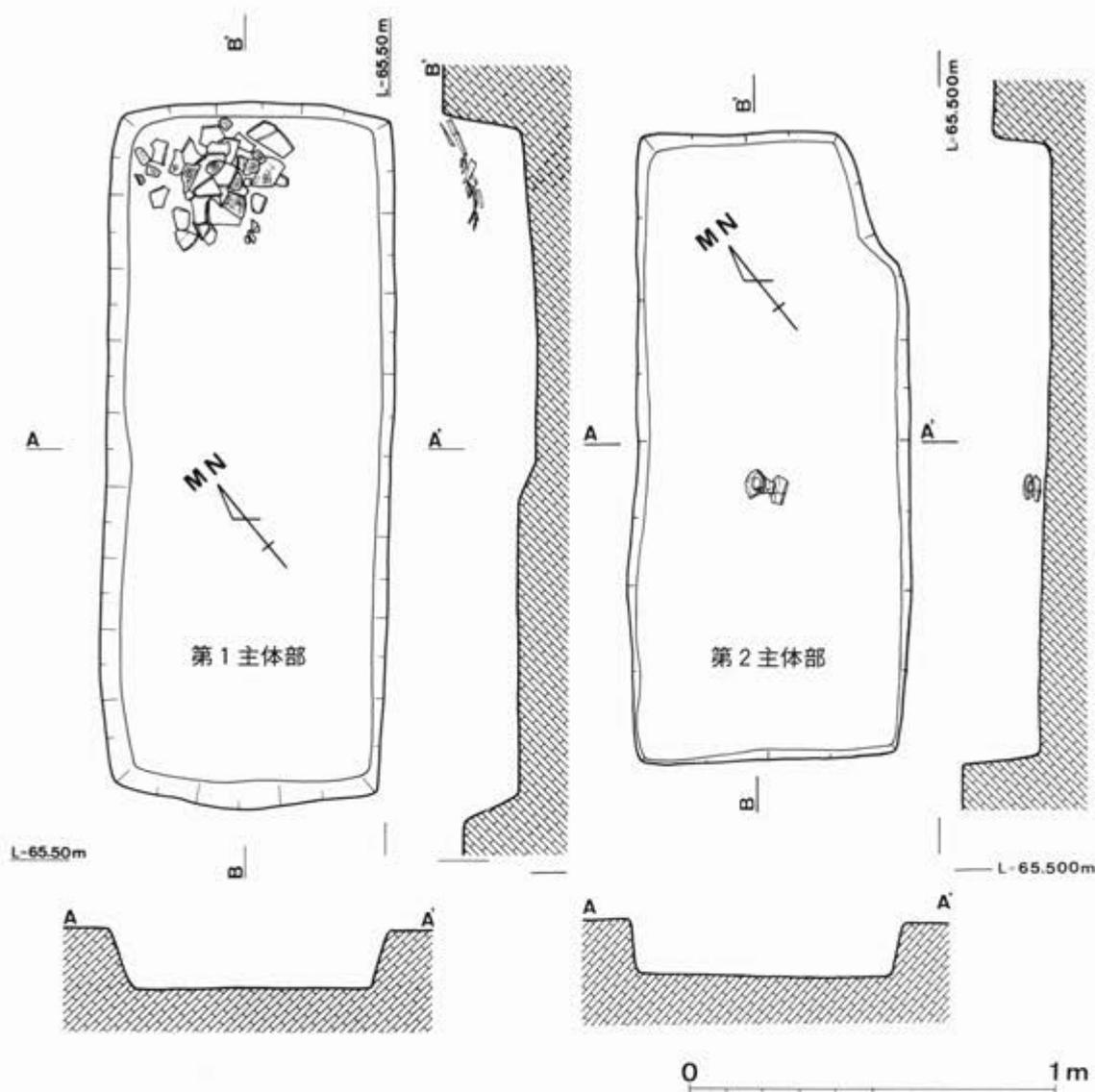
7号墳は、5号墳の東に位置している。7号墳は、後世に削平を受けているらしく、墳丘は確認できなかった。中央やや北東側で土壙墓を検出した。土壙内には遺物はなかったが、土壙に近接して須恵器の甕が出土した。

⑦ 9号墳

9号墳は、5号墳の北に位置し、山道によって西側が失われているが、地形を利用して北側のみ墳丘を意識して整形していると思われる。墳頂部には、2基の土壙墓を検出した。第1主体部とした東側の土壙墓からは、須恵器の甕一個体分の破片と、土師器の高杯が出土した(第7図)。出土状況から、須恵器の甕は落ち込み遺物、土師器の高杯は土壙上の遺物であると考えられる。第2主体部とした西側の土壙墓では、棺内から土師器の高杯が出土した(第7図)。



第6図 3号墳主体部平面・断面実測図



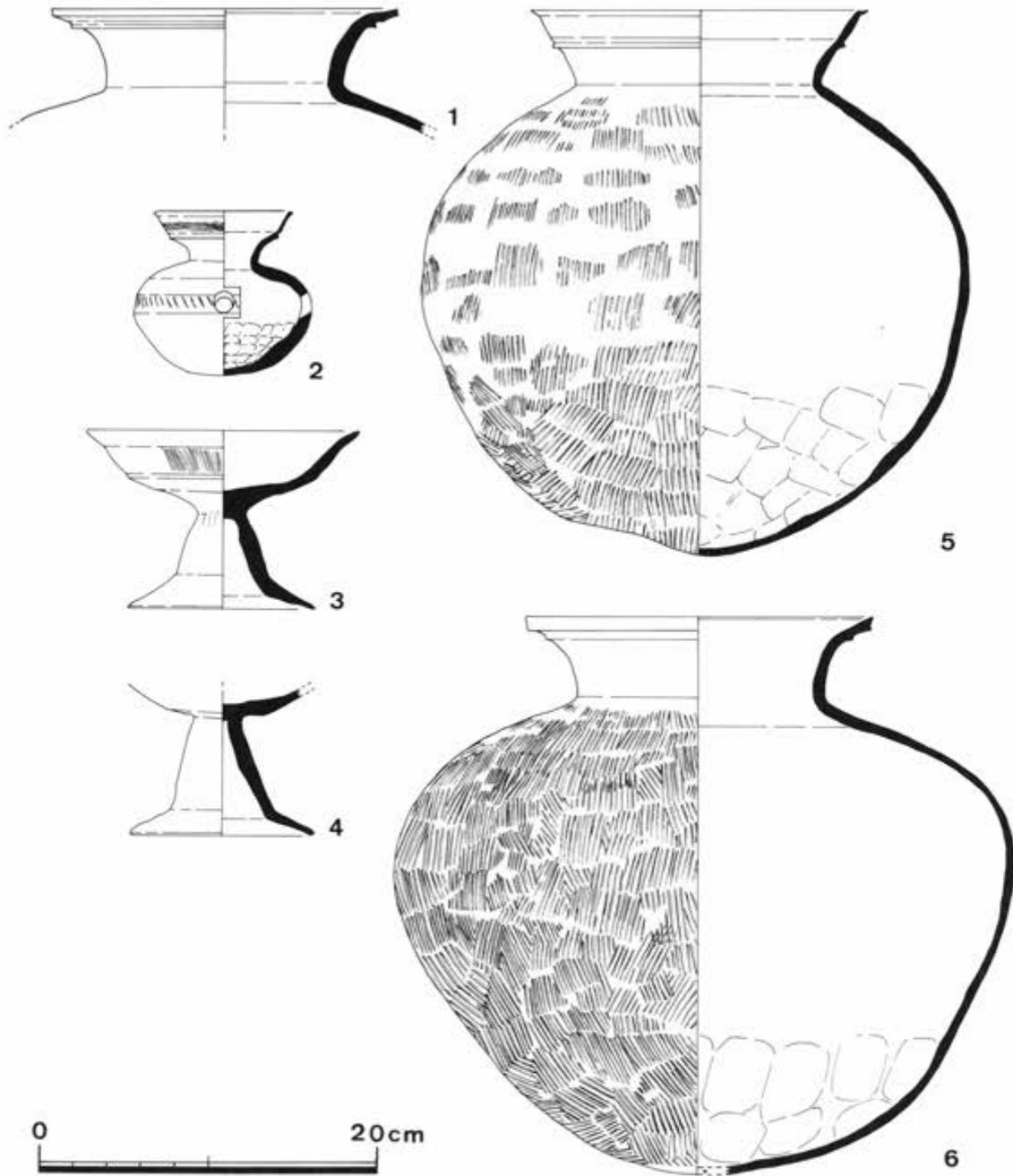
第7図 9号墳主体部平面・断面実測図

4. 出土遺物(第8図)

今回の調査での出土遺物は少なく、埋葬施設内の遺物についても同様であった。各遺物の詳細は、付表2に示すとおりである。

1は、1号墳主体部出土の遺物で、須恵器の広口甕で口縁部と胴部の破片が出土した。口縁部と胴部は同一個体であるが、破片の数が少なく、復原はできなかった。また、胴部破片の一部に線刻らしきものがみられる(図版第6-5)。2は、7号墳の土壙墓周辺部から出土した須恵器の甕で、TK47に属すると思われる。3は、9号墳第1主体部の土壙上面から出土した土師器の高杯である。4は、9号墳第2主体部の土壙内から出土した土師器の高杯である。5は、3号墳主体部出土の須恵器の広口甕である。6は、9号墳第1主体部出土の須恵器の広口甕である。

今回の調査で出土した遺物は量的に少なく、それぞれの古墳の築造・埋葬の時期を明確に示すことは非常に困難である。しかし、時期がわかる資料として、土壙墓外ではあるが、2の須恵器



第8図 出土遺物実測図

付表2 出土遺物観察表

番号	号墳	種類	器種	口径	器高	内面調整	外面調整	出土位置	備考
1	1	須恵器	広口甕	20.4cm	不明	ケズリ後ナデ	ナデ	主体部	口縁部と体部片のみ
2	7	須恵器	甕	8.2cm	9.8cm	ナデ	ナデ	主体部近辺	T K47に属する
3	9	土師器	高杯	16.1cm	10.4cm	ナデ後ハケ	ナデ、一部ハケメ	第1主体部	磨滅が著しい
4	9	土師器	高杯	不明	不明	ナデ	ナデ	第2主体部	磨滅が著しい
5	3	須恵器	広口甕	19.8cm	32.3cm	ケズリ後同心円タタキ	タタキ後ナデ	主体部	
6	9	須恵器	広口甕	20.6cm	33.0cm	同心円タタキ	タタキ後ナデ	第1主体部	磨滅が著しい

感があって、5世紀末～6世紀前半に属するので、古墳群も同時期のものとする。

5. ま と め

今回の調査成果として、3・5・6号墳以外は、盛り土された古墳ではなく、丘陵の斜面や平坦部を墳丘状に整形して造られたことがわかった。3・5・6号墳も墳丘を持っているが、丘陵斜面を利用し盛り土をしている。いずれの古墳も小規模なもので、埋葬施設も小規模で出土遺物も数量が少なく、出土した遺物のほとんどは、棺上もしくは土壌上面の遺物であった。古墳の築造時期を決めるには検討する資料が少なく困難である。しかし、少量ながら出土遺物や古墳の形態・規模・立地状況から、6世紀前半頃の群集墳であるとする。

(村田和弘)

注1 筒井崇史「上野古墳群・滝谷遺跡発掘調査概要 (2)滝谷遺跡・石ヶ原古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注2 調査参加者(敬称略)

石井 清、飯田 薫、石嶋文恵、石田寿子、井上昭朗、岩佐正一、上羽 樹、江野道和、大江千晴、岡崎千代子、岡崎美津恵、小国喜市郎、尾崎二三代、嵯峨根清一、野口美乃、林 秀子、菱川 實、平林秀夫、藤原多津子、堀江登喜雄、森 秀雄、森野美智代、村上五月、山崎頼人、山副まつ江、山本 絹、山本弥生、由良里枝、横島 迪

注3 『丹後町遺跡地図』 丹後町教育委員会 1995

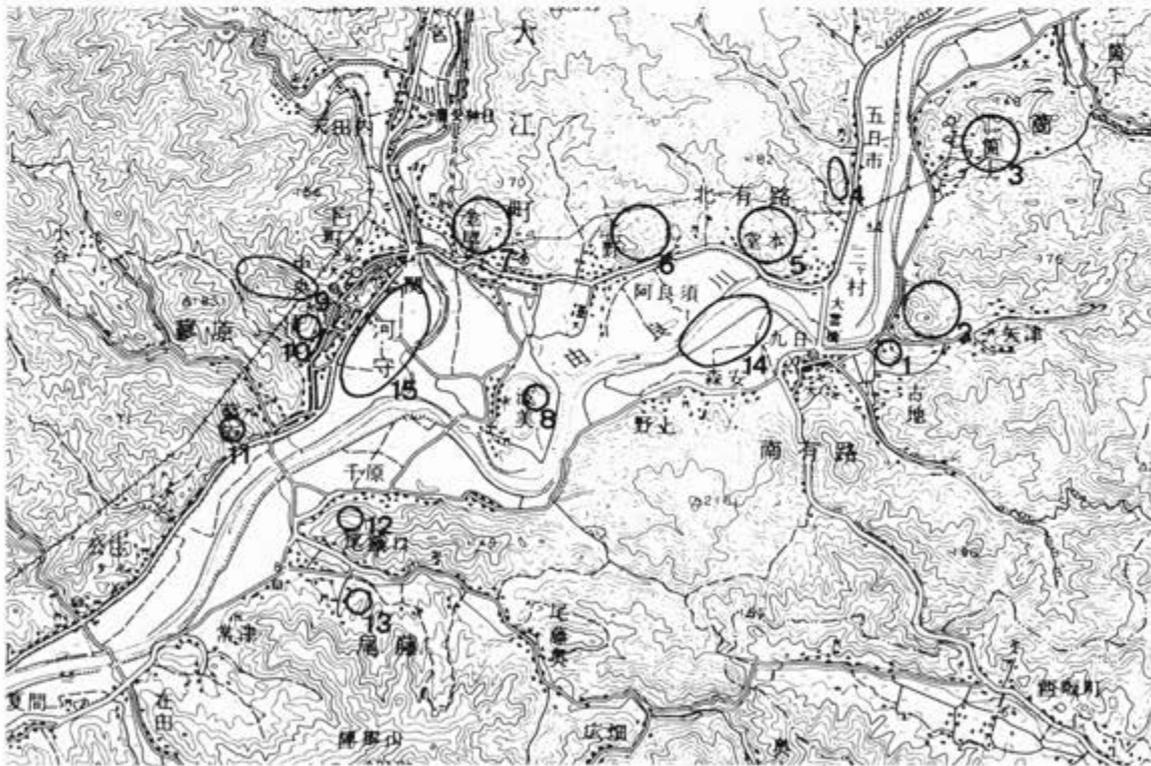
2. 引地城跡・南有路城跡発掘調査概要

1. はじめに

引地城跡・南有路城跡は、京都府加佐郡大江町南有路に所在する。今回の発掘調査は、府道福知山舞鶴線の拡幅改良工事に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。両城跡は、大江町内を貫流する由良川を見下ろす丘陵上に位置し、大江町の中心部である河守地区一帯の沖積平野を一望できる。

引地城跡の調査は、城全体の約3分の1が道路の拡幅によって削り取られてしまうため、その範囲を対象として実施した。引地城跡では、すでに平成6年度に、地形測量と丘陵頂部の面的な調査を行っており、その概要は報告済みである。

平成6年度の調査では、丘陵頂部で上下2段の郭を検出したほか、丘陵斜面でも腰郭と思われる緩斜面を確認した。また、城跡のほぼ全周に帯郭がめぐり、部分的に土塁・横堀が築かれていた。引地城跡は、出土遺物からみて16世紀頃の城跡と考えられる。平成7年度は、丘陵斜面部及び帯郭部分の面的な調査を行った。



第9図 調査地周辺主要遺跡分布図(1/50,000)

- | | | | | |
|----------|----------|----------|-----------|----------|
| 1. 引地城跡 | 2. 南有路城跡 | 3. 二箇村城跡 | 4. 北有路別城跡 | 5. 北有路城跡 |
| 6. 阿良須城跡 | 7. 金屋城跡 | 8. 波美城跡 | 9. 河守城跡 | 10. 新治城跡 |
| 11. 蓼原城跡 | 12. 千原城跡 | 13. 尾藤城跡 | 14. 高川原遺跡 | 15. 河守遺跡 |

南有路城跡は、城跡の先端部分と思われる急傾斜面に小規模な平坦面が4か所認められたため、試掘調査を行ってその概要の把握に務めた。

平成7年度の発掘調査は、調査第2課調査第1係長伊野近富・同主任調査員竹原一彦・同調査員筒井崇史が担当し、多くの調査補助員・整理員・作業員の協力^(注2)を得た。調査期間は、平成7年11月21日から平成8年2月28日までである。両城跡を合わせた最終的な調査面積は、約740㎡であった。

調査に際しては大江町教育委員会をはじめ諸機関から多大な協力を得た。

なお、調査にかかる経費は、全額京都府土木建築部が負担した。本概要の執筆は、筒井のほか、出土遺物の石器とまとめの①については当調査研究センター調査員黒坪一樹が行った。

2. 位置と環境

引地城跡・南有路城跡の所在する大江町は、北側に千丈ヶ嶽、鳩ヶ峰、赤石ヶ岳などの大江山連山があり、この山岳地帯をぬって南西から北東に向かって京都府北部では最大河川である由良川が貫流する。両城跡が所在する大字南有路から大江町のほぼ中央に位置する大字河守までの一帯は、由良川によって形成された沖積平野が広がる。両城跡は、この沖積平野の河口側の入り口に位置する。

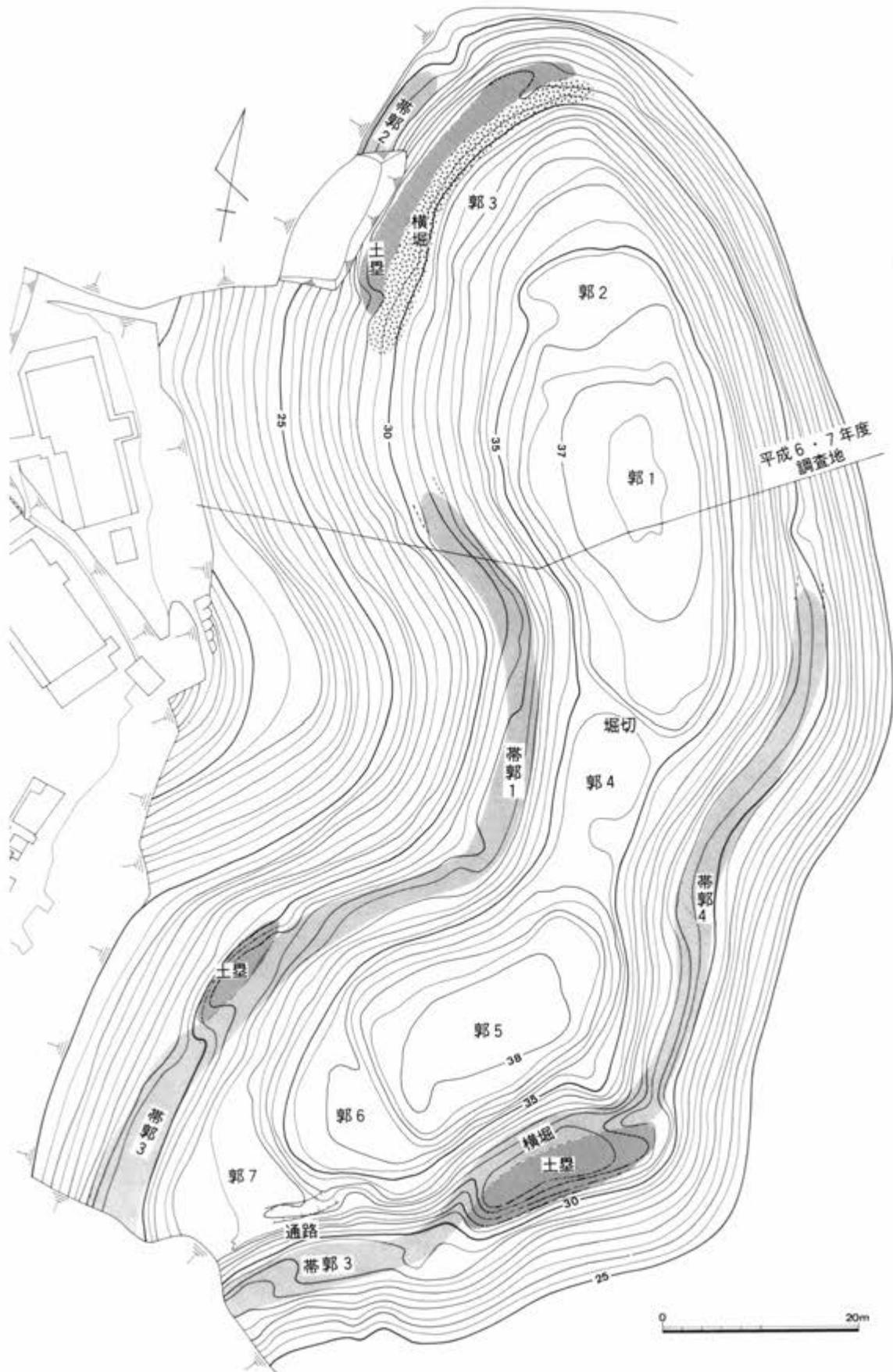
この沖積平野の周囲には、今回調査を行った両城跡(1・2)のほか、北有路城跡(5)・金屋城跡(7)・阿良須城跡(8)・河守城跡(9)・新治城跡(10)などの中世山城があり、そのいくつかは城主の名前なども知られている。この中で最大規模の河守城跡には、数段の郭や帯郭が認められる。これらの城跡の多くは、河守の平野周辺における連携的な機能を果たしていたのではないかとと思われる。

また、河守の平野部や由良川河川敷に立地する高川原遺跡(14)や河守遺跡(15)では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が見つまっている。高川原遺跡では、1974年に発掘調査が行われ、古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴式住居跡が見つかり、多数の遺物^(注3)が出土している。河守遺跡は、1985年に発掘調査が行われ、弥生土器をはじめ、須恵器・土師器・墨書土器・漆器・銅鈴・銅銭など、弥生時代から中世にかけての遺物^(注4)が多数出土した。

3. 調査の経過

引地城跡の調査は、城跡全体のうち北側3分の1程度が、府道の拡幅によって削り取られるため、その範囲を対象として行った。引地城の位置する丘陵の北東側から北側にかけては道路から急峻に立ち上がる崖となり、西側には民家が建てられて丘陵裾部を削り取っている。調査は、平成6年度に、丘陵頂部の主郭部分について面的な調査を行った。平成7年度は、平成6年度に試掘調査の行われた丘陵斜面部と帯郭部分、約700㎡を対象に行った。

現地調査は、平成7年11月21日から開始した。表土掘削は、昨年度同様、人力によって行った。表土と流土を除去すると、すぐ地山となる。調査では、平成6年度に行われた地形測量によって

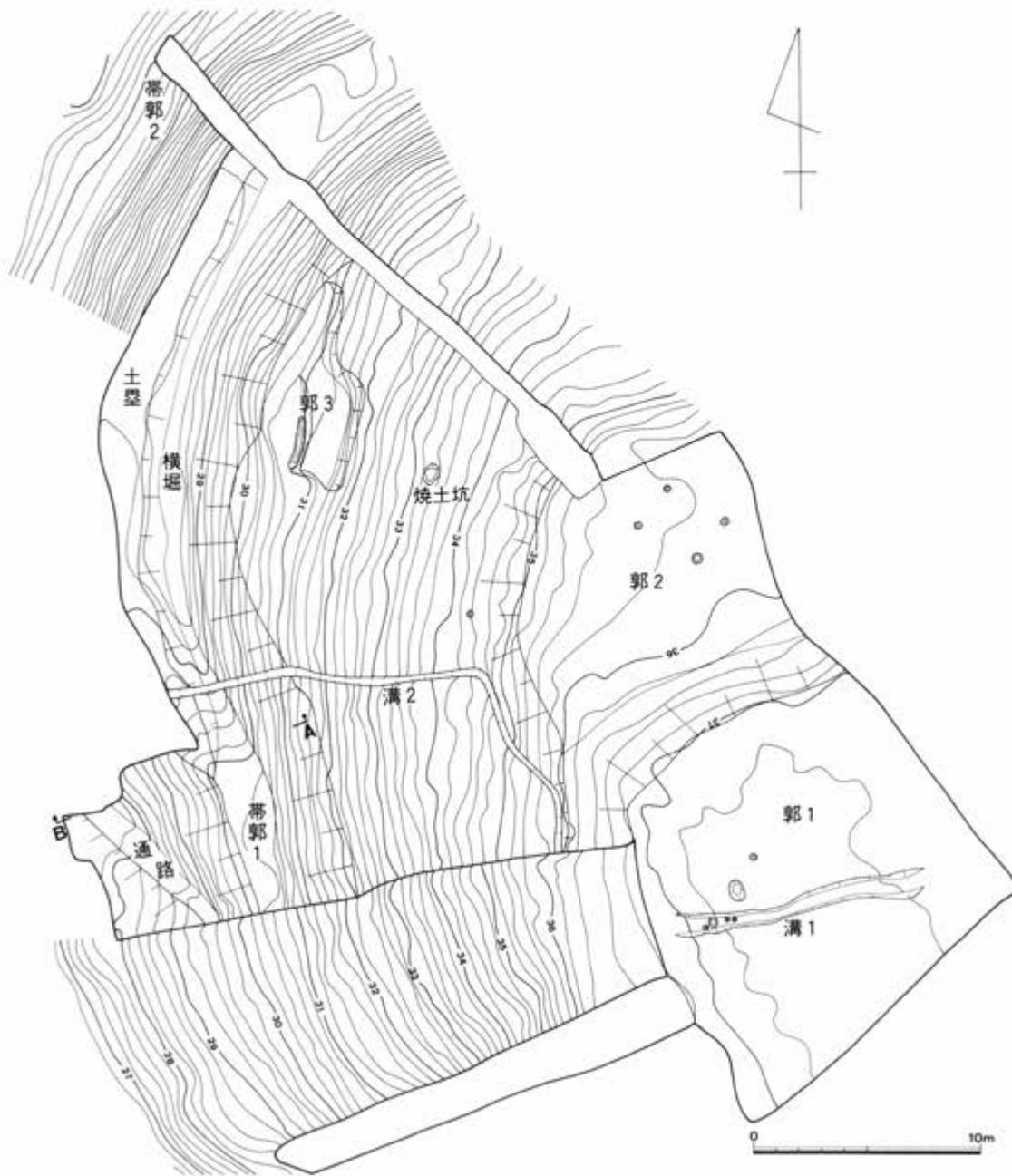


第10図 引地城跡地形測量図

確認されていた帯郭・土塁・横堀のほか、完全に埋没した郭状の遺構・通路・排水溝などを確認した。

南有路城跡は、引地城跡の北東約130mに位置する。今回の調査では、由良川に向かって西へのびる小規模な丘陵稜線上に小規模な平坦面が認められたため、試掘調査を行った。しかし、顕著な遺構は認められなかった。調査面積は、約40㎡である。

両城跡の概要が明らかになった平成8年2月22日に、関係者を対象とした説明会を実施し、翌2月23日には、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。2月28日にはすべての作業を終了し、現地を撤収した。



第11図 引地城跡調査後地形測量図

4. 調査の概要

(1) 引地城跡

① 検出遺構

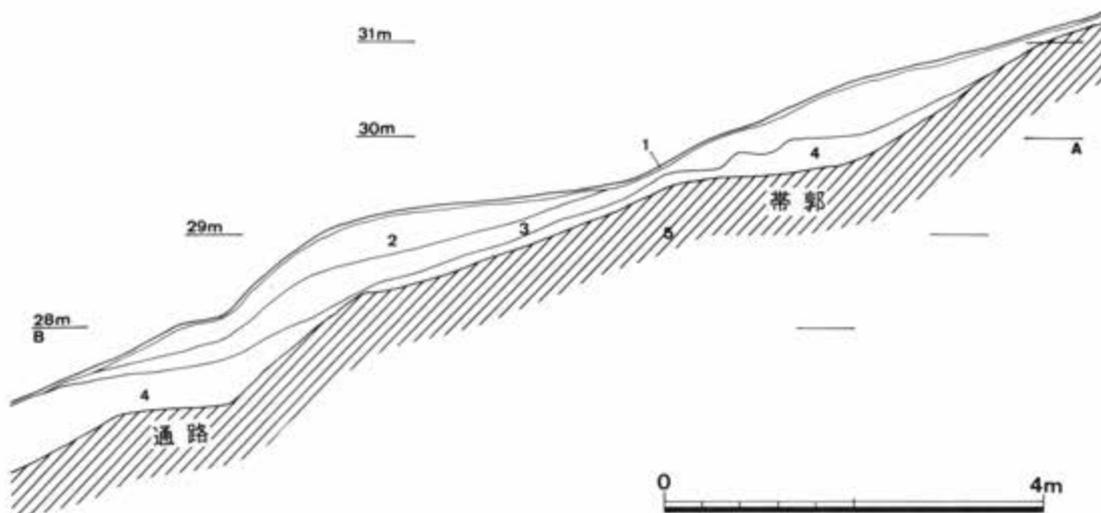
引地城跡における基本的な土層の堆積状況は、表土(第1層)・暗黄褐色土～黄褐色土(第2層)・赤褐色ないし橙褐色土(第3層・地山)である。丘陵斜面部では、第2層はわずかしこ堆積しておらず、すぐ地山となる。しかし、帯郭や通路では、第12図に示すように、1mほど堆積している状況が明らかになった。今回の調査では、帯郭・土塁・横堀・通路・排水溝などを検出した。遺構の多くは、地山を掘削して造られている。以下、その概要について述べる。

郭 郭1・2は、平成6年度に調査が終了している。郭2では、柱穴4個が検出されているが、城に伴うものかどうか不明とされている。郭3は、丘陵北側斜面で検出された小規模な平坦面である。平坦面上には柱穴などは確認されず、また遺物も出土していないが、引地城跡に伴う遺構である可能性は高い。なお、郭1上の溝1は、今年度の再精査によって確認した。

溝1 郭1を南北に区画する東西方向の溝である。平成6年度の調査概要では、SX01として報告されていたが、再精査の結果、さらに東西方向にのびることが明らかとなった。全長11.2m分を検出した。本来は郭全体を横切っていたと思われる。幅0.8m・深さ0.3mを測る。

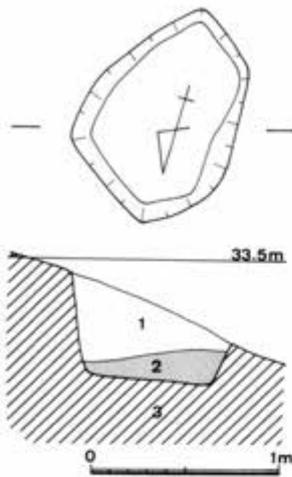
溝2 引地城跡の西側斜面を北へ向かってのび、郭1と郭2の接する付近で直角に西へ向きを変える幅0.3mの溝である。この溝は、第2層を除去することによって確認できたこと、帯郭1の底面にも溝が認められることなどから、引地城跡に伴う溝と考える。SD02が、郭1の平坦面に取り付くのか、あるいは郭1をめぐるのかは不明であるが、ここでは郭1からの排水溝としておきたい。

土塁 斜面中腹に築かれた長さ約30m・高さ約0.6mを測る土塁である。調査地の北西側のみに認められる。土塁は、背後の丘陵地山を掘削して得られた土を盛り上げて造られている。土塁



第12図 帯郭1～通路土層断面図

1. 表土 2. 茶褐色土 3. 暗黄褐色土 4. 黄褐色土 5. 赤褐色土または橙褐色土



第13図 焼土坑実測図

1. 茶黄色土
2. 黒褐色土(炭を多く含む)
3. 橙褐色土(地山)

上には、柱穴などは認められなかった。

横堀 土塁と丘陵斜面の間は横堀となっている。横堀の底面はゆるやかな曲面を描いている。帯郭1付近から土塁が認められなくなるが、これは、横堀の底面がゆるやかなスロープを形成して約1mほど高くなり、帯郭1につながるためである。底面には、柱穴などは認められなかった。

帯郭1 地形測量の結果によれば、引地城跡には、少なくとも2段の帯郭の存在が確認できた。帯郭1は、標高30m付近にみられる。帯郭1は、横堀の底面とゆるやかな傾斜でつながっている。検出したのは長さ7.0m・幅2.1m程度にとどまる。柱穴などは認められなかった。

帯郭2 標高25~27m付近に認められるが、一部を調査したにとどまり、全体像は明らかではない。

通路 帯郭1と帯郭2をつなぐ通路(幅1.2m)を検出した(第11図)。通路は、完全に埋設しており、調査前には、全くその存在を知ることはできなかった。検出した範囲内には、柱穴などを確認することはできなかった。なお、この通路とそれぞれの帯郭のつながる部分は、未調査で明らかにすることができなかった。通路上には、柱穴などは認められなかった。

焼土坑 北側斜面で、側壁が熱を受けた土坑を検出した。底面は熱を受けていない。規模は、長辺1.0m・短辺0.8m・深さ0.6mを測り、ややいびつな長方形を呈する。土坑内下層は炭を大量に含む。炭窯と思われる(第13図)。

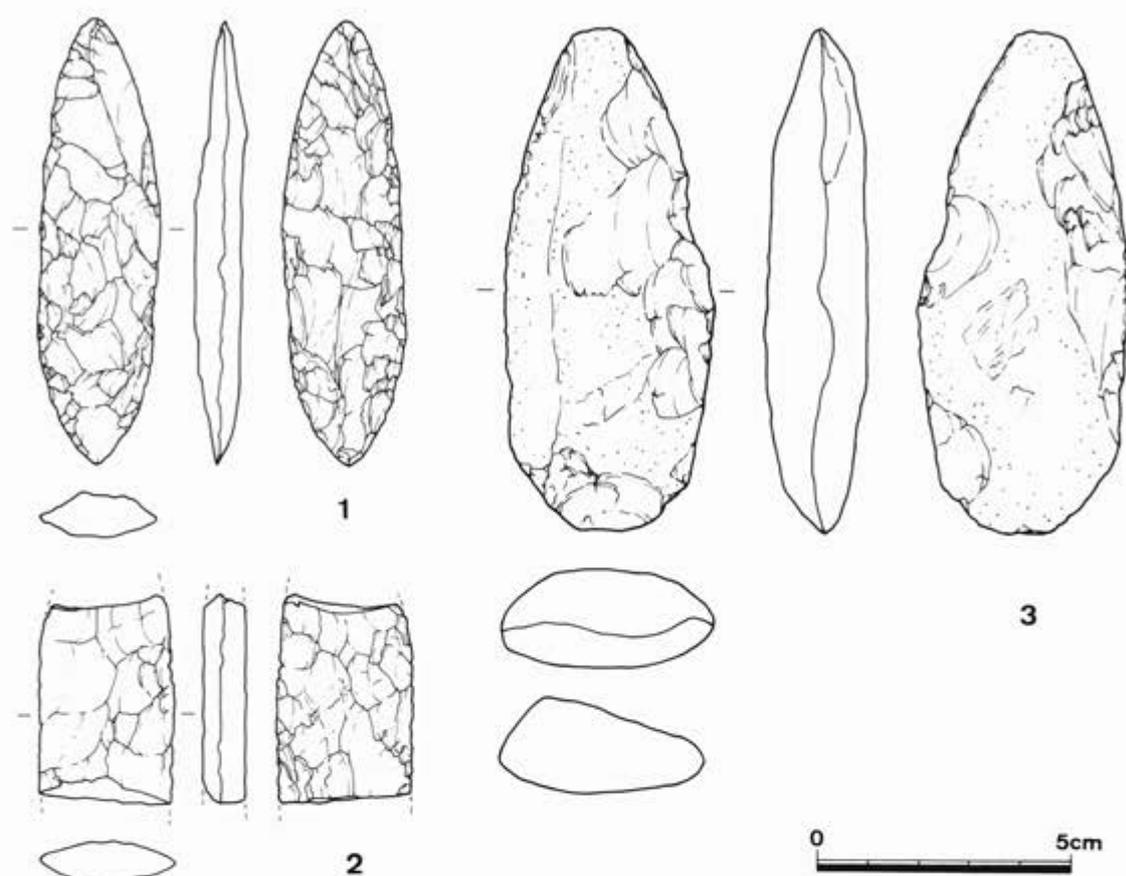
なお、地形測量で虎口と考えられた郭2の西側では、調査の結果、虎口と思われるような遺構は確認されなかった。

②出土遺物(第14・15図、図版第12)

出土遺物としては、縄文時代草創期の石器や古墳時代の須恵器、中世末期の輸入陶磁器などがある。これらは、いずれも丘陵流土中から出土し、細片化しているものが多い。ここでは、比較的残存状態のよかった遺物について取り上げる。なお、出土遺物の量は、整理箱にして1箱程度である。

(筒井崇史)

石器 山城の斜面の掘削中に出土した縄文時代の石器である(第14図1~3)。1は、尖頭器である。欠損部はなく完形品である。全体形は細身の柳葉形状に仕上げられている。断面形は凸レンズ形である。調整は、表表面及び先端・基部とも精粗なく均等に施されている。長さ8.8cm・幅2.5cm・厚さ1.0cm・重さ20.3gを測る。石材はサヌカイトである。2は、尖頭器の中間部の断片である。素材の形態及び加工のされ方から有舌尖頭器の可能性はある。断面形は薄い凸レンズ形である。調整は両面加工である。表面の中央の稜は明瞭に通っている。残存長4.1cm・幅2.6cm・厚さ0.9cmを測る。石材は、サヌカイトである。3は、自然礫の一部に若干の加工を施し



第14図 出土石器実測図

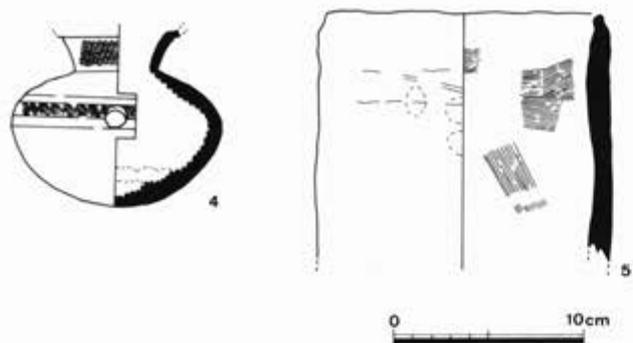
た礫石斧である。縄文時代でも古い時期と思われるが、尖頭器に伴うものかどうかについては不明である。長さ10.0cm・幅4.1cm・厚さ2.0cm・重さ90.0gを測る。凝灰岩を石材としている。

縄文時代草創期の尖頭器・有舌尖頭器は、大江町内では初めての出土例である。この時期の尖頭器は、岡村道雄氏によると4つの形態に区分される⁽¹⁸⁵⁾。第1は、長さが10cm以上と長く大型で、最大幅が下半にくるもの(神子柴型尖頭器)、第2は、幅が長さの2分の1以下で細身のもの(柳葉形尖頭器)、第3は、幅が長さの2分の1以上で幅広のもの(木葉形尖頭器)、第4は、最大幅が中央部にくる左右非対称の半月形を呈するもの(半月形石器)である。この資料は、第2の形態に相当する。

(黒坪一樹)

土器 引地城跡から出土した土器には、須恵器・土師器・陶磁器などがある。しかし、出土した土器の大半が細片化しており、図示し得たのは第15図に示した2点のみである。4は、須恵器甕である。残存高9.4cm・体部最大幅11.1cmを測る。頸部と体部に波状文を施す。頸部は20条、体部は13条を数える。外面はナデ調整、内面は不明である。おおむねTK23～47型式に位置づけられよう。

5は、土師質の筒形容器である。残存高13.3cm・口径7.2cmを測る。外面はナデ調整、内面はハケ調整を施す。色調は淡褐色である。底部と思われる小片もある。経筒か。



第15図 出土土器実測図

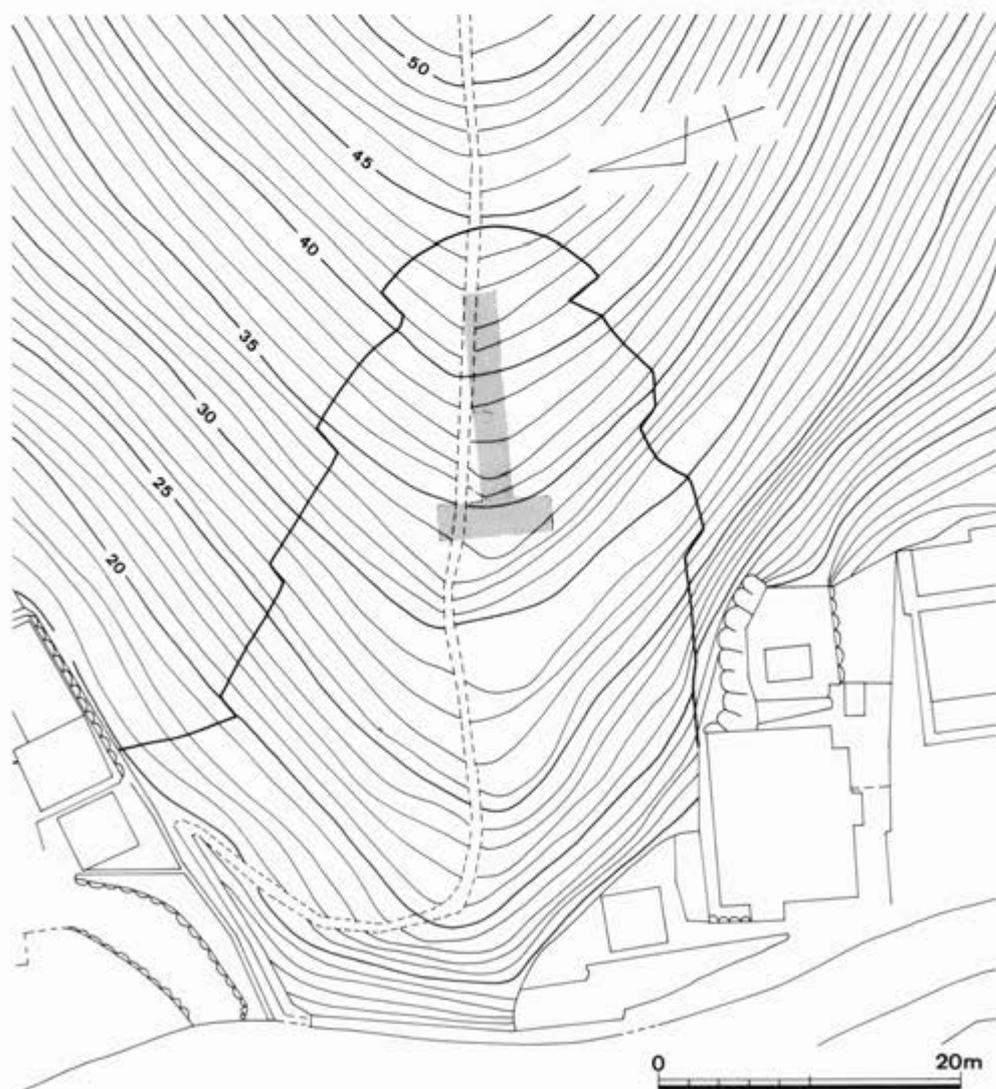
このほかにも輸入陶磁器片(図版第12)をはじめ、古墳時代の須恵器甕の破片や時期不明の土師器片などが出土している。

(2)南有路城跡(第16図)

南有路城跡は、小規模な平坦面が4か所認められたため、まず試掘を行った。平坦面のうち最下段のものは、ごく

最近まで墓地として利用されていたので、標高34m付近から上に試掘トレンチを設定した。試掘トレンチは長さ16.0m・幅2.0mで、平坦面では一部直交する方向にも設定した。しかし、試掘調査の結果、南有路城跡はもちろん、ほかの時代に属する遺構さえ確認できなかった。

今回の調査地は、地形的にみて、特に防御施設などが必要だった場所とは思われない。したがって、調査地は、南有路城跡の外縁辺部に当たると思われる。(筒井崇史)



第16図 南有路城跡調査地地形測量図

5. ま と め

①引地城跡の測量調査について

引地城跡全体の規模や各施設の機能を推察する上から、地権者(土佐健一氏)の了承を得て、調査地南側の測量作業を実施した。山城全体をカバーするものではないが、引地城の中心部である重要な施設の多くを含んでいる。この地の現況が竹林及び栗林であり、いささか改変されているものの、堀切、複数の郭、通路状遺構、城の周囲を長くめぐる帯郭、土塁・横堀などの遺構を確認することができた。本来ならば、縄張り図を作成すべきであるが、ここではあえて平板測量図を最大限に生かし、認定しうる遺構をわかる範囲で描き込むこととした(第10図)。

以下、各遺構についてみる。まず、郭1の溝状遺構から南に約20mいくと、幅約2.5mの浅い堀切状の遺構がある。この堀切は、周囲をめぐっている帯郭と接続し、通路として機能していたようである。堀切の南側は50m²程度の平坦面があり、一つの小さな郭(郭4)になる。この郭4の南端からさらに南西方向に尾根が続く。この尾根筋に沿って、四角形の大きな郭5(東西約25m・南北約13m)、さらにこれに連なって郭6、郭7が存在している。郭6と郭7の間には通路らしき遺構も認められる。帯郭は、郭5～7の北側にも平行しており、宅地造成のため、接続の状態は不明であるが、南側の帯郭に繋がって機能したものと見える。なお、郭7の中心部で、石臼(粉引き臼)の破片を1点採集している。これは、上臼の破片である。すりあわせ部の主溝は、1本1本掘られたもので、浅くて粗い。供給口は、上下から穿たれている。

さらに、郭5の南側は約3mの落差がある。斜面を下ると、そこに深く顕著な横堀と土塁が存在している。防御用施設かと思われる。そこから西側には、土塁・横堀はなく、平坦な帯郭がめぐる。

また、測量はしていないが、南側の土塁・帯郭から南側は、さらに急斜面で低くなる。平坦な土地(郭)で、かなり広い面積を占める。建物跡などの遺構の存在する可能性が高い。ここまでを引地城の範囲とすると、東西約60m・南北約170mの規模となる。標高は、郭5の38.3mを最高点とする。

(黒坪一樹)

②引地城跡の発掘調査成果について

引地城跡は、全体のおよそ3分の1を対象として調査を実施した。その結果、上下2段になった丘陵頂部の主郭や、丘陵斜面部の腰郭・帯郭・土塁・通路などを比較的良好な状態で検出することができた。大江町では、これまで中世山城の調査は行われたことがなく、今回の発掘調査は、その一部を明らかにしたという点で大きな成果といえる。

引地城跡の性格については、その立地から由良川の水運などを監視するために造られた出城的な意味合いが強いと思われる。尾根続きに約500m離れたところには「本丸」という地名があり、これとの関連が注目される。また、すでに指摘したように河守の平野部を中心として山城相互の連携的な関係があるように思われるが、隣接する舞鶴市地頭に所在し、平成6・7年度に発掘調査が行われた大俣城跡(註6)もほぼ同時期の城跡であり、中世末期における由良川水系の中世山城に注

目してみることも必要と思われる。

また、今回の発掘調査で、縄文時代草創期の尖頭器が出土し、当時この付近に人々がすでに生活していたことが明らかになった。さらに、古墳時代の遺物も出土しており、調査地周辺に古墳などの遺構が存在すると考えられる。

(筒井崇史)

注1 黒坪一樹「引地城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注2 調査に参加された方々は次の通りである。

妹尾活明・宇田員将・江野道和・柏木大延・金親満夫・福田和浩・藤村 俊・中村ひろみ・上原正義・上山 勇・上山政恵・木ノ下健之輔・倉橋 寛・四方千佳子・白樫ひとみ・中村茂治・奈良井恭子・奈良井末子・広岡節子・広岡はつ枝・福井裕子・真下イヨ子・真下義夫・真下義雄

注3 中谷雅治ほか「高川原遺跡発掘調査報告書」 大江町教育委員会 1975

注4 三好博喜「河守遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

注5 岡村道雄「第12章 縄文文化の始まり」(『日本旧石器時代史』 雄山閣) 1990 194～195頁

注6 大岩洋一「大俣城跡の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第58号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

3. 千代川遺跡第20次発掘調査概要

1. はじめに

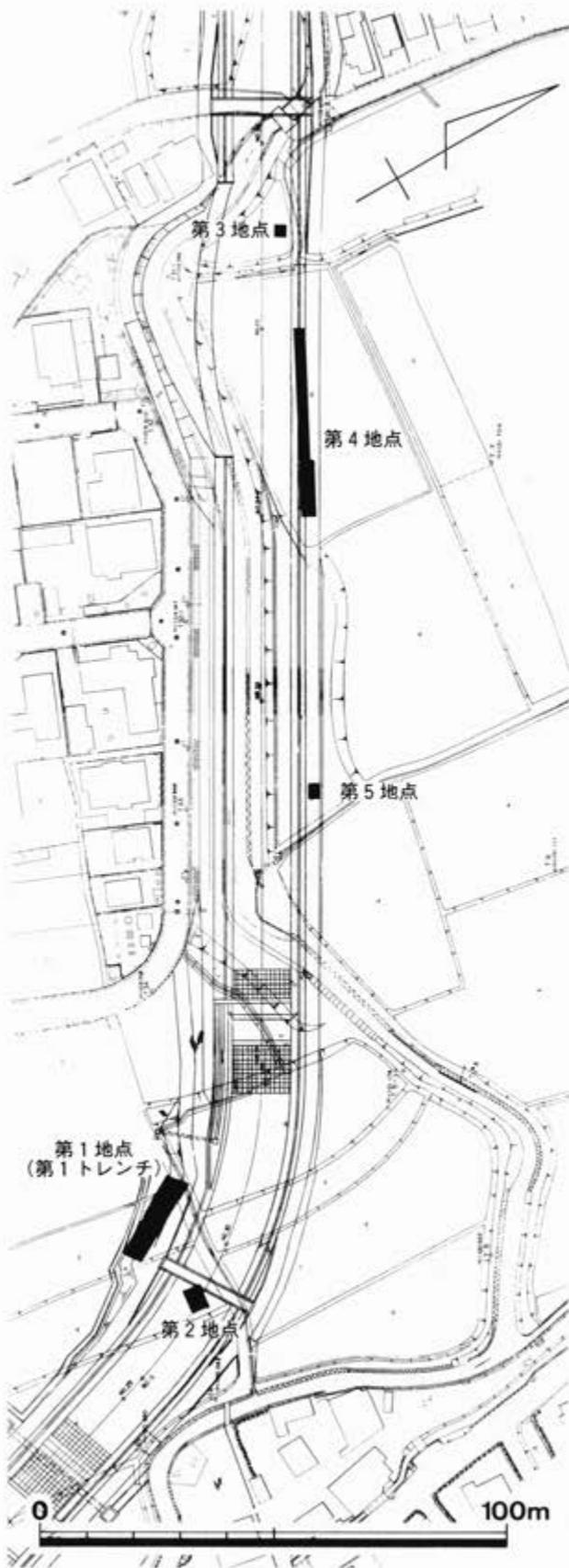
千代川遺跡は、亀岡盆地北西部に位置する縄文時代～中世に至る大規模な複合集落遺跡である。近年の京都縦貫道関係の開発を中心とした20次にわたる発掘調査により、多くの考古学的知見が得られ、遺跡の北半部の拝田、桑寺周辺は、初期丹波国府推定地として知られている。

今回の発掘調査は、一級河川千々川改修工事に伴い、京都府亀岡土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、亀岡市千代川町湯井にあつて、行者山東麓に広がる扇状地上に位置する、千代川遺跡の東端にあたり、国庁推定域からやや南東に外れた地点にある(第17図)。



第17図 調査地位置図(1/25,000)

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 上川関古墳群 | 2. 拝田古墳群 | 3. 桑寺廃寺 | 4. 丹波国府推定地 |
| 5. 千代川遺跡 | 6. 馬場ヶ崎遺跡 | 7. 小金岐古墳群 | 8. 北金岐古墳群 |



第18図 トレンチ配置図(1/1,500)

調査は、約200m²を対象とし、平成7年11月6日～12月8日まで実施した^(注1)。調査経費は、全額京都府亀岡土木事務所が負担した。現地調査は、奥村清一郎、野々口陽子が担当し、報告は野々口が行った。

2. 位置と環境

千代川遺跡の位置する行者山東麓の地域は、ゆるやかな段丘状の地形を呈した微高地であり、縄文時代から中世に至る遺跡が濃密に分布する地域である。

縄文時代の遺物としては、千代川遺跡の北半部の地点の第13次調査において、縄文時代早期後半の楕円形押型文土器が出土しており、また今回の調査地点の西側の台地上を調査した第11次調査では、縄文時代晩期の遺物が大量に出土した^(注2)。縄文時代後・晩期の土器は、近接する小金岐古墳群下層遺跡、北金岐遺跡、太田遺跡においても出土している。

弥生時代前・中期には、環濠集落として知られる太田遺跡があり、後期には、北金岐遺跡で竪穴式住居跡が検出されている。千代川遺跡第11次調査でも、中期の方形周溝墓が確認されており、南西部の台地上の2次、5次調査では、後期から古墳時代前期にかけての集落の存在が明らかになっている。

歴史時代の遺跡としては、北半部の丹波国府推定域を中心とする9・12～16次調査で、白鳳期の瓦が出土した桑寺廃寺が調査され、北東部を中心に奈良時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡や素掘り溝群が検出されている。

2. 調査概要

調査対象地の西側は、台地状の高台になっており、1986年に亀岡市教育委員会により発掘調査が行われ、縄文時代晩期の遺物や弥生時代中期の方形周溝墓が検出されている。千々川は、この台地の外側を、北から東にかけて迂回するように流れており、今回の調査対象地は、その流域の低地部分にあたる。台地部とは、約4～5mの比高差をなす。

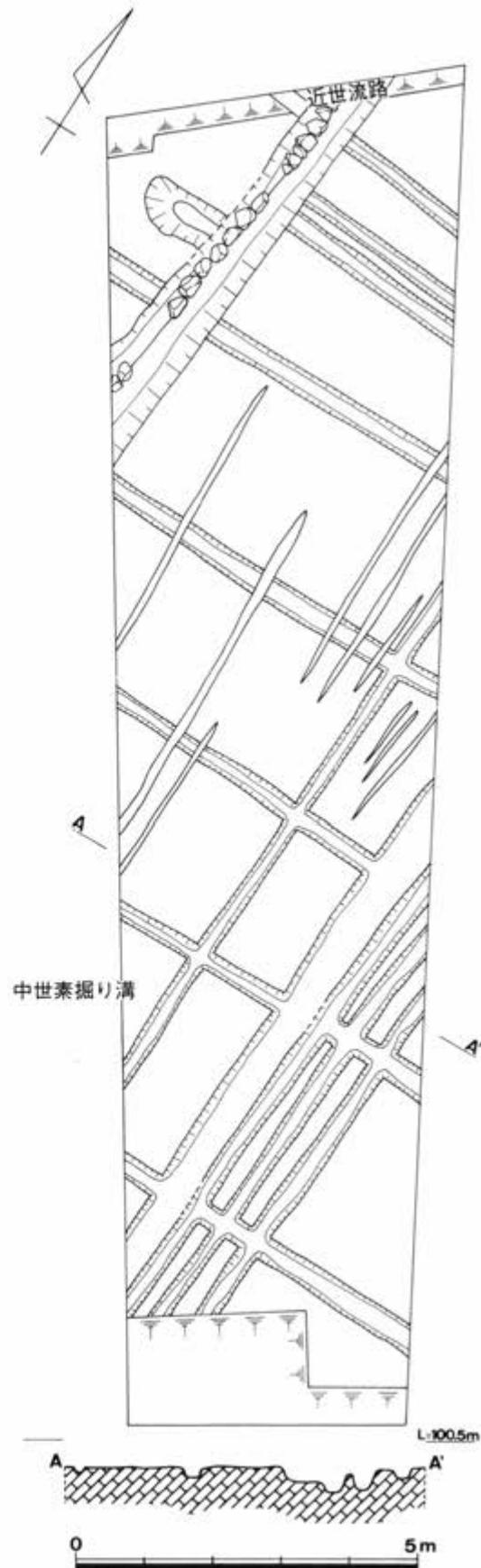
調査地点は、台地北側に3か所の調査区(第18図第2～4地点)を設定し、東側に2か所(第1、5地点)の調査区を設定した。

第1地点は、千々川の西岸に約20m×5mのトレンチ(第1トレンチ)を設定し、約100㎡を対象とした。

層位は、表土下約0.3mのところ、厚さ0.2～0.3mの暗黄灰褐色粘質土の薄い遺物包含層があり、弥生土器・須恵器・瓦器などが出土した。南東端を断ち割ったところ、その下層には濁黄灰褐色砂質土及び、濁灰褐色砂質土の厚さ約0.5～0.8mの無遺物の砂層があり、さらにその下部に厚さ約0.3～0.4mの黒色強粘質土、次いで青灰色強粘質土がみられた。この状況は、第5地点の土層堆積状況と全く同様である。

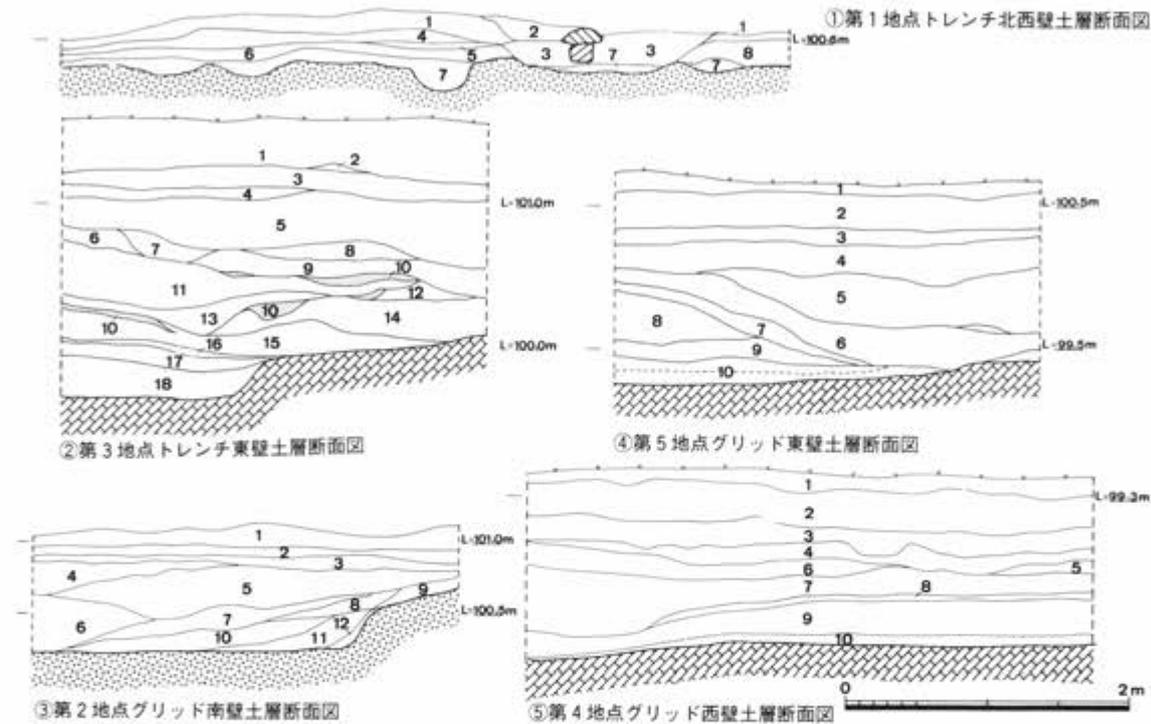
第1トレンチでは、素掘り溝群を中心とする中世の遺構面を検出した。素掘り溝は、幅約0.3～0.4m・深さ約0.2mを測る。素掘り溝の暗茶褐色粘質土の埋土中から、須恵器・土師器などに混じって、瓦器片が出土しており、中世の素掘り溝と推定される。

素掘り溝は、磁北を北とする方位に平行して、縦横に整然と掘削されている。トレンチ南半には、幅約0.5～0.6m・深さ約0.4mの南北方向の大きな素掘り溝があり、中心的な配水路であったとみられる。南北方向の素掘り溝は、一部



第19図 第1トレンチ遺構平面図

の掘削によるため、掘削間隔は明らかにできないが、東西方向の溝は、約2～2.5mの間隔に掘削されており、比較的均等な状況がみられる。トレンチ内からは、ピットなどの遺構は全く検出されておらず、千々川の氾濫原にあたる低湿地のため、耕作地として利用されたと推定される。トレンチ北半からは、石列とその前面に付設された幅約0.5mの流路が検出されたが、これは近代以降の畦畔とは異なる。中世の素掘り溝を断ち切っていることから、近世の流路とみられる。



第20図 土層断面図

①第1地点トレンチ北西壁土層

1. 暗灰褐色粘質土
2. 淡褐色土
3. 淡灰褐色粘質土
4. 淡褐色粘質土
5. 黄灰褐色粘砂土
6. 暗黄灰褐色粘砂質土
7. 暗茶褐色粘質土
8. 灰褐色粘質土

②第3地点東壁土層断面

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1. 耕作土(重機により約30cm廃土) | 10. 灰褐色砂質土(遺物包含層) |
| 2. 暗茶褐色砂質土 | 11. 淡褐色砂質土 |
| 3. 淡灰褐色粘砂質土 | 12. 茶灰褐色砂質土 |
| 4. 暗灰褐色粘砂質土 | 13. 濁灰褐色砂質土 |
| 5. 淡灰褐色砂質土 | 14. 青灰褐色砂質土 |
| 6. 暗黄灰褐色砂質土(鉄分若干含) | 15. 濁乳白色砂礫土 |
| 7. 淡黄褐色砂質土 | 16. 淡灰褐色砂礫土 |
| 8. 暗灰褐色砂質土 | 17. 明灰色砂質土 |
| 9. 濁黄灰褐色砂質土 | 18. 濁灰褐色砂礫土(地山風化土か) |

③第2地点グリッド南壁土層

1. 暗灰色粘質土(耕作土)
2. 灰白色粘質土
3. 茶灰褐色粘砂質土(鉄分多い)
4. 灰褐色粘砂質土
5. 灰褐色砂礫層
6. 濁茶灰褐色粘質土
7. 暗茶灰褐色砂質土
8. 明灰褐色砂質土
9. 暗灰褐色砂質土
10. 灰褐色砂礫土
11. 明灰褐色砂礫土
12. 暗灰褐色砂礫土

④第5地点グリッド東壁土層

1. 暗褐色粘質土(表土)
2. 淡黄灰褐色粘砂土
3. 暗黄灰褐色粘砂土
4. 灰褐色粘砂土
5. 黄灰褐色砂質土
6. 暗灰褐色砂質土
7. 灰白色粘質土
8. 淡灰褐色砂質土
9. 灰褐色砂質土
10. 淡茶灰褐色砂質土

⑤第4地点グリッド西壁土層

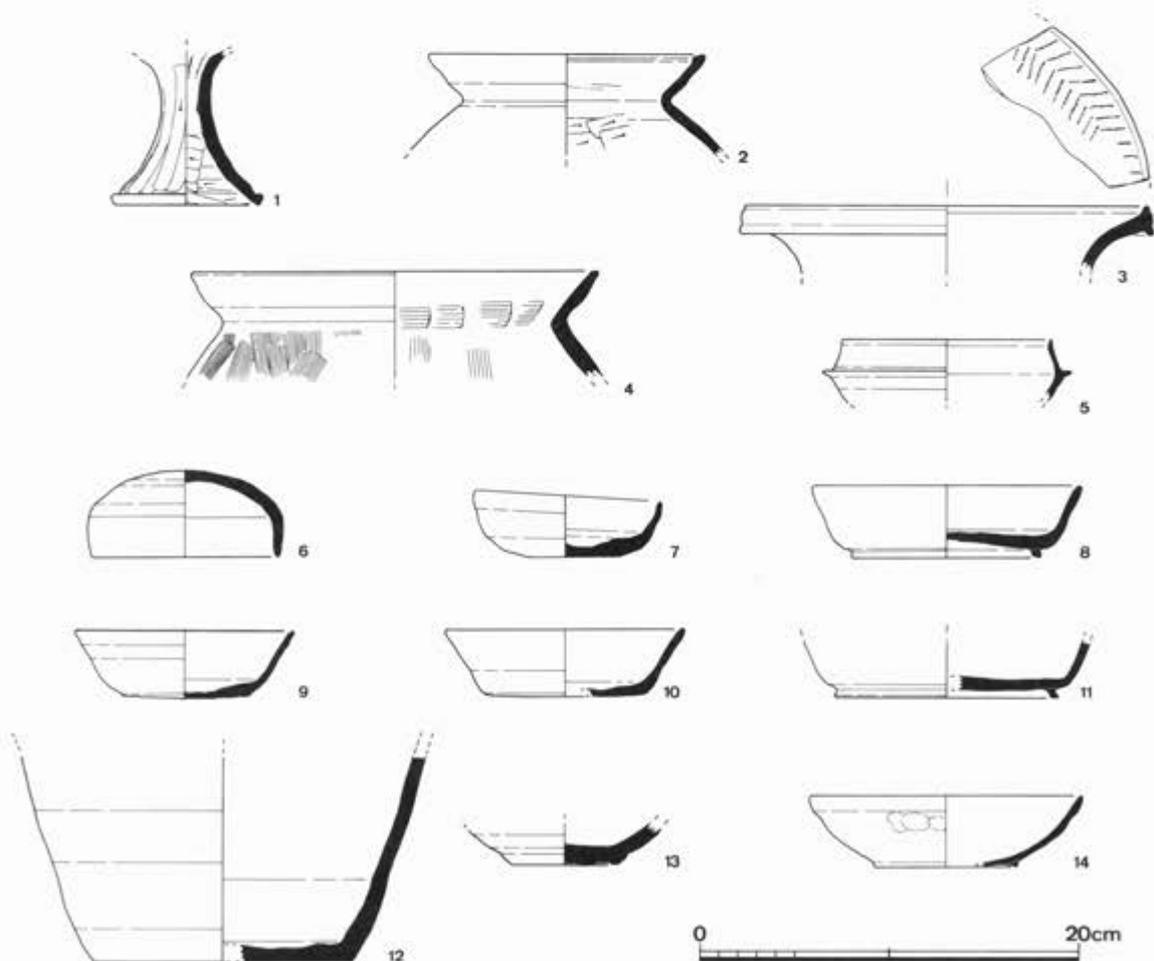
1. 耕作土
2. 暗灰褐色粘質土
3. 暗黄灰褐色粘質土
4. 濁黄灰褐色砂質土
5. 灰褐色砂質土
6. 淡灰褐色砂質土
7. 濁灰褐色砂質土
8. 黄褐色粘質土
9. 黒色強粘質土
10. 暗青灰色強粘質土

第2～4地点は、台地部とその北に大きく広がる段丘状地形との狭間にあり、千々川の氾濫原にあたる。第1・5地点以上に砂礫層の堆積が厚く、遺構は検出されなかった。第3地点において、トレンチ東端を断ち割ったところ、表土下約2mにわたって砂礫層が交互に堆積し、その最下部で安定した地山面を検出した。この砂礫層の間に、縞状に灰褐色砂質土の遺物包含層があり、弥生土器や、古墳時代～奈良時代の須恵器が出土した。度重なる河川の氾濫により、遺構は削平されたものとみられる。第4地点は、遺物の出土がほとんどみられず、土層は細かな砂層の互層からなる。表土下約2mのところ、砂層直下に安定した地山面を確認した。

4. 出土遺物

出土遺物は、弥生時代から中世のものを含み、第3地点で最も多く出土した。

1・3は、第4地点で出土した弥生土器である。1は、高杯脚部であり、外面にヘラナデ、内面にヘラケズリを施す。3は、壺の口縁部であり、口縁端部外面に2条の浅い凹線を施し、内面に櫛描き羽状文を施す。2は、第1トレンチから出土した「く」の字状口縁の布留式甕である。内側に肥厚する口縁端部をなし、体部内面はていねいにヘラケズリする。口径は、14.6cmを測る。



第21図 包含層遺物実測図

1・3. 第4地点 2. 第1地点 4～11. 第3地点 12～14. 第5地点

4～11は、第3地点で出土した。4は、「く」の字に外反する単口縁の甕である。体部内外面にハケ調整を施し、口径21.3cmを測る。5は、須恵器杯身で、口縁端部内面に段をなす。6は、須恵器杯蓋であり、天井部をていねいにヘラケズリする。7は、須恵器杯身で、底部はヘラ切り未調整である。9・10は、篠窯跡産と推定される杯Aであり、それぞれ口径11.4cm・12.4cmを測る。8・11は、杯Bであり、底部やや内面よりに、高台を貼りつけている。8は、口径14.2cm・器高3.8cmを測る。12は、底部に回転糸切り痕のみられる平底の須恵器壺である。13は、内面に淡緑色の施釉のみられる杯底部で、削り出しによる断面台形の輪状高台をなす。14は、瓦器碗破片であり、口径14.1cm・器高3.7cmを測る。磨耗が著しく、暗文などの調整は不明である。

5. ま と め

今回の調査では、丹波国府推定域を南東に外れた千々川流域を対象地とした。第1調査地点では、素掘り溝群を中心とした中世の遺構面を検出した。素掘り溝は、丹波国府推定域を中心とした千代川遺跡北半部の調査においても多数検出されている。今回検出した素掘り溝は、過去の検出例と同様、磁北を北とする方位に、平行あるいは直交して縦横に整然と掘削されている。国府推定域周辺での調査では、それらは方向性からみて、条里制地割りの方位と一致している可能性が高いとされる^(注4)。遺跡南東部でも、こうした中世の素掘り溝が見つかったことで、中世における方形地割りのあり方について検討する際の参考資料となろう。

また、調査地の西側にあたる台地上では、過去の調査で、縄文土器の出土や弥生時代中期の方形周溝墓の存在が確認されていることによって、今回の調査でも関連遺構の検出が期待された。しかし、調査対象地は台地面からは約4～5m低く、遺構の残存状況が悪く、中世以前の遺構は、河川の氾濫により削平されていた。調査の最終段階で、第1・5地点の表土下、約1.5～2mの青灰色粘土直上に堆積する黒色強粘質土層が、縄文時代の層である可能性を考慮し、一部を面的に掘削したが遺物の包含はみられなかった。

調査区一帯は、千々川の氾濫原にあたり、集落などの営まれた痕跡は認めらず、集落の中心は、調査地北側の「国守ヶ森」という字名が残る段丘状の高台や、西側の台地面の南に広がる緩斜面に展開すると推定される。

(野々口陽子)

注1 調査参加者：松本芳雄、湯浅彰朗、野々村礼子、松山晃子、松本澄枝、林 順子、原田浩年、関口 睦美、藤井矢壽子、井内由美(敬称略、順不同)

注2 森下 衛、鶴島三壽「千代川遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

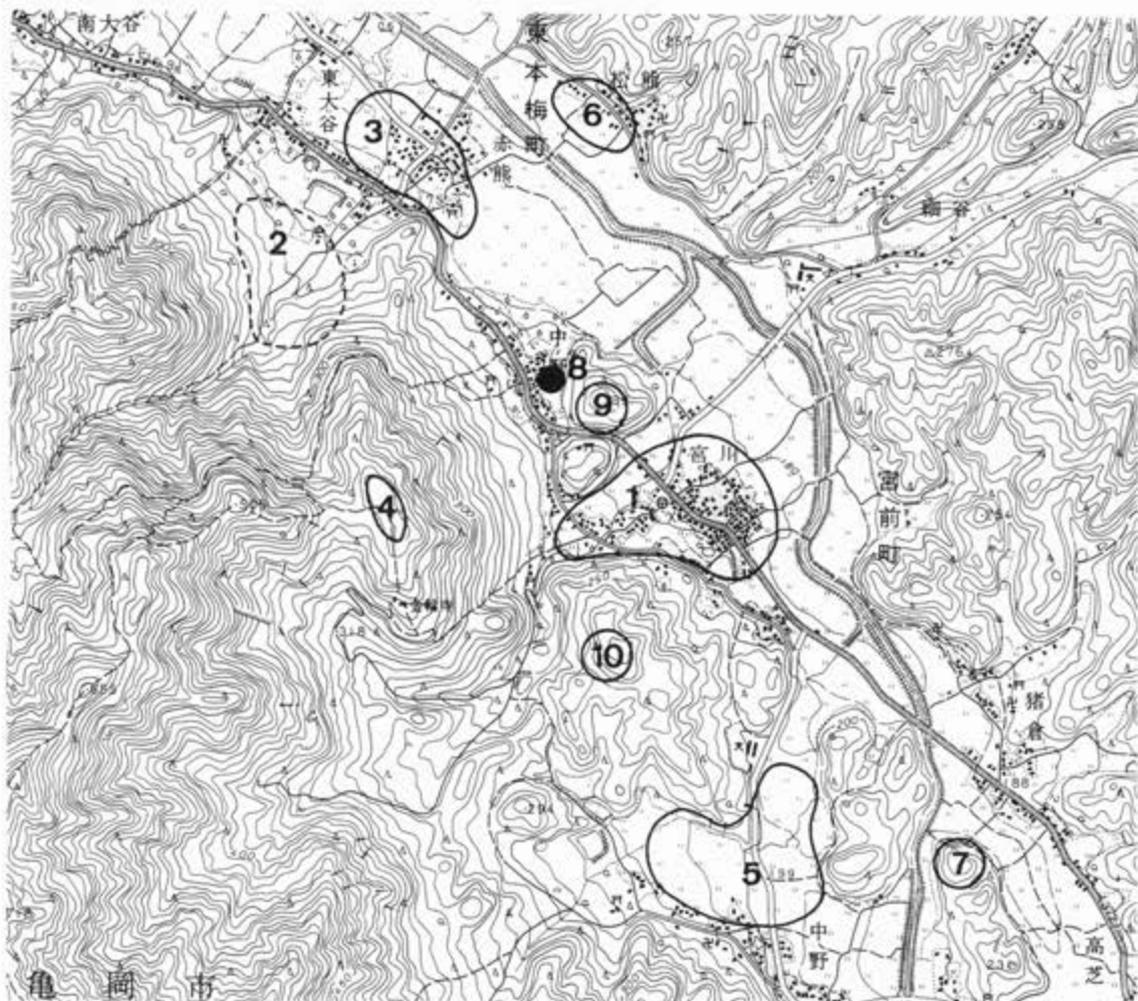
注3 樋口隆久「千代川遺跡第11次発掘調査概報」(『亀岡市文化財調査報告書』第15集 亀岡市教育委員会) 1987

注4 前掲注2 105頁

4. 宮川遺跡発掘調査概要

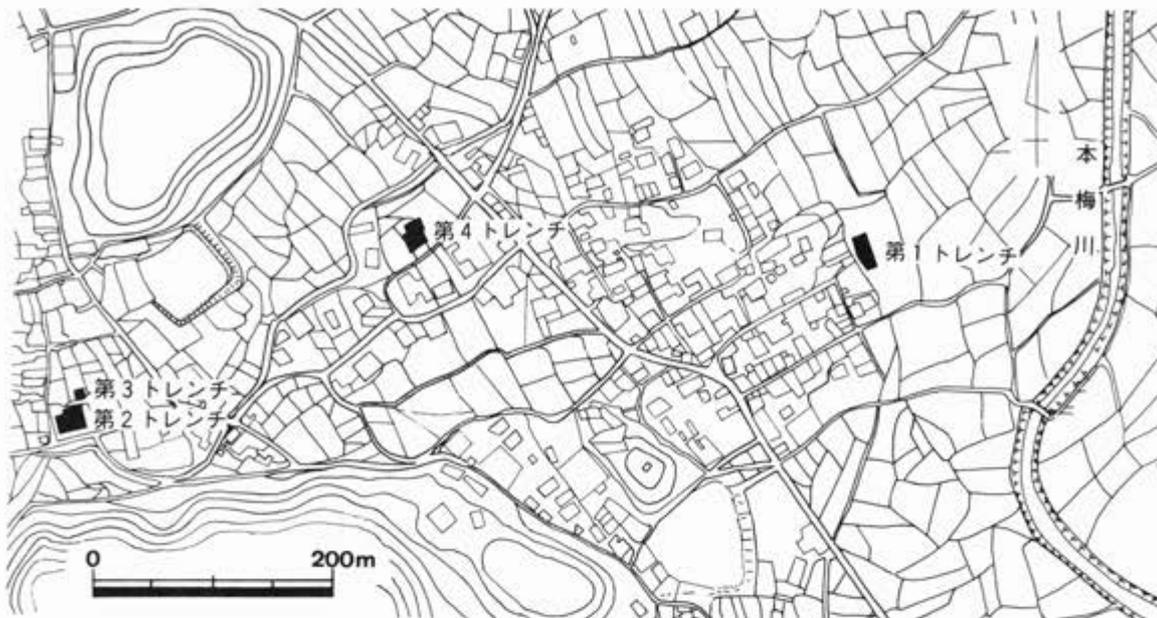
1. はじめに

宮川遺跡は、大堰川の支流である本梅川の左岸の台地上及び平野部に所在する、弥生時代以降中世まで断続的に存続した、大規模な複合集落遺跡である。今般、遺跡を含む約23.0haの水田が、府営ほ場整備事業(平成7年度府営担い手育成基盤整備事業宮川地区)の対象となり、京都府教育庁指導部文化財保護課と京都府農林水産部との間で、その取扱いについて協議が重ねられた。その結果、遺跡の範囲確認を主たる目的とする試掘調査を京都府教育委員会が主体となって実施し、試掘調査に基づく本調査を(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって実施することとなった。以下に報告するのは、当調査研究センターが平成7年度に京都府農林水産部の依頼を



第22図 調査地位置図(1/25,000)

- | | | | | | |
|---------|----------|---------|----------|---------|---------|
| 1. 宮川遺跡 | 2. 赤熊古墳群 | 3. 赤熊遺跡 | 4. 神尾山城跡 | 5. 中野遺跡 | 6. 松熊遺跡 |
| 7. 井内城跡 | 8. 中野古墳 | | | | |



第23図 トレンチ配置図

受けて実施した、同遺跡の本調査の概要である。調査にかかる経費は、京都府農林水産部の負担による。

調査区の確定にあたっては、前年度に試掘を実施された、京都府教育庁指導部文化財保護課の指導を得た。現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同調査員森 正・野々口陽子が担当し、第4トレンチ竪穴式住居跡9については文化財保護課技師福島孝行が担当した。

調査地は、亀岡市宮前町宮川にあって、調査面積は、約1,600㎡を測り、調査期間は、平成7年5月9日から8月11日までの期間を充てた。調査を実施するにあたり、京都府亀岡土地改良事務所・京都府南丹教育局・亀岡市教育委員会の各機関をはじめ、地元関係各位にはさまざまな面で御指導・御協力を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である。

なお、本概報は調査担当者が分担執筆し、野々口陽子が編集を行った。文責は文末に示したとおりである。

(奥村清一郎)

2. 位置と環境

宮川遺跡は、亀岡盆地の西の本梅盆地の中央部に位置し、園部川の支流本梅川の西岸に展開する複合集落遺跡である。本梅盆地は、東は行者山山地、西には深山・半国山山地に囲まれた細く広がる谷底平野的な盆地である。宮川遺跡は、その東を貫流する本梅川によって形成された低位段丘上に展開している。地理的には、亀岡盆地から丹波篠山へ通じる篠山街道沿いにあるとともに、大阪府豊能郡を経て池田・茨木方面へも通じる交通の分岐点である。

本梅盆地では、従来、旧石器時代及び縄文時代の考古学的知見はほとんど知られていないが、弥生時代の遺跡としては、本梅川の東岸に位置する松熊遺跡で弥生時代中期～後期にかけての土

器がまとまって出土している。また、この遺跡では、弥生時代の細形銅剣を精巧に模した銅剣形石剣が採取されており、有力な集落遺跡として注目される⁽¹⁸²⁾。

古墳時代の遺跡では、前・中期古墳の存在は不明であるが、後期には多くの古墳が築かれている。盆地中央部に築造された中野古墳では、巨石が散乱しており、比較的規模の大きい横穴式石室墳であったとみられる。後期群集墳としては、赤熊遺跡の西側の山塊裾部に形成された23基からなる赤熊古墳群があり、横穴式石室を内部主体としている。今回のほ場整備に伴う宮川遺跡の調査でも、損壊した2基の横穴式石室を検出しており、宮川遺跡周辺にも後期群集墳が分布していたと推定される。

本梅盆地では、奈良時代の遺跡はこれまでのところ知られていないが、宮川遺跡の西側の神尾山の山塊裾部には、延喜式内社の「神野神社」とされる宮川神社があり、社殿には祭祀遺跡としても知られる大きな磐座がみられる。

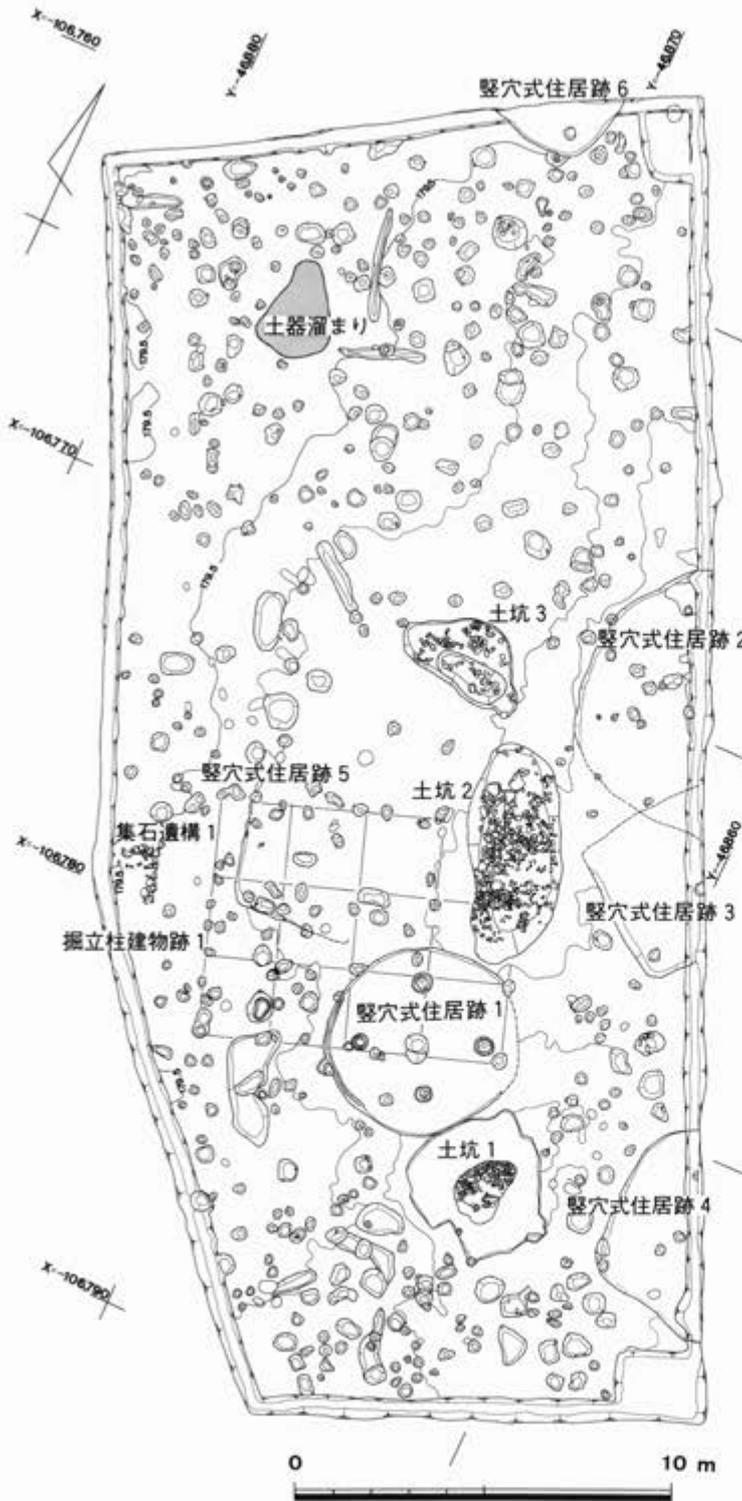
中世には、本梅盆地一帯は、荘園が展開していたと考えられている。中世荘園史に名を残す「野口荘(牧)」は、亀岡市西加舎の延福寺の正和元(1312)年の寄進状に「丹波国野口荘内牧村」とあることから、本梅盆地南部の西加舎付近と推定されている⁽¹⁸³⁾。また、宮川遺跡の東側の神尾山に位置する金輪寺は、延暦年間(782～806)に西願によって開かれ、明恵が再興したと伝えられる山岳寺院であり、寺内には延応2(1240)年在銘とされる九重石塔や、鎌倉時代の仏像などがみられる。山腹の各所には、現在でも僧坊跡とみられる礎石や石垣跡が残っており、宮川遺跡周辺は、金輪寺の興隆とともに中世村落として栄えたと考えられる。神尾山は、山城跡としても知られており、大永6(1526)年11月、柳本賢治が立てこもり、細川高国の将細川伊賢の軍を破り、丹波軍が京都へ攻め上がって桂川で高国軍を破り京都を制圧した時の根拠地である。さらに『天文日記』などによると、天文15(1546)年10月、細川氏綱軍に破れた細川晴元が逃れて、この城に入ったとあり⁽¹⁸⁴⁾、口丹波でも有数の山城であった。

3. 調査概要

ほ場整備対象地区は広範囲に及ぶため、トレンチは、平成6年度の京都府教育委員会及び亀岡市教育委員会による試掘調査の結果を受けて、4か所の地点に設けた(第23図)。宮川遺跡の東部に第1トレンチ、遺跡西部の宮川神社参道に隣接する神尾山山腹に第2・第3トレンチを設定し、さらに現住宅地区となっている遺跡中央部に第4トレンチを設定した。

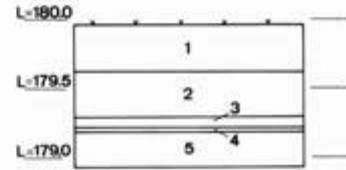
(1) 第1トレンチ

第1トレンチは、平成6年度京都府教育委員会の試掘地点(Ⅳ地区25-2)を取り込み設定した。基本層位は、トレンチ東側では、耕作土の床土の下に、弥生～室町時代までの遺物が認められる約40cmの暗茶褐色粘砂土の包含層が存在し、その下部には暗灰褐色粘質土の中世の遺構面が広がっていた。弥生時代の遺構面は、トレンチの東側でやや低い側の残存状況が良好であり、地山直上で暗褐色粘質土の遺構面がみられた。



第24図 第1トレンチ遺構平面図

形は円形の竪穴式住居跡である。遺構の検出面直上は、中世の瓦器片などが出土しており、壁体は中世の遺構面に大きく削平され、最もよく残存していた南東部でも約5cmを残すにすぎない。竪穴式住居跡の床面の上から中世の掘立柱建物跡の柱穴が切り込んでいる。周壁溝は、南東部分で幅20cm・深さ約5cmを測る。支柱穴は4本であり、径約50cmの掘形を有する。柱穴の深さは、



第25図 第1トレンチ東壁標準土層図

1. 淡褐色粘質土(耕作土)
2. 暗茶褐色粘砂土(包含層)
3. 暗灰褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 黄灰褐色砂礫土(地山)

①検出遺構

弥生時代後期後半～終末頃の竪穴式住居跡は、第1トレンチ内で6棟を検出したが、中世の遺構面に近いため、特にトレンチ西側では壁体をわずかにとどめるにすぎない。また、トレンチ東側は地勢が低くなっており、竪穴式住居跡の残りは西側に比べて比較的良好であったが、調査範囲の拡張が不可能であったため、部分的な検出にとどまったものが多い。

鎌倉時代から室町時代の遺構としては、土器溜まり1、土坑3、集石遺構1、掘立柱建物跡などを検出した。

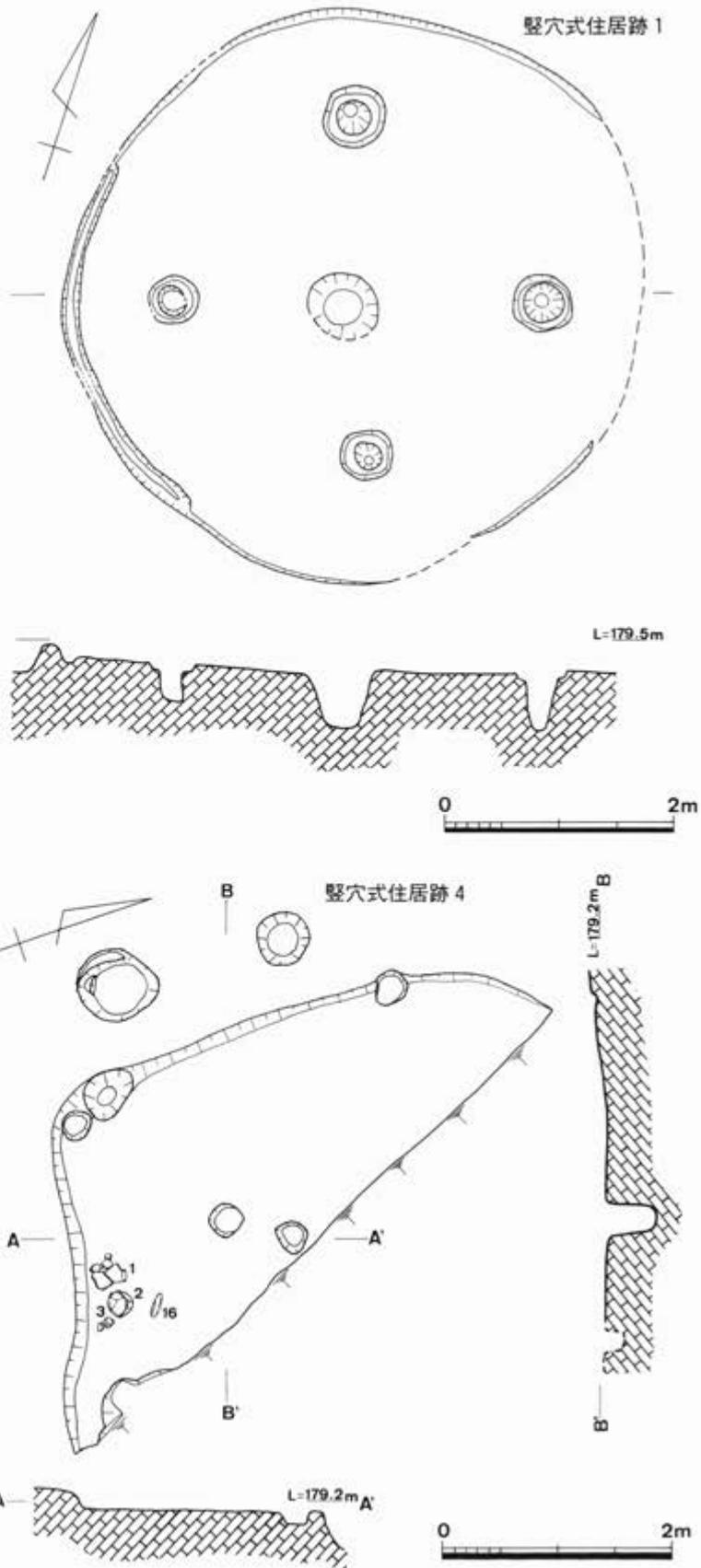
竪穴式住居跡1(第26図) 竪穴式住居跡1は、トレンチ中央部で検出した。南北径約5.1m・東西径約5.0m、平面

検出面で約30~50cmを測る。中央土坑は径約60cm、検出面での深さ約50cmを測る。遺物は、中央土坑から、弥生土器底部(第29図14)、住居跡床面北西部から弥生土器壺底部(第29図13)が出土した。

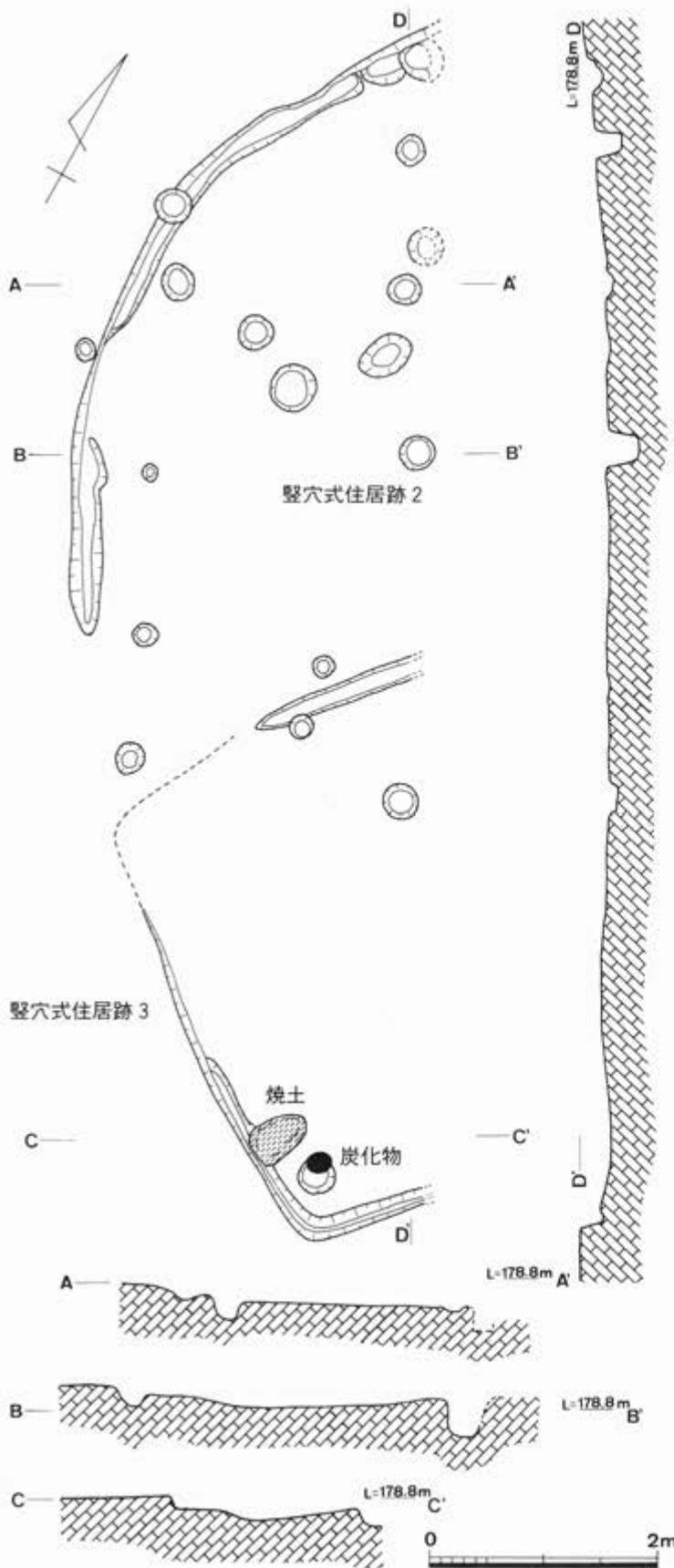
竪穴式住居跡 4 (第26図) 竪穴式住居跡 4は、トレンチ南東隅で検出した。住居跡床面の約2分の1は調査範囲外のため確認できなかったが、東西方向の一辺が押さえられるので、一辺約4.3mになるとみられる。

この住居跡では、南側の一部が壁高約15cmを測り、比較的残存状況がよかったが、周壁溝は検出されなかった。支柱穴は径約30cmで、深さ約10~20cmを測り、壁体に沿って3か所と、床面の中央部で2か所検出した。遺物は、床面東隅で、弥生土器甕、鉢、壺、高杯脚部などの土器類と、石器が出土した(第29図1~6・16)。これらの遺物の周辺では、若干の炭化物が出土した。

なお、焼土などは検出していない。



第26図 竪穴式住居跡 1・4 実測図



第27図 竪穴式住居跡2・3実測図

竪穴式住居跡2 (第27図)

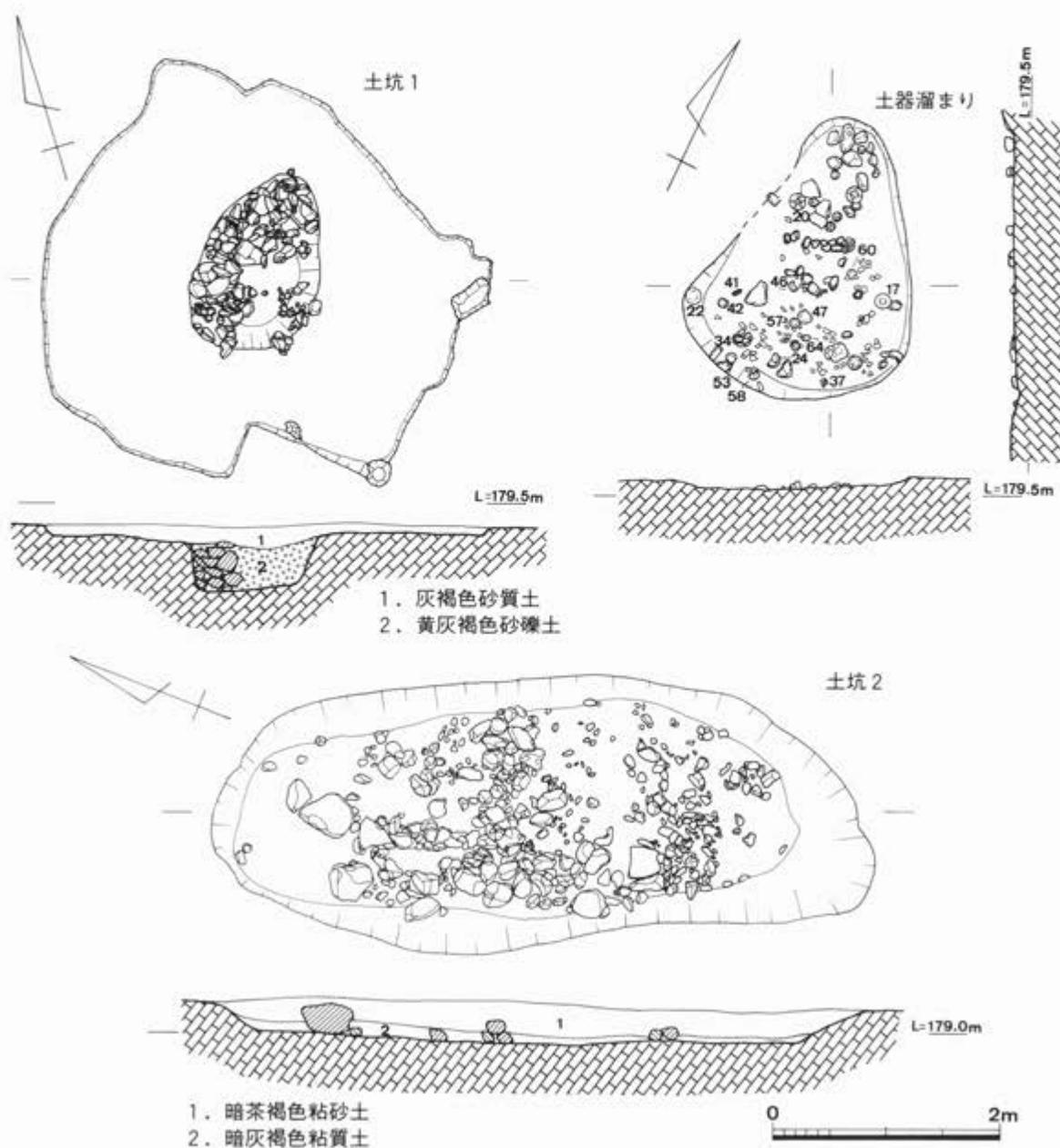
竪穴式住居跡2は、トレンチ中央東壁に接して検出した。竪穴式住居跡3に先行して構築されている。床面約2/3は、調査範囲外であるが、平面形は楕円形か円形とみられる。検出面における最大径は約8.4mを測り、本来は径約9mの大形の円形住居跡と推定される。トレンチ中央部から続く地山の礫層が住居跡南側のベースとなり、その上から床面を掘削したようである。

幅約20~30cm・深さ約10cmの周壁溝がめぐるが、南側は一部検出しておらず、竪穴式住居跡3の構築時に削平されたとみられる。柱穴は、床面に不規則に点在しているようであるが、周壁溝に沿ってめぐるピットがやや深く、支柱穴となる可能性が高い。遺物は、床面北側で、高杯の口縁部が出土しており(第29図7)、弥生時代後期後半頃と推定される。

竪穴式住居跡3 (第27図)

竪穴式住居跡3は、竪穴式住居跡2の南側で検出したもので、床面は一部重複している。周壁溝の北側は部分的な検出にとどまったが、西半部の残存状況は良好で、一辺約4.6mの方形住居跡と推定され

る。周壁溝は、幅約20cm・深さ約10cmを測る。床面は平坦ではなく、地山の礫層直上に床面を形成している。貼床などの痕跡はみられなかった。柱穴は少なく、また規則性は認められない。この住居跡で特に注目されるのは、南東隅よりで検出した焼土塊である。長さ約40cm・幅約30cmの範囲に広がる暗黄褐色の粘土塊で、一部火を受けて赤変していた。また、粘土塊の南側には、長さ15cm程度の木炭片があり、周辺一帯に細かい炭化物が認められた。しかし、炭化物は床面全体には及ばず、粘土塊の周辺にのみ認められるため、焼失住居の類でないことは明らかであり、粘土塊はいわゆる類カマドである可能性が高い。出土遺物が弥生土器底部1点に限られるため、帰属時期を決めることはむずかしいが、竪穴式住居跡4に隣接する方形住居跡であることから、ほぼ弥生時代後期後半～終末期とみられる。



第28図 土坑1・2及び土器溜まり実測図

土坑1(第28図) 土坑1は、第1トレンチの南側で検出しており、南北長約2.8m・東西長約3.9mを測る。検出面では、不整形の円形に近い形状をとり、断面は二段の掘形を有する。一段目は深さ約0.1mの浅い掘形を検出し、2段目は南北長1.3m・東西長1.0mのいびつな楕円形を呈し、深さ約0.35mを測る。二段目の埋土は、黄灰褐色砂質土に拳大の小礫を多く含む。小礫は、特に西側に多く集積しており、人為的に投入されたとみられる。礫は、火を受け一部赤変しているため、当初、火葬墓である可能性を推定した。しかし、礫に混じって瓦器片や土師皿、羽釜などの瓦質土器片が多く出土しており、墳墓とするには遺物量が多く、その性格を特定することは困難である。出土した土器は、14世紀中頃のもので、他の2基の土坑とはほぼ同じ時期である。

土坑2(第28図) 土坑2は、第1トレンチ中央部に位置し、長軸5.8m・短軸2.3mの楕円形で、検出面での深さは約0.4mを測る。土坑中の石材の中には、研磨及び明瞭な加工痕のある石材なども含まれており、人為的に廃棄または投入されたことは明らかである。土坑の下層には暗灰褐色粘質土が堆積し、その中から、土師皿や瓦器碗片、瓦片などが出土した。出土遺物から、14世紀前半頃のものともみられる。

土坑3(第24図) 土坑2に隣接する長さ約3.6m・幅約1.8mの不整形の土坑である。深さは、土坑2と同じく約0.4mを測る。出土遺物は、土師器鍋1点のみで(第31図75)、ほぼ14世紀前半頃ともみられる。土坑2と同様、下層に暗灰褐色粘質土が堆積していることから、土坑2とはほぼ同時期で、一連のものである可能性が高い。

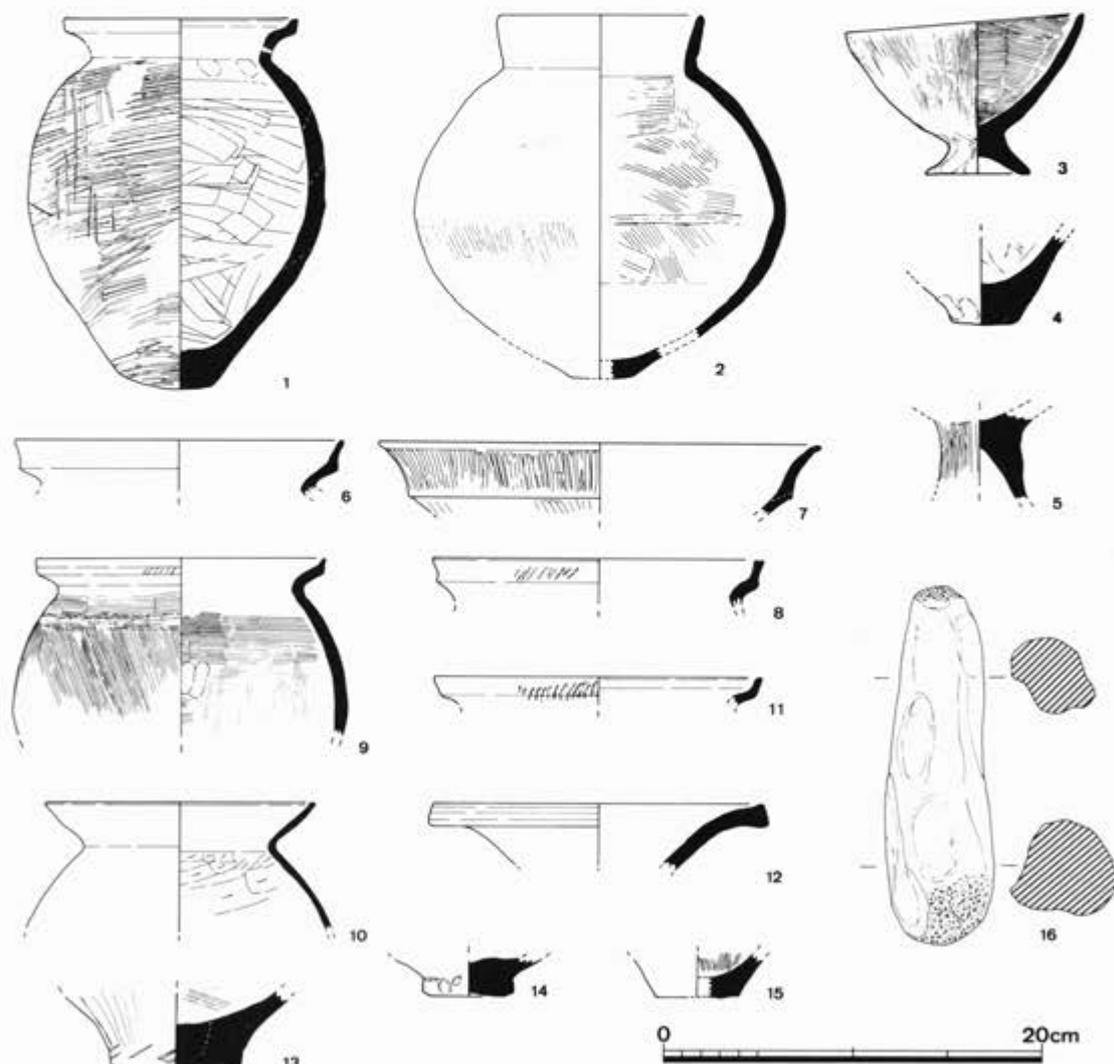
土器溜まり(第28図) 第1トレンチ北側で検出したもので、検出面での規模は長さ約2.5m・幅約2.0m・深さ約0.05~0.1mを測る。本来は、さらに規模の大きい土坑であったとみられるが、上部はかなり削平されているようであり、上層の包含層中からも多くの土器が出土している。不整形の落ち込みに瓦器碗、土師皿、瓦質土器鍋及び羽釜、龍泉窯鎚蓮弁文青磁碗及び内面に花文を有する青磁碗、東播系須恵器甕片などの多くの土器類が出土した(第30図)。特に、瓦器碗と土師皿は、細片化のために図化し得なかったものも含めれば、それぞれ各30個体以上含まれていたと推定される。土器溜まりには、多くの炭化物が混入している。

②出土遺物(第29~31図)

第29図1~16は、弥生土器及び石器類である。1は、口縁部が外反した後、受け口状に立ち上がる壺で、体部に粗いタタキを施す。内面はヘラナデ調整をする。2は、体部の張る直口壺で、体部下半にタタキの後ナデを施す。3は、台付鉢で、体部内外面ともに、ていねいなハケ調整をする。6は、大きく外反する壺口縁部で、口縁端部に擬凹線を施す。7は、2段に屈曲する口縁をもつ高杯と思われる。口縁外面にていねいなヘラミガキを施す。8・11は、甕の口縁部で、受け口状を呈する。口縁部外面に櫛描き列点文を施す。9は、受け口状口縁を呈する甕で、口縁部外面に櫛描き列点文、同直線文を施す。12は、大きく外反する壺口縁部で、口縁端部に擬凹線を施す。これらの弥生土器は、弥生時代後期後半期に比定される。

16は、棒状を呈する叩き石で、細い側の端面には、敲打痕があり、また、数か所に剝離痕がみられる。長さ19.2cm・最大幅5.5cm・重量760gを測る。砂岩製で淡茶褐色を呈する。

第30図17~64は、第1トレンチの土器溜まりから出土した一括資料である。17~36は、瓦器碗で、体部から、やや内湾気味に外上方に口縁部がのびるものと、まっすくにのびるタイプがある。口縁部は肥厚し、端部を丸く仕上げるものが多い。底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。体部外面の下半にはユビオサエ痕を残し、内面には間隔の粗い渦巻状暗文、見込み部にジグザグ状の暗文を施す。口径はややばらつきがあり、12.5cm前後と13.8cm前後のものが多い。37・38は、中国製青磁碗で、両者とも体部外面に鎬蓮弁文を削り出す。37は、厚めの削り出しの底部をもち、内面見込み部に花文のスタンプを施す。龍泉窯系とみられる。39は、受け口状口縁をもつ瓦質鍋である。体部外面は、ていねいなユビオサエが行われており、内面には、口縁部の境までハケ調整を行う。焼成は良好で、淡灰青色を呈する。40は、同じく瓦質甕である。「く」の字に屈曲する口縁部をもち、端部は面をなす。体部外面には、粗いタタキを施す。焼成は良好で、暗黒灰色を呈する。41は、土師器羽釜である。口縁端部は、短く内側に折り返し、肩部に、上下面を強く



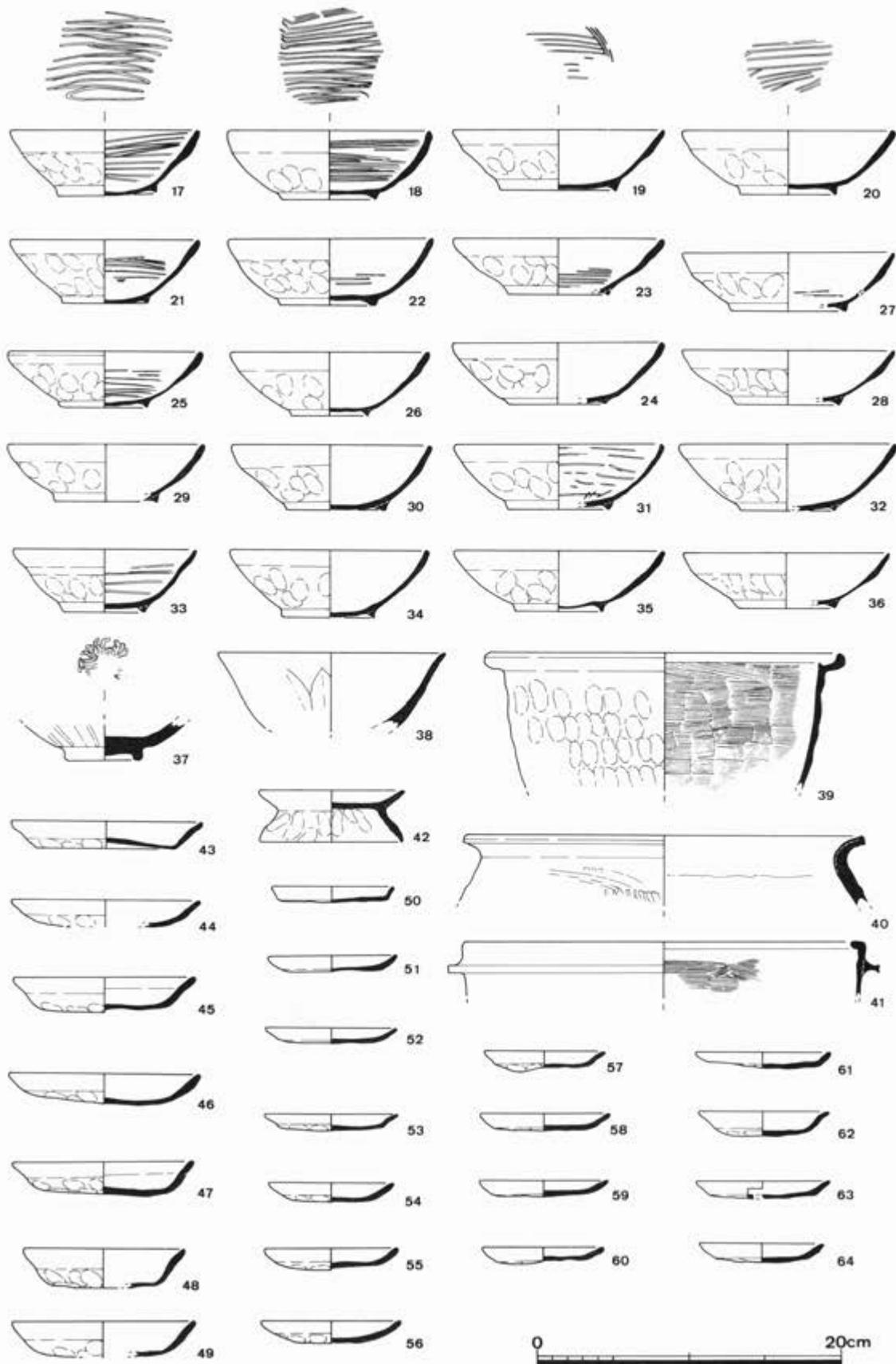
第29図 第1トレンチ出土遺物実測図(1)

1~6・16. 竪穴式住居跡4
13~14. 竪穴式住居跡1

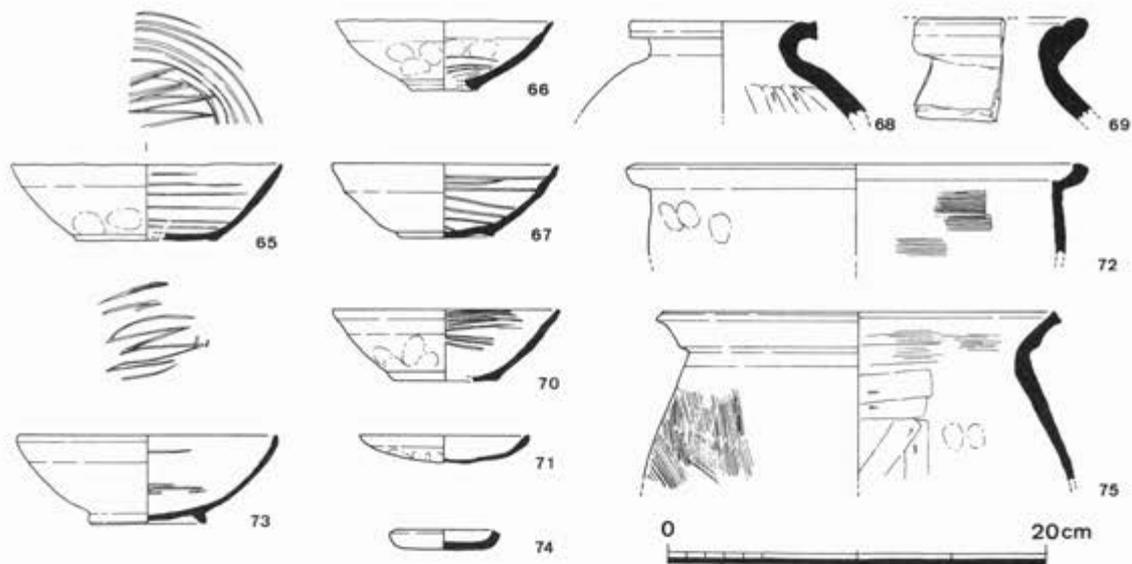
7・8. 竪穴式住居跡2
15. 竪穴式住居跡3

9. 西区包含層

10~12. 南区包含層



第30図 第1トレンチ出土遺物実測図(2) 土器溜まり



第31図 第1トレンチ出土遺物実測図(3)

65~69.土坑2 70~72.土坑1 73・74.集石遺構1 75.土坑3

ユビオサエした断面台形状の鑄をめぐらす。42は、土師器の台付皿で、皿部に比べて大形の高台を貼り付ける。43~64は、土師器皿類である。口径が12cm前後の大形品(43~49)と、径8~9cmの小形品(50~64)の大きく2つの法量タイプに分けられる。45・47・53・57・62の口縁部は、やや外反気味にのびる。端部は丸く仕上げるものが多いが、43・52・60は面をなす。43は、底部から口縁部が「く」の字形に屈曲して外上方にのび、50は、底部から直上気味に口縁部が立ち上がる。色調は総じて、淡橙褐色または淡黄褐色を呈する。以上の土器溜まり出土資料の所属時期は、ほぼ13世紀後半から14世紀前半頃とみられる。

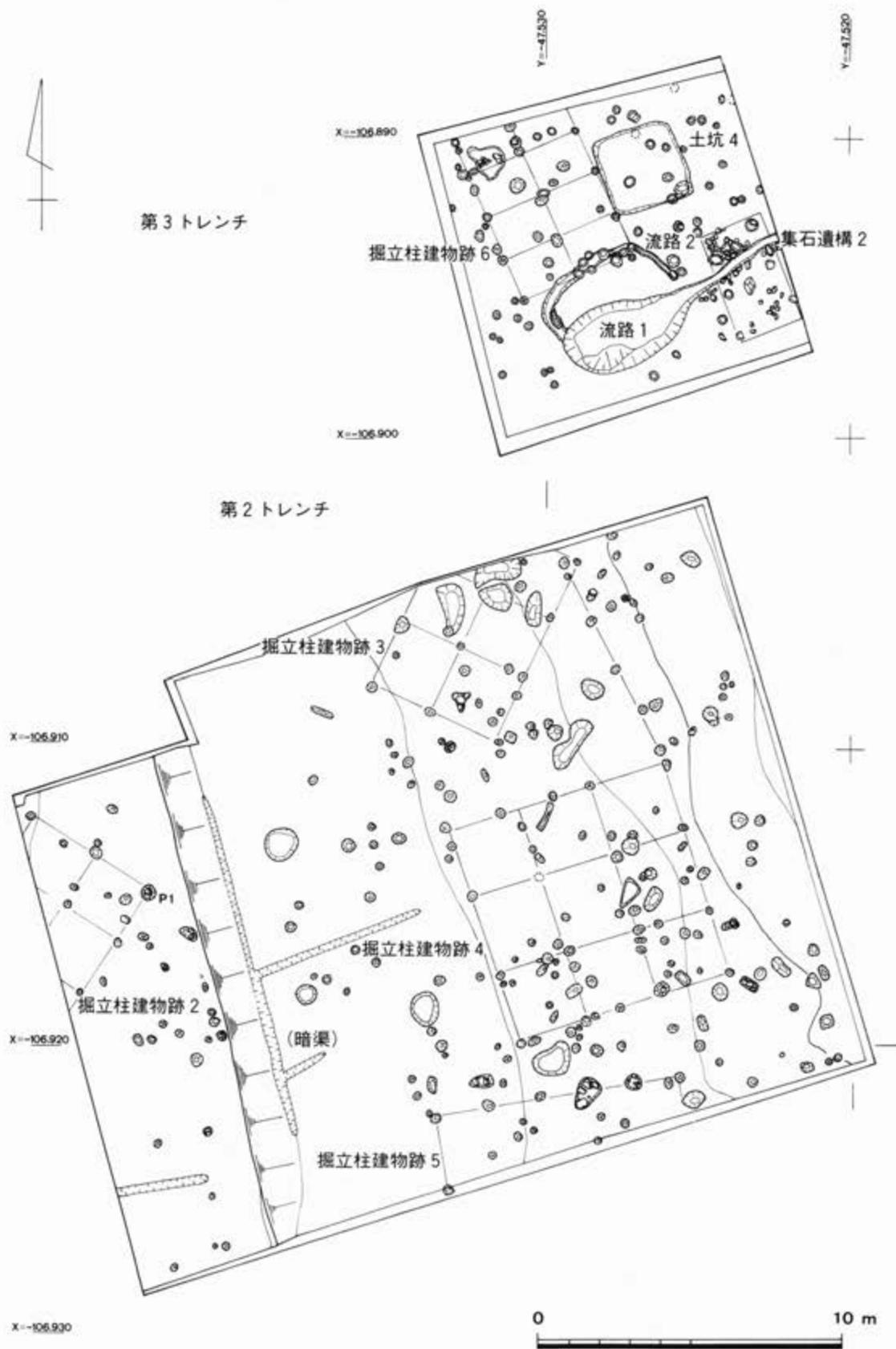
第31図65~67の瓦器碗は、口径に2タイプあり、断面三角形の低い高台を持つ。68は、須恵器甕で、口縁端部は面をなし、内面にはヘラケズリを施す。69は、「く」の字に屈曲する丹波焼甕の口縁端部の小片である。口縁端部内面に段をもち、赤褐色を呈する。以上は、土坑2から出土しており、ほぼ14世紀前半頃に比定できる。72は、受け口状の口縁をもつ瓦質鍋で、14世紀中頃とみられる。75は、橙褐色を呈する土師器甕で、「く」の字に外反する口縁部の中程に断面三角形の凸帯をもつ。体部外面は、縦方向の細かいハケ調整を施し、内面は、ヘラケズリする。73は、体部がゆるやかに内湾する瓦器碗で、しっかりとした高台をもつ。74の瓦器小皿は、口縁部が内湾気味に短く屈曲する、いわゆるコースター形である。73とともに12世紀後半頃とみられる。

(2) 第2トレンチ(第32図)

第2トレンチは、宮川神社及び金輪寺参道の北側を対象とし、京都府教育委員会の試掘トレンチを取り込み、トレンチを設定した。試掘段階で中世の柱穴を検出し、金輪寺に伴う僧坊などの建物跡の検出が予想された地点である。

① 検出遺構

一帯は、神田川の氾濫原にあたり、トレンチ西側については、半分以上にわたって、耕作面が



第32図 第2・3トレンチ遺構平面図

地山直上に達し、耕地化のため断面「L」字形に削平されていた。全体に、遺構の残存状況はよくなかったが、合計4棟以上の掘立柱建物跡が検出された。

掘立柱建物跡2 トレンチ西端で検出したもので、建物跡西側は農道にかかるため、その東端の一部を検出したことになる。3間×3間以上の建物跡で、1間は約2.1~2.3mに復原される。柱穴の多くは、径20~30cmである

が、建物跡の東コーナー部分にあたる柱穴(第32図P1)は、径40cm・深さ30cmと大きく、中央底部に一辺15cmほどの根石を据え置き、脇部を人頭大の石材で補強している。こうした柱穴は、宮川遺跡の他のトレンチの柱穴群では見られず、構造的にも安定していることから、比較的規模の大きな建物であることが推定される。金輪寺の山麓にあたることから、関連する建物跡の可能性もある。この柱穴からは、瓦器碗の細片が出土しているため、13~14世紀頃の建物跡とみられる。

掘立柱建物跡3 トレンチ北側で検出した、2間×3間以上の建物跡である。北半は調査範囲外であり、南側部分を検出した。建物跡の主軸は、掘立柱建物跡2とはほぼ同方向で、N-25°-Eを測る。

掘立柱建物跡4 トレンチ中央やや南寄り検出した建物跡で、3間×3間の規模を有し、1間は約2.3~2.6mを測る。トレンチの南側では、神田川が氾濫した際、上流から流されてきたとみられる大小の石材が散乱していたが、それらの下層で柱穴が検出された。建物跡の主軸はほぼ南北方向で、掘立柱建物跡2・3とはやや主軸方向が異なる。柱穴から、土師皿や瓦器碗片が出土していることから、13~14世紀の建物跡とみられる。

掘立柱建物跡5 トレンチ南側で検出した柱穴群である。東西方向にのびる柵列跡の可能性もあるが、南側に平行する位置に柱穴が認められるので、掘立柱建物跡として復原した。主軸は掘立柱建物跡4に近く、東西方向に5間の規模を有する。

②出土遺物(第34図76・78)

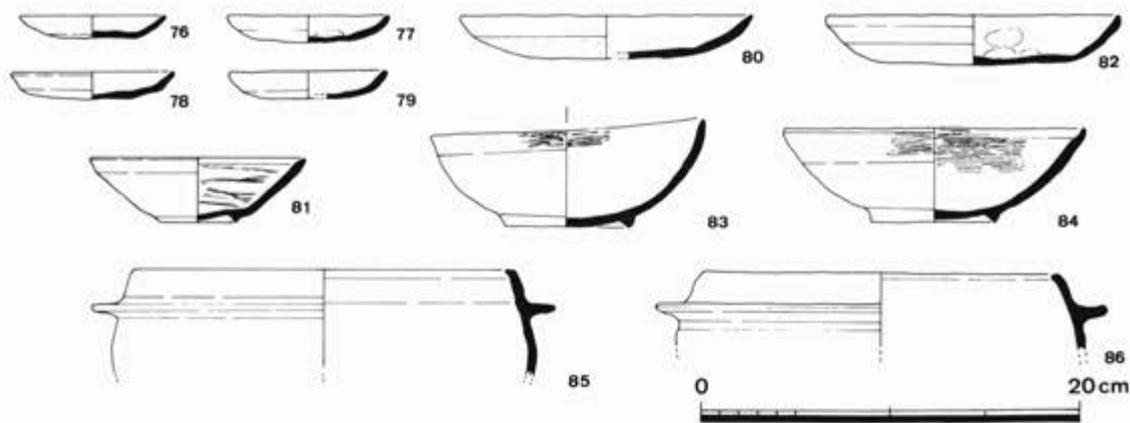
76・78は、第2トレンチ掘立柱建物跡4の柱穴から出土した。76は口縁端部が面取り気味であり、78は口縁部を一気に強くヨコナデし、端部を面取りしている。

(3)第3トレンチ(第32図)

第3トレンチは、第2トレンチの北側に隣接して設定した。トレンチ内における基本的な土層は、耕作土下に厚さ約20cmの中世の単一の堆積層があり、その下部には黄灰褐色土の地山面が広がるもので、遺構の残存状況は良好であった。



第33図 流路1及び集石遺構2実測図



第34図 第2・3トレンチ出土遺物実測図

76・78. 第2トレンチ掘立柱建物跡4

77・79・80. 第3トレンチ掘立柱建物跡6

83~86. 第3トレンチ集石遺構2

①検出遺構

トレンチ内では、掘立柱建物跡1、流路2、集石遺構1、土坑1を検出した。

掘立柱建物跡6 トレンチ北半で検出した、2間×4間以上の建物跡である。主軸はN-24°-W、柱間は約1.4~1.8mを測る。柱穴は、径約0.3mの掘形を有し、その中央に径10cmほどの自然石の根石を据え置く。柱穴内からは、瓦器碗片、土師皿などが出土しており、13世紀頃の建物跡とみられる。

集石遺構2 トレンチ東側で検出した集石遺構で、人頭大の石材が流路1の両岸に沿うように配石されている(第33図)。流路1・2は、風倒木が除去された後、自然流路となったとみられる。流路1の底部は、湧水点に達しており、流路下方に当たる南側に石材を用い、排水路としたのであろう。また、流路1の北側は、40~50cmの比較的大きな平石を敷石状に用いている。出土遺物から、13世紀前半頃の遺構と推定される。

②出土遺物(第34図77・79~86)

77・79・80は、ともに第3トレンチ掘立柱建物跡6から出土した土師皿である。79は口縁端部を面取りする瓦器皿で、80は端部を細く丸く仕上げ、体部外面下半と、内面に指頭圧痕を施す。82~86は、第3トレンチ集石遺構2から出土した一括資料で、82の土師器大皿は口縁部に二段ナデを施す。83・84の瓦器碗は、内外面ともに磨滅が著しく、暗文の度合いはわからないが、丸味のある深い体部を有し、断面三角形の高台をなす。85・86の羽釜は、内湾する口縁部に、体部上半部が外方に張り出すタイプである。

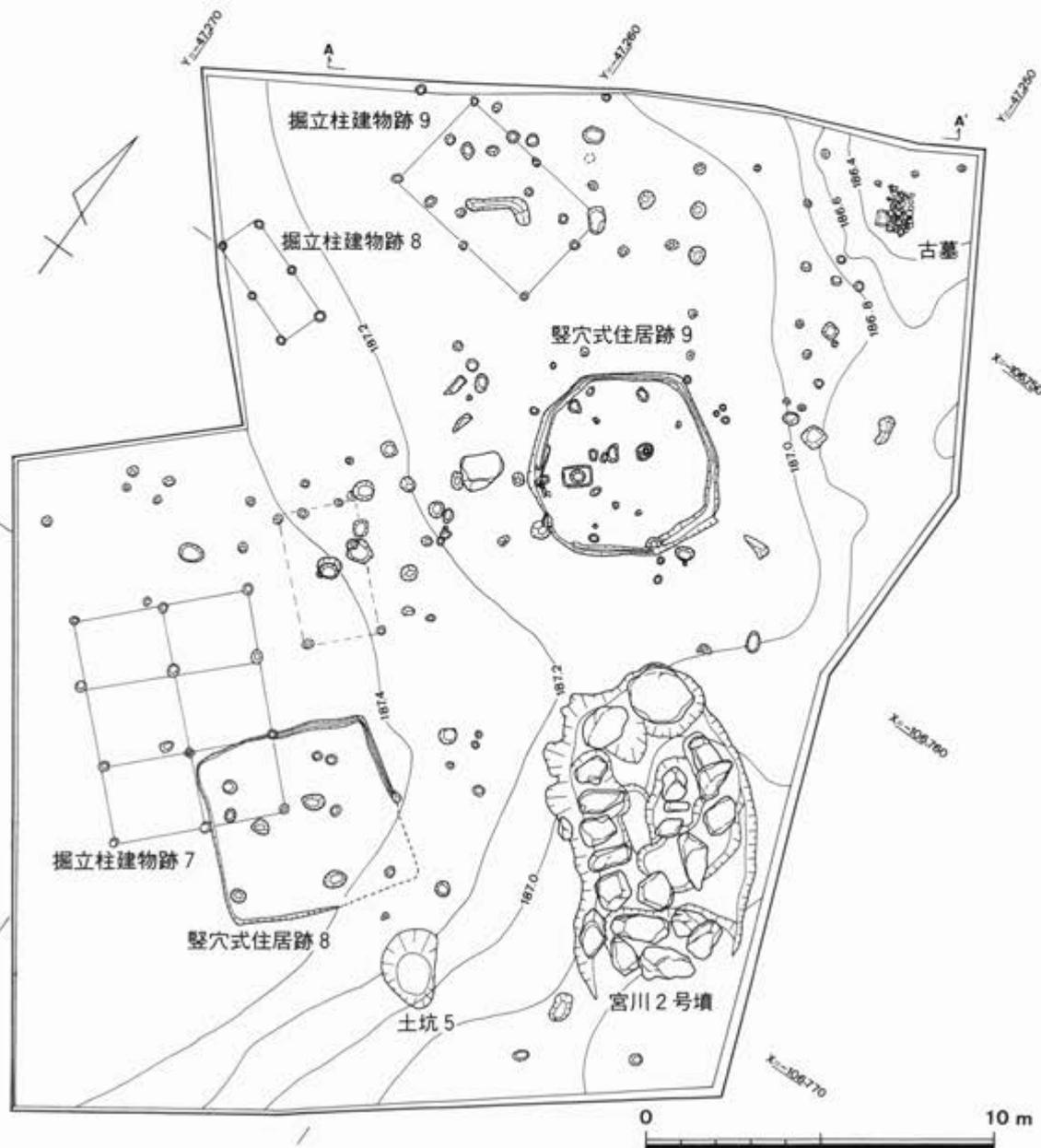
(4)第4トレンチ(第35図)

第4トレンチは、宮川の現集落の中心部付近に位置し、神田川の右岸の高台に設定した。トレンチ内の基本となる層位は、最も遺構の残存状況のよいトレンチ北東部では、灰褐色粘質土の耕作土とその床土にあたる明黄褐色弱砂質土の下に、中世の遺構面を形成する厚さ約0.2mの茶褐

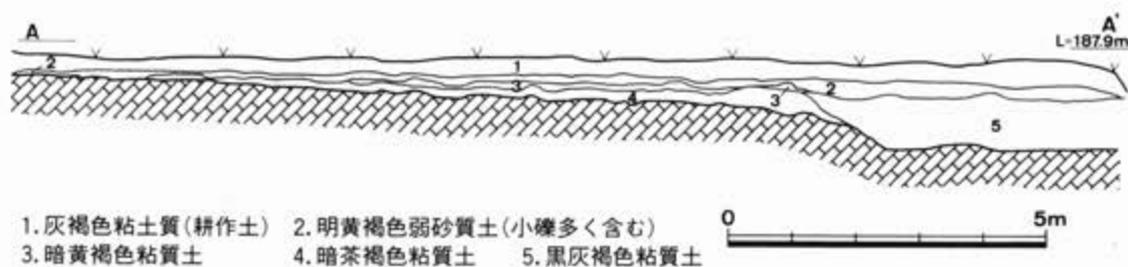
色粘質土と、弥生時代の遺構面を形成する厚さ約0.2mの暗茶褐色粘質土が堆積している。トレンチは、西から東にかけて低くなっており、最もレベルの高い西半では包含層が削平され、耕作面直下に地山が広がっている。また、トレンチの北東部は、地山が一部削平され低くなっており、中世の遺物を包含する厚さ約1mの黒灰褐色粘質土が堆積している(第36図)。

①検出遺構

本トレンチは、当初、京都府教育委員会によって八角形住居跡である竪穴式住居跡9の調査が行われ、その後、当調査研究センターがトレンチを拡大して周辺の遺構検出を行った。トレンチ内からは、竪穴式住居跡2棟、横穴式石室1基、掘立柱建物跡3棟、中世墓1基を検出した。



第35図 第4トレンチ遺構平面図



第36図 第4トレンチ北壁土層断面図

竪穴式住居跡 8 (第37図) 竪穴式住居跡 8 は、トレンチ南側で検出した。一辺約5.3mの方形竪穴式住居跡である。壁体の上部は大きく削平されていたが周壁溝の一部を検出した。周壁溝は、最もよく残存していた北西隅周辺で、幅約20cm・深さ約5～10cmを測る。南東周辺は削平されており、住居跡の輪郭は検出できなかった。床面は地山の礫層の直上であり、平坦ではない。柱穴は、径約30cmの正円形に近いものや、浅い楕円形状のものが床面に不規則に散在している。不整地の床面からは弥生土器の小片が出土しており、弥生時代の竪穴式住居跡と推定される。

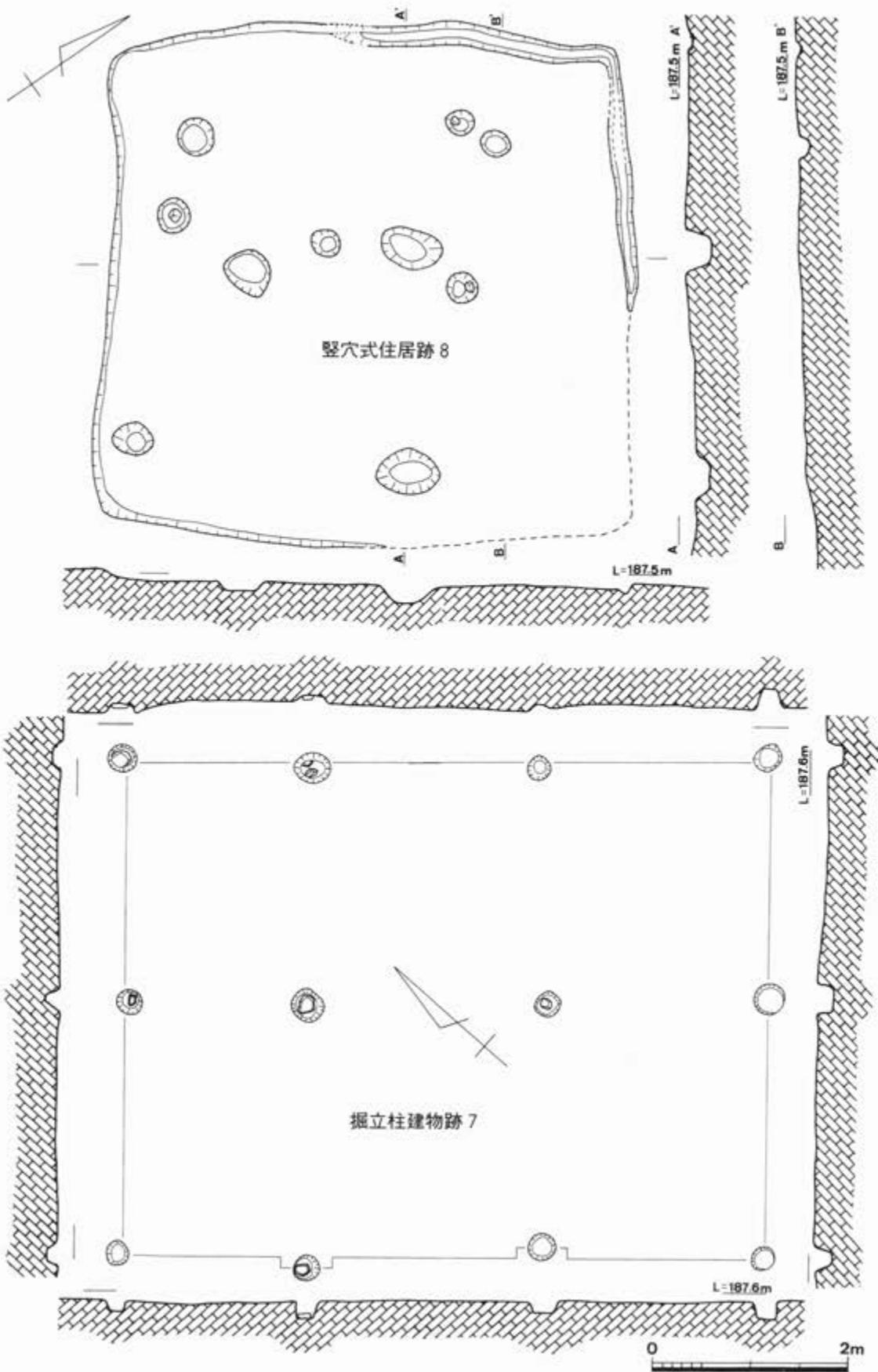
また、この住居跡の北側約2mのところには、周辺のピット群よりも深い柱穴群があり、ほぼ対角線上に結ぶことができる。トレンチ西側は、後世の開墾などによる削平が著しく、周壁溝は検出されなかった。しかし、ピット群の規則性が高いことから、弥生時代の竪穴式住居跡に伴う可能性が高い。

土坑 5 (第35図) 土坑 5 は竪穴式住居跡 8 の南4mのところ検出された、長さ約2.3m・幅約1.5m・深さ約0.5mの楕円形状の土坑である。北側に向かって浅く広がり、当初、横穴式石室墳の周濠に対応するかとみられたが、延長上に掘形は検出されず、単一の土坑状を呈している。土坑の北側から須恵器長頸壺が出土しており(第42図102)、宮川2号墳に関連する遺構と推定される。

掘立柱建物跡 7 (第37図) 掘立柱建物跡 7 はトレンチの西端で検出した。3間×2間の規模を有し、一間の長さは東西方向に約2.5m、南北方向に約2.2mを測る。柱穴は安定した地山面上に掘り込まれており、径約20～30cm、検出面での深さ約20cmを測る。約半数の柱穴で、中心部に約10cm程度の自然石の根石が据え置かれており、第1トレンチの柱穴群と同様の状況がみられる。建物跡の南東隅の柱穴は、竪穴式住居跡 8 の床面と重なる。柱穴内からは、土師器皿片及び瓦器碗の破片が出土しており、13～14世紀頃の掘立柱建物跡と推定される。

(野々口陽子)

竪穴式住居跡 9 (第38図) 耕土直下の黒ボク層を約10cm掘り下げたところで、安定した暗褐色シルト層に黒ボクが入り込んだ八角形の竪穴式住居跡を検出した。平面的な規模は南北5.2m・東西5.5m、床面積は18.4㎡を測る。埋土の黒ボクを掘り下げていくと、黒褐色の貼床があり、多くの土器、凹み石と青灰色粘土の塊を検出した。敲石も貼床上面と同じレベルで検出した。しかし、主柱穴が検出されなかったので、黄褐色シルトの地山面まで下げた。住居跡の検出面から



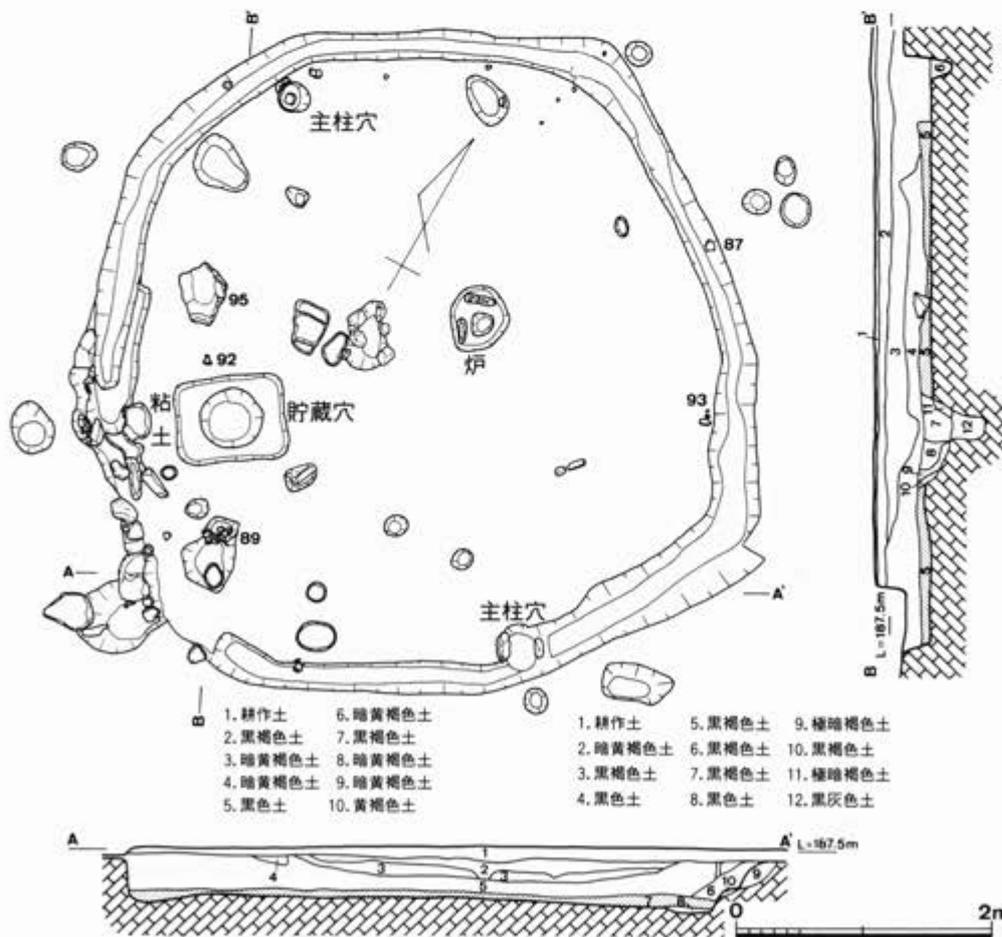
第37図 竪穴式住居跡 8・掘立柱建物跡 7 実測図

地山までの深さは25~35cmを測る。地山面で、南西の一边が途切れる周壁溝、炉と、貯蔵穴と考えられる土坑を検出した。土層の検討で、貯蔵穴は貼床の直上から切り込まれており、これによって、炉についても、貼り床から切り込まれていたと推定する。主柱穴は、北西隅付近の床面と南東隅付近の周壁溝内2か所で検出され、二つの主柱穴で屋根を支える構造である。北西側の主柱穴は、直径25cmを測る。底に扁平な石を敷き、周壁溝側に小児人頭大の礫を置く。南東側の主柱穴は、直径60cmで、柱穴の東西に小児人頭大の礫を置く。周壁溝の溝底のレベルは南西が高く、北東が低い。炉は、長軸56cm・短軸46cmを測る。炉の底と西壁には火を受けた痕跡があり、底には1個の拳大の支石と、3個の支石抜き取り痕がある。深さは約5cmを測る。貯蔵穴は、長辺86cm・短辺67cm・深さ5~10cmの隅丸長方形の土坑の底に、直径46cm・深さ39cmの土坑を穿つ。粘土塊は26cm×18cm・高さ20cmを測る。土器の材料を備蓄していたと考えられる。

(福島孝行)

掘立柱建物跡 8 (第35図) トレンチ北西端で検出した掘立柱建物跡である。規模は1間×2間と小規模である。1間は約1.3~1.6mを測り、主軸はN-63°-Wを示す。

掘立柱建物跡 9 (第35図) トレンチ北辺で検出した建物跡である。平面の規模は約5m×3.3mを測る。柱間は不規則であるが、ほぼ2間×3間の規模の建物跡とみられる。柱穴は、径20~



第38図 竪穴式住居跡 9 実測図

30cm・深さ10cmを測る。主軸は、 $N-76^{\circ}-W$ を測る。柱穴内から土師皿片が出土し、周辺で瓦器碗の破片が出土していることから、13～14世紀の建物跡と考えられる。

宮川2号墳(第35図) トレンチの南東端で検出した、損壊した横穴式石室墳である。20個以上の長さ1～2mの石材が散乱している状況で検出された。各石材は、石材の周辺にそれぞれ掘形があり、石材が耕作作業の妨げにならないよう、地下深くに埋められたとみられる。西側の石材は、南北方向に並ぶように落とし込まれていることから、この部分は右側壁の基底石を倒壊し、埋置した可能性が高い。また、北端に位置する石材は、最も大きく、平面を意識して加工しており、奥壁の石材と推定される。この石材は、散乱した石材の中軸上にあるため、各石材は原位置周辺で倒壊しているとみられる。こうしたことから、石室の主軸を復原すると、ほぼ $N-28^{\circ}-W$ の周辺にあり、石室全長は、少なくとも9m以上あったと推定される。床面は、石材の倒壊作業の際にほとんど削平されているが、奥壁の石材の南約1.5mのところ、幅約0.5m・長さ約1mの周囲よりも一段高い平坦面があり、この部分が唯一残る床面である可能性が高い。出土須恵器から、6世紀後半頃の横穴式石室と推定される。また、古墳に伴う遺物のほかに、内面に墨書のある須恵器皿や黒色土器碗などが出土している(第42図)。

今回の調査では、京都府教育委員会が、集落内のほかの地点で、周知の遺跡である宮川古墳の調査を行ったため、宮川古墳を宮川1号墳とし、本古墳を宮川2号墳とする。

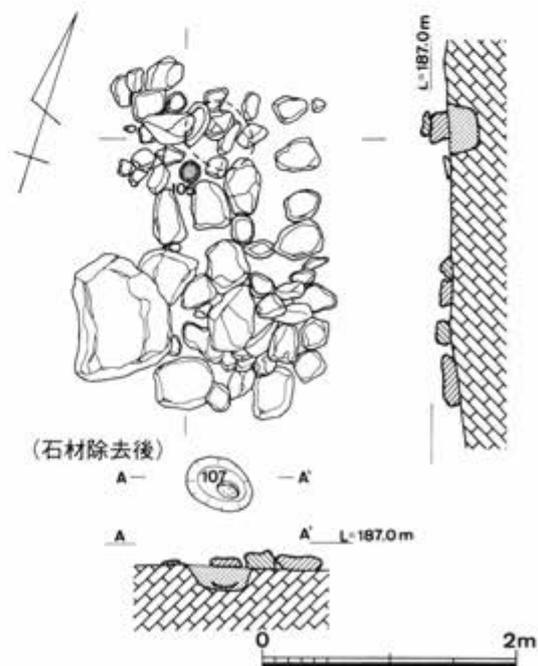
古墓(第39図) トレンチ北東端で、人頭大の石材による集石遺構を検出した。集石の範囲は長さ約2.8m・幅約1.7mの長方形を呈し、その北側の石材上で、大小の土師皿各1枚が出土した(第42図105・106)。集石を除去した後、下層調査を行った結果、径50～60cm・深さ30cmの円形の土壌が検出され、中から土師器皿が出土した(第42図107)。11世紀後半～末頃の古墓とみられる。

(野々口陽子)

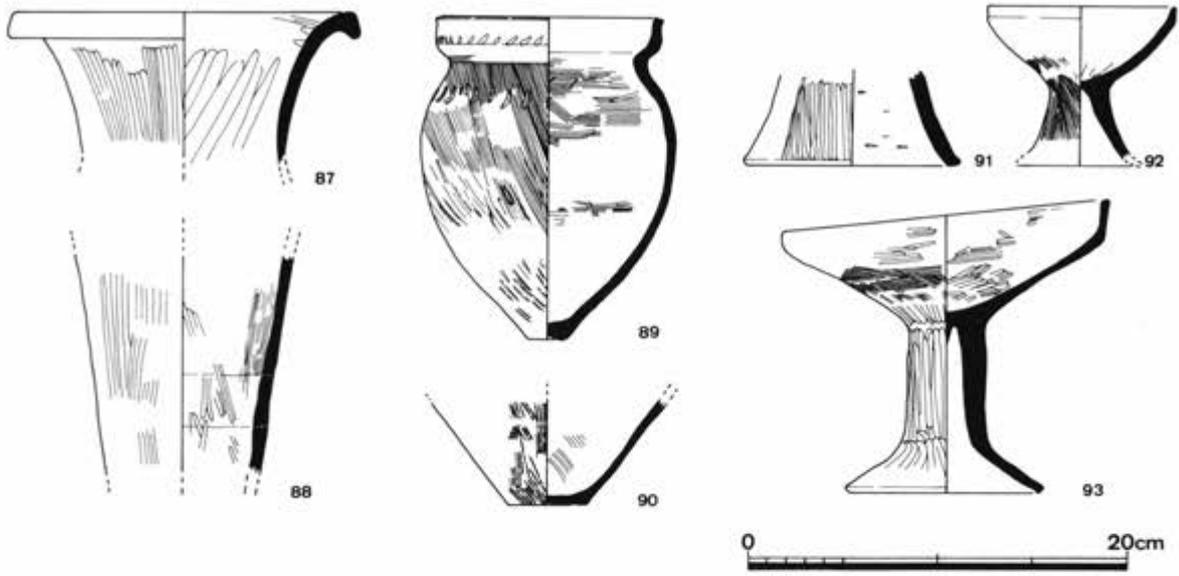
②出土遺物(第40～42図)

A. 竪穴式住居跡9出土遺物(第40図)

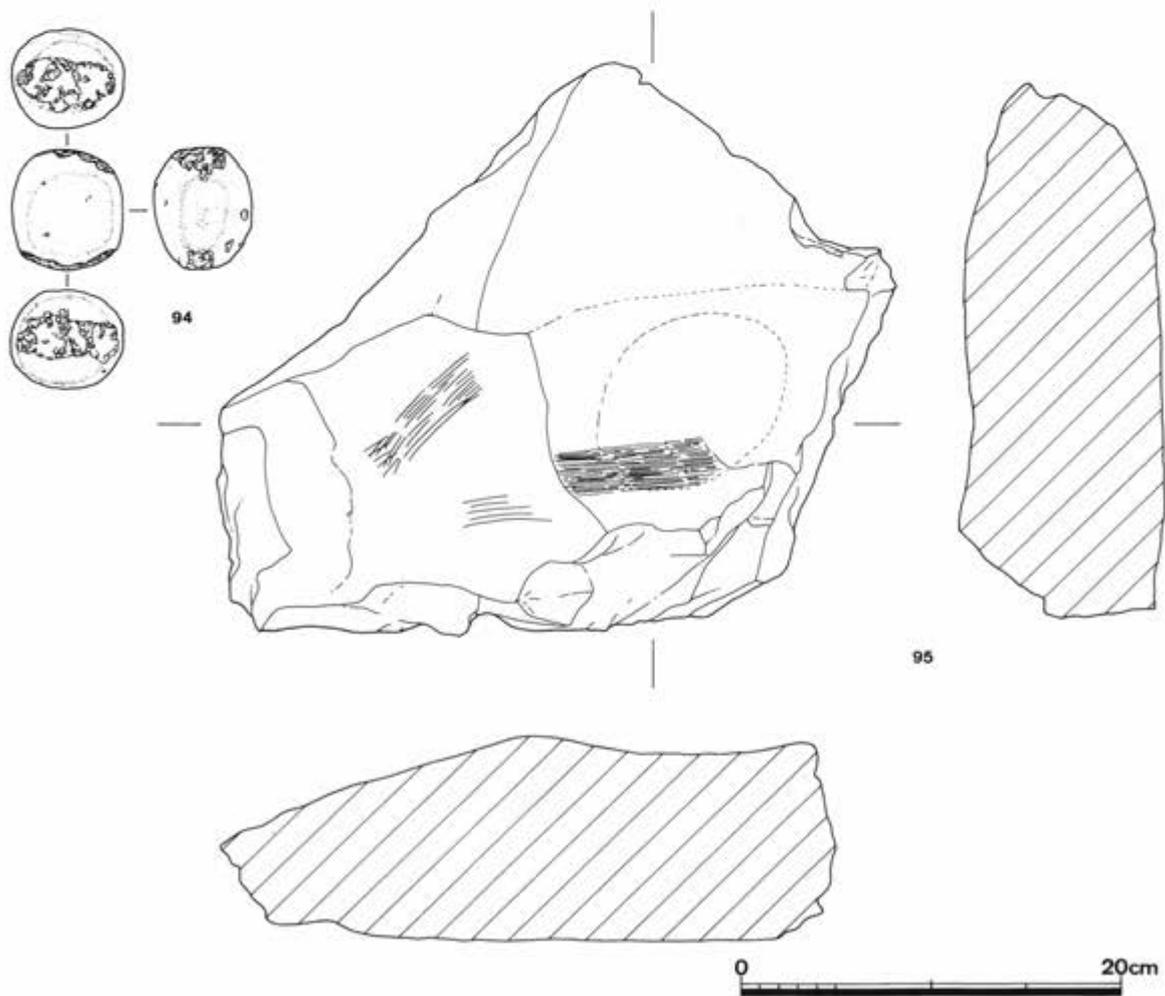
土器 八角形竪穴式住居跡から出土した遺物は、弥生土器と石器である。87は、口径17.8cmの広口壺の口縁部である。口縁は外反し、端部を下方に垂下させる。外面は稚拙な縦方向のヘラミガキを施し、内面も同様の調整を施す。ただし、口縁端部付近の内面にのみ横方向のヘラミガキを施す。色調は淡黄褐色で、焼成は良好。胎土には砂粒を含む。88は、長頸壺の頭部である。外面には稚拙な縦方向のヘラミガキを施し、内面には、縦方向のヘラミガキと、ハケ調整を施す。色調は淡褐色、焼成は良好で、胎土には砂粒を含む。



第39図 古墓実測図



第40図 第4トレンチ出土土器実測図



第41図 第4トレンチ出土石器実測図

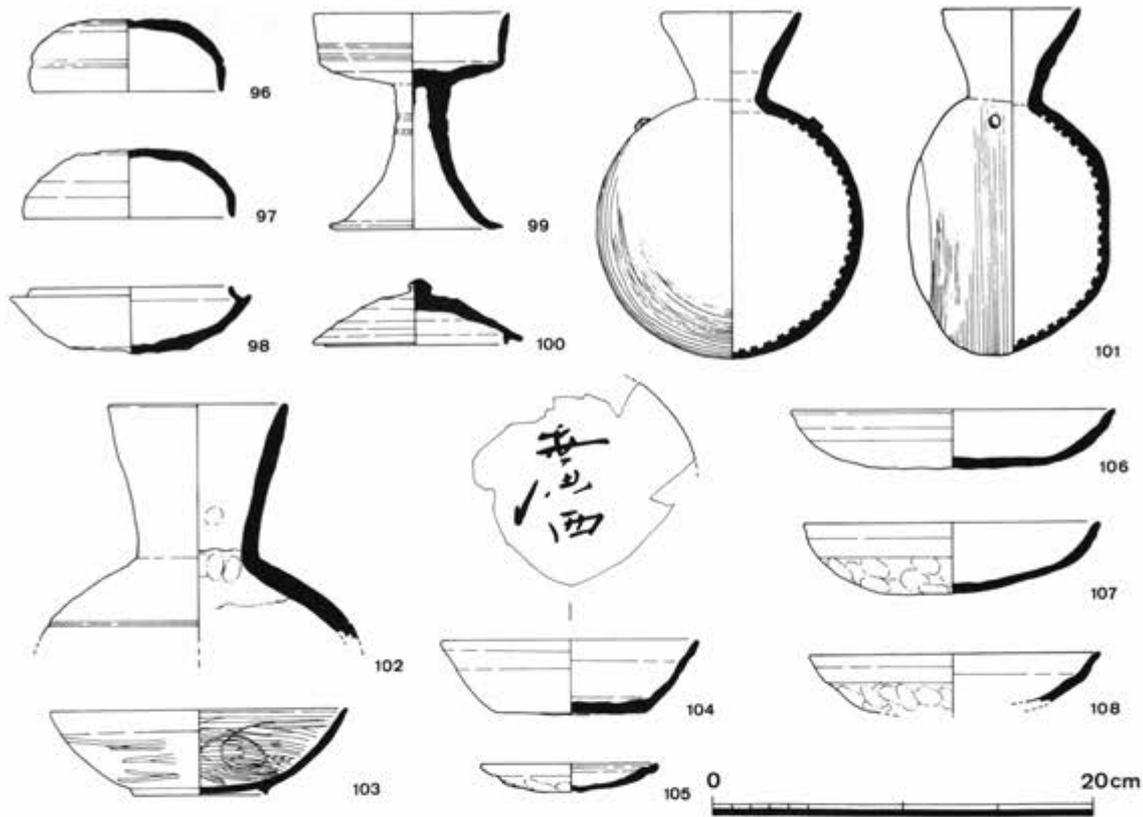
89は、近江の影響を受けた甕である。口径11.2cm・器高17cmを測る。口縁を受け口状に整形し、端部に外傾させた面を作る。胴部上方がやや張る形態を示し、底部は上げ底状を呈する。口縁部内外面には横方向のナデを施し、肩部外面には縦方向のハケ調整を施す。肩部内面には横方向のナデ調整を施す。胴部下半の外面は、下方から上方へ向けて、ハケ状工具によって強くナデられており、これによって砂粒が一部動き、ヘラケズリに似た調整となっている。胴部内面には、横方向のハケ調整が一部に見られる。口縁部下端の屈曲部と、肩部の外面に、刺突列点文が施されている。しかし、技術が未熟なためか、工具を器壁に押さえつけた後、引きずったために、「J」字形の文様になっているところがある。色調は、すすの付着のない部分では淡黄褐色である。焼成は良好で、胎土には砂粒、小礫を少し含む。90は、甕か壺の底部である。底径4cmで、平底である。胴部は、直線的に立ち上がる。外面調整は縦方向のハケ調整で、内面調整は左上がりのハケ調整である。色調は暗灰褐色で、焼成は良好、胎土には細かい砂粒を多く含む。91は、底径11.2cmの脚台部である。外面には縦方向のヘラミガキを施し、内面には横方向のヘラケズリを施す。色調は暗灰褐色で、焼成は暗灰褐色、胎土には細かい砂粒を含む。92は脚台付鉢である。口径9.7cm・器高8.4cmを測る。口縁部を直立させ、端部外面を強くナデて面を作る。脚部はやや外反し、端部を丸く収める。外面には縦方向のハケ調整を施し、内面には見込み部に横方向のハケ調整を施した後、横方向のナデを施している。色調は淡黄色で、焼成はやや甘く、胎土は1～2mmの砂粒を含む。93は高杯である。口径17.2cm・器高14.7cmを測る。口縁部は、一方を屈曲させて立ち上げ、端部にも面を持たせるが、他方は屈曲が曖昧で、端部も丸く収める。また、口縁部は底部に対して水平ではなく、屈曲が曖昧な側に傾いている。脚柱部は円柱状で、脚裾部は直線状に開き、端部に面を持つ。外面調整は、杯部端部付近では横方向のヘラミガキ調整で、杯部のその他の部分は横ないし斜め方向のハケ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施す。脚柱部は、縦方向のヘラミガキ調整を施し、脚裾部にも同様の調整を施す。杯部の内面には横方向のヘラミガキ調整を施し、脚柱部内面にはヘラ状工具で、脚柱部内部の土をくり抜いたような痕跡が見られる。脚裾部の内面は横方向のナデ調整である。色調は暗赤褐色、焼成は良好で、胎土は1～5mmの小礫を含む。

石器(第41図) 94は、敲石である。長軸8.1cm・短軸7.4cm・厚さ6.6cmを測る。川原石の小口側に叩いた痕跡が認められる。95は、凹み石である。最大長45.4cm・最大幅32.4cm・最大高13.6cmを測る。上面と、図に向かって左側の面に擦痕があり、上面は窪んでいる。

(福島孝行)

B. その他の遺構出土土器(第42図)

96～101は、宮川2号墳から出土した須恵器である。96は、口縁部が短くやや内湾し、低く扁平な天井部をなす。立ち上がりとの境に稜をなし、天井部にはていねいな細かいヘラケズリを施す。口径10.0cm・器高3.9cmを測る。97は、口径10.5cm・器高3.6cmを測り、口縁部は短く立ち上がり、ゆるやかに屈曲して天井部をつくる。天井部の一部をヘラケズリする。98は、口径10.6cm・器高3.6cmの須恵器杯身である。立ち上がりは短く、底部にヘラ切り痕がみとめられる。



第42図 第4トレンチ出土遺物実測図
 96~101・103. 宮川2号墳 102. 土坑5 105~107. 古墓1 108. 包含層

99は、長脚の高杯である。口縁部外面下半と、脚部内面にも2条の沈線が施されている。口径10.3cm・器高11.5cmで、暗青灰色を呈し、堅緻に焼成されている。100は、宝珠つまみ付きの須恵器蓋である。内面のかえりは短く外反し、外面にはていねいなヨコナデと天井部にヘラケズリを施す。口径9.6cm・器高3.6cmを測る。101の提瓶は、口縁部の一部が欠損していたが、体部はほぼ完存していた。体部には同心円文状のカキ目が施され、肩部に矮小化した把手を貼り付ける。口径7.2cm・器高18.5cmを測る。102は、土坑5北側で出土した須恵器長頸壺である。全体にていねいにヨコナデされ、体部肩部に1条の沈線を施す。頸部と体部の接点は、内側から押さえており、指頭圧痕が残る。103・104は、石室から出土した。103は、黒色土器碗である。外面はヘラミガキの後一部ナデ、内面にはていねいなヘラミガキを施し、断面三角形の高台を付す。口径15.8cm・器高4.6cmを測る。104は、須恵器杯身であり、口径13.4cm・器高4.0cmを測る。内面には墨書があり、「廣西」と書かれている。105~107は、土師皿である。105は、口縁部の屈曲する土師皿で、口径9.3cm・器高1.4cmを測る。106・107は、口縁部を二段ナデし、体部下半に指頭圧痕を施す大皿である。106は口径17.0cm・器高3.2cm、107は口径15.7cm・器高3.6cmをそれぞれ測る。

6. まとめ

今回の発掘調査は、平成6年度の京都府教育委員会による試掘調査の結果をうけて、宮川遺跡の東部、中央部、西部の3地点で4か所のトレンチを設定した。

調査地周辺の地形は、西から東へ段丘状の緩斜面となっており、東部地点の第1トレンチは、段丘先端部の低地にあたる。この地点からは、主な遺構としては弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴式住居跡6棟や、中世の掘立柱建物跡とみられるピット群、土器溜まり、土坑、集石遺構などを検出した。竪穴式住居跡は、円形住居跡2棟、方形住居跡4棟からなり、弥生時代後期後半から古墳時代にかけての過渡期の状況をよく示している。方形竪穴式住居跡の1棟からは、類カマドの一例となる可能性の高い焼土塊が壁面付近から検出された。また、中世の遺構群からは、13～14世紀の瓦器碗、土師器、瓦質土器などの一括資料が得られ、龍泉窯産青磁、天目茶碗片などの輸入陶磁器も出土している。特に、「丹波型瓦器碗」については、従来から指摘されているように、いくつかのタイプが含まれており、丹波国内での生産者集団の系統と流通を考える上で、興味深い資料となった。

西部地点の第2・3トレンチは、中世山岳寺院としての伝統をもつ金輪寺の所在する神野山の山麓にあたり、金輪寺の参道の北側に設けた。立地的にみて、金輪寺の関連建物が検出される可能性のある地点であったが、一帯はトレンチ南側を流れる神田川の氾濫原にあたるため、一部に遺構の流出がみられ、遺構の残存状況はよくなかった。しかし、第2トレンチ西側の山寄りの一段高い遺構面では、他地点のトレンチではみられない正方形の根石を据え置き、比較的大きな柱穴を含む中世の建物跡が検出され、最終的に合計4棟の掘立柱建物跡を確認した。安定した根石を有する大形の柱穴を含む掘立柱建物跡については、中世の金輪寺に関連する建物跡である可能性がある。

第3トレンチは、第2トレンチの北側に設定したもので、掘立柱建物跡1、流路2、集石遺構1、土坑1を検出した。集石遺構は、流路の両岸に石材を配したもので、13世紀前半頃の瓦器碗、土師皿、羽釜などが出土した。

第4トレンチは、宮川遺跡の中央付近にあたり、現在の集落内にトレンチを設定した。トレンチ内からは、弥生時代後期の竪穴式住居跡2棟、全壊した横穴式石室1基、中世の掘立柱建物跡3棟、古墓1などを検出した。竪穴式住居跡は、いびつな八角形の平面形態を有するものと、方形のものからなる。八角形住居跡からは、弥生時代後期前半から中頃の一括資料が出土しており、この地域における後期の土器編年上の空白を埋める重要な資料である。亀岡市北金岐遺跡、園部町今林遺跡などでも後期後半の良好な資料が得られており、今回の出土資料は、これらに先行する土器群として位置づけられる。当該期の在地系土器群は、近江系の土器群の影響を大きく受けていることを特色としており、受け口状口縁をなし、櫛描き列点文を施す甕の特徴などは通有にみられるものである。この遺跡で出土した資料も、その例外ではなく、弥生時代後期の土器群の様式的理解を深める上で、今後検討すべき資料となろう。一方、横穴式石室は、後世の耕作の際、地山を掘り込み、石室の石材を地中下に落とし倒壊させたものである。周辺に石材の露出はみられず、調査当初、古墳の存在は知られていなかった。古墳の石材周辺からは、6世紀後半～末葉頃の須恵器が出土しており、後期後半頃の築造と推定される。また、須恵器とともに、9～10世紀の墨書土器や黒色土器碗が出土しており、古墳に対して追善儀礼が行われた可能性が高い。

今回の調査によって、宮川遺跡は、本梅川西岸の低地から河岸段丘状の微高地にかけて大きく広がることが判明した。弥生時代後期の八角形住居跡は、京都府内では初例である。多角形住居跡は、円形住居から方形住居へと移行する後期後半頃に多く認められる。京都府内では、京都市中臣遺跡第35次・第56次調査で、それぞれ六角形、五角形などの弥生時代後期の多角形住居跡が検出されており、その系譜が注目される。また、倒壊した横穴式石室墳は、周知の遺跡として知られていた京都府教育委員会調査地点の宮川古墳(宮川1号墳)を含めると、集落内で合計2基検出されており、これまで確認されていなかった古墳群の存在が明らかになった。一方、中世の遺構は、調査地点全域に及んでいるが、これは文献などにみられる金輪寺の勢力拡張に伴う集落規模の拡大によるとみられ、丹波地域でも数少ない中世村落の調査例として注目される。

(野々口陽子)

- 注1 高橋あかね、細山田章子、佐藤 謙、中村英之、武生幸子、鎌田真喜子、野尻和真、岩本早緒理、岡本美佳、繁松泰成、三俣源太、道岸史子、志賀智史、谷口剛文、下西 諭、日下部賢司、小坂至道、小滝初代、松下道子、山中道代、森川敦子、関口睦美、田中美恵子、井上 聡、松元順代、山内 雅、原田浩年、井内美智子、井内由美、柿谷悦子、市川芳枝、大川清一、岡本歌子、岡本智美子、岡本テツ、岡本照枝、岡本博美、岡本芳次、柿谷幸子、柿谷滋子、柿谷 茂、中西貞子、西田京子、西田タミ子、西田輝子、西田光子、西田芳子、藤村初代、森 和子、森 弘子、森川久子、山口正子、岡本志げ乃、柴田浩治
- 注2 石井清司ほか『新修 亀岡市史』 亀岡市 1995
- 注3 細見末雄『丹波の庄園』 名著出版 1975
- 注4 前掲注2に同じ。
- 注5 鍋田 勇「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成6年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1995)』 京都府教育委員会) 1995
- 注6 土井孝則「千代川遺跡第18次発掘調査・宮川遺跡発掘調査」(『亀岡市文化財調査報告書』第30集 亀岡市教育委員会) 1993
- 注7 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会 1980、石井清司・引原茂治・伊野近富「亀岡盆地の瓦器について」『京都考古』第37号 1985
- 注8 石井清司・田代 弘ほか「北金岐遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注9 野島 永・野々口陽子ほか「今林2号墳・今林遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注10 「中臣遺跡発掘調査概要—昭和55年度—」 京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980
- 注11 「中臣遺跡発掘調査概要—昭和57年度—」 京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982

5. 興戸宮ノ前遺跡発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、主要地方道八幡木津線(府道22号線)のバイパス道路(通称山手幹線)に関する道路新設改良事業、及び住宅宅地関連公共施設整備促進事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

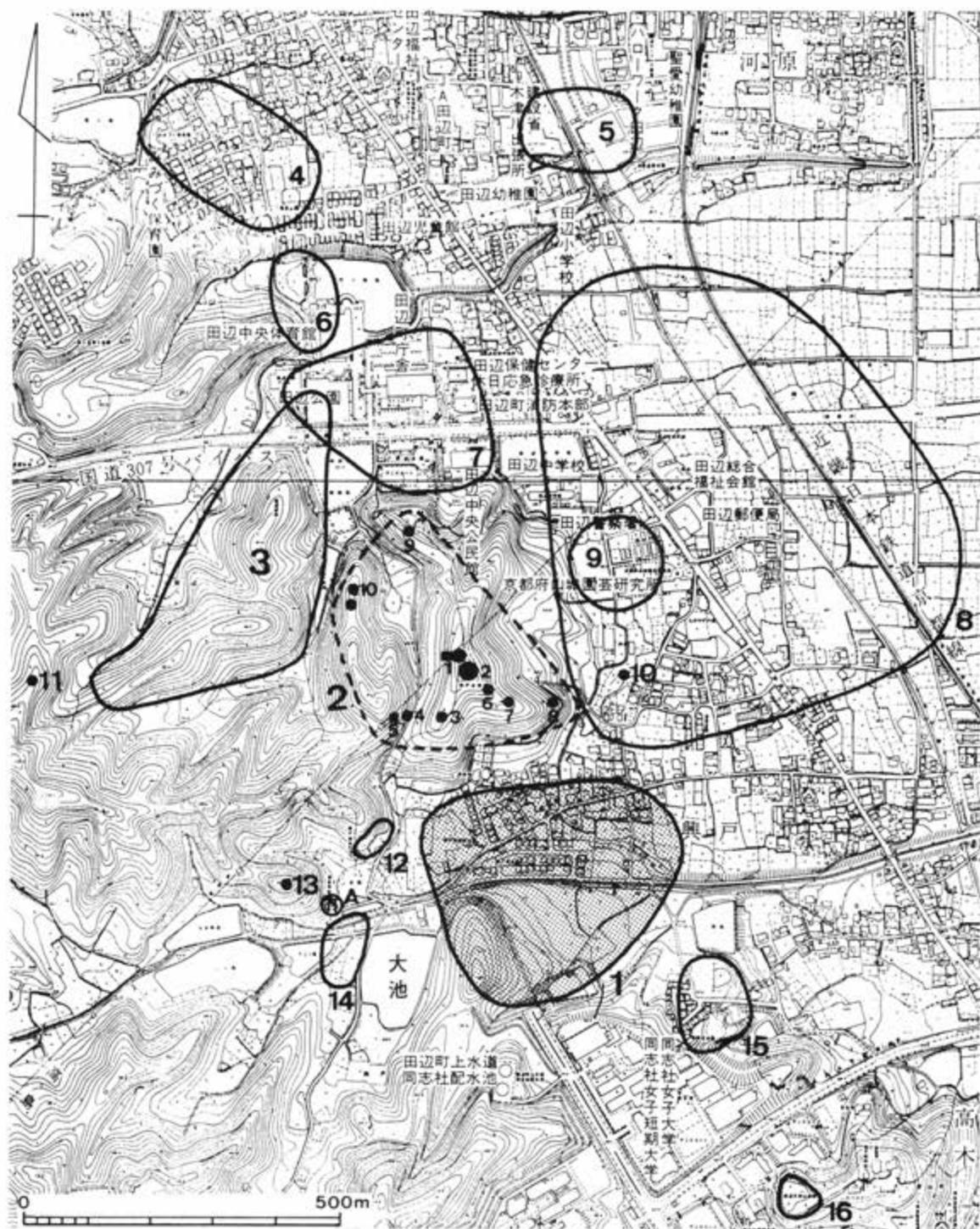
平成7年度事業計画に係る埋蔵文化財の調査依頼か所は、京都府綴喜郡田辺町大字田辺、及び大字興戸地内にあたり、同志社大学田辺キャンパスの北側境界から国道307号線との接合部に至る延長約1kmの範囲にある。この道路敷設が計画されている事業対象地は、防賀川河谷を除くと、その多くが平地との比高約50mを最高所とする低丘陵地帯となっている。このため、道路路面の計画幅員は13m(一部25m)であるが、丘陵部の切り土、及び谷部の盛り土部分の工事幅は、路面幅を大きく越えて不整形に広がる形状を示す(第44図参照)。

ところで、この対象地内には、周知の遺跡として、南側から興戸宮ノ前遺跡、興戸古墳群(10号墳・古墳状隆起1基)、田辺城跡の三遺跡が存在しており、道路建設に関わる用地と遺跡の重複部分の埋蔵文化財の調査が必要である旨が田辺町教育委員会・京都府教育委員会から照会・指導があった。これを受けて、当調査研究センターが調査を実施することになったが、開発事業の工程の都合で、工区南端の興戸宮ノ前遺跡から調査に着手し、順次北進して残る二遺跡の調査を実施する方針をとった。その際、興戸宮ノ前遺跡の今年度調査地区、及び興戸10号墳、10号墳に南接する古墳状隆起は、過去に発掘調査例がなく、遺構の存否の確認に主眼を置いた調査方法(試掘)を採ることとした。また、北端の田辺城跡では、城郭の縄張りをめぐる研究成果や遺物の採取などの過去のこの遺跡に対する一定のデータの蓄積があるため、遺構の存在する可能性は極めて高いと判断し、面的な調査(調査面積約1,000㎡)を計画した。

そこでまず、埋蔵文化財の実態の不明瞭な興戸宮ノ前遺跡で総面積500㎡の試掘トレンチを用地内各所に設けて、掘削調査を行ったところ、中世の城郭関連遺構をはじめとする顕著な遺構が存在することが明らかになった。このため、関係諸機関と協議のうえ、調査区を拡張して面的な調査に切り替えることとした(拡張後の総面積は1,500㎡である)。

一方、残る二遺跡については、興戸宮ノ前遺跡の調査が、期間的にも経費的にも拡大したことから、調査方針を変更し、興戸古墳群については、人力による現況の地形測量、田辺城跡については、空中撮影による現況の地形測量及び遺構面までの重機による掘削を実施するにとどめ、次年度に調査を繰り越すこととした。したがって、この概要報告では、年度内に調査が一応完結した興戸宮ノ前遺跡地区について、調査の概要及び成果を報告することとする。

興戸宮ノ前遺跡は、各種遺跡地図によると、綴喜郡田辺町宮ノ前・郡塚・川原谷他に位置し、



第43図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/10,000)

- | | | | | |
|-------------|-------------|----------|-----------|----------|
| 1. 興戸宮ノ前古墳 | 2. 興戸古墳群 | 3. 田辺城跡 | 4. 尼ヶ池遺跡 | 5. 河原遺跡 |
| 6. 竹ノ脇遺跡 | 7. 田辺遺跡 | 8. 興戸遺跡 | 9. 興戸廃寺 | 10. 郡塚古墳 |
| 11. 稲葉丹後谷古墳 | 12. 興戸宮ノ前窯跡 | 13. 酒壺古墳 | 14. 川原谷遺跡 | 15. 興戸城跡 |
| 16. 天神山遺跡 | A. 酒屋神社 | | | |

東西400m・南北300mの規模をもつ遺跡(遺物散布地)^(E2)である。遺跡は、防賀川河谷が木津川沖積低地へと移行する谷口付近に立地する。この谷口付近には同河川による扇状地が形成されており、遺跡は谷口に近い扇頂部から扇中央部にかけて広がっている。また、遺跡の南半部は、生駒山系の

北側にのびる田辺丘陵(甘南備丘陵)の末端にかかり、先の防賀川と南の普賢寺川河谷に挟まれた東西に主軸をもつ丘陵の先端付近の北辺にも一部重複している。

今回の調査地点は、丘陵の縁辺に人為的に固定されて天井川化した現在の防賀川以南の部分で、遺跡の南西隅部にあたる。この地区は、上記の丘陵部に相当し、標高60~77mを測る(北側の防賀川河谷との比高差は約20~30m)。この丘陵付近は、同志社大学建設のときに、詳細な地質調査が行われている^(注3)。それによると、調査地点付近は、洪積層(大阪層群)の最下部にあって、基幹河川の堆積によって形成されたと考えられる砂礫層(大住礫層=中部礫層)、またはさらにその下部にあって新第三紀鮮新統(200万年前)の堆積盆地形成期の砂泥層(尊延寺砂泥互層)が地山を構成している。両者は、未固結の比較的淘汰されやすい基盤層で、風化・浸食されやすい性質をもつ。また、調査地の北西部で西側丘陵下の「大池」と称する池に面した斜面側には、風化した岩盤層が広くみられ、古生層と考えられている。

次に、遺跡とその周辺の状態を概観する。遺跡のすぐ西側で防賀川扇状地の谷口付近に延喜式内「酒屋神社」に比定される神社が鎮座する(第43図-A)。神功皇后が酒壺を納めたと伝え、西側背後には酒壺古墳が存在する。付近には造酒に関する地名や記録が散見されるが、今井啓一氏は、継体天皇筒城宮との関連でこれを説明する^(注4)。つまり、継体の子の菟皇子が酒人公の始祖であるとする史料(日本書紀・新撰姓氏録など)を根拠として、この地域周辺に伝わる息長氏に関わる史料を含めて、この地域における継体帝筒城宮のもたらした歴史的な影響を考証されている。酒屋神社のすぐ北側の丘陵斜面では興戸宮ノ前窯跡が発見されている(同-12)。6世紀末~7世紀初頭の須恵器専業窯であるらしい。防賀川河谷を挟んだ北側の丘陵上には、総数10(11)基からなる興戸古墳群が面的に展開している(同-2)。個々の古墳の規模はさまざまであるが、残存状態が良好な粘土塚中から銅鏡・石製腕飾類などが出土した2号墳(寿命寺古墳)や、弥生時代後期の方形台状墓と判明した5号墳、あるいは前方後円形を呈し、立地環境から2号墳より先に築かれたと想定される1号墳などがその内容のわかる例である。

なお、1号墳の墳丘下に弥生時代の竪穴式住居跡が被覆されるかたちで検出されており、南南東約1kmに位置する弥生時代後期の竪穴式住居跡群が検出された著名な天神山遺跡(同-16)とともに、高地性集落がこの地域に点在するようすが明らかになりつつある。興戸古墳群の立地する丘陵下から東方の平野部にかけては、興戸遺跡が広がる(同-8)。この遺跡は、範囲が広く、12次にわたる調査成果の内容も多岐にわたるが、特に、京都府山城園芸研究所の所在する台地上で検出された奈良から平安時代の掘立柱建物跡群は、建物跡の規模や配置に見られる整然とした規格性などから、綴喜郡衙の可能性が指摘されている。周囲に「郡塚」地名が残っていることや、興戸地名自体が「郡門(コホリド)」に由来する可能性が指摘できる点から、注意を要する。また、このすぐ西方には、白鳳期から鎌倉期にかけての瓦類が多量に採取されている地区(興戸廃寺・同-9)があり、郡衙に隣接する郡名寺院(「ツヅキデラ」)の存在が想定できる。

遺跡の南東に隣接する興戸城跡(同-15)については、今回の調査成果と関連をもつのでやや詳しく述べる。この城跡は、通称南興戸の光照寺の西側で青松山とも寺山とも称され、境内の裏山

一帯に遺跡として指定されている。比定の主な根拠は、光照寺に「興戸城主藤原長門守季長」と記した位牌が大正初年まで残されていたことによる^(註5)。また、これとは別に、白鳳期の国宝十一面観音立像を本尊とする(息長山)普賢寺(観音寺)に伝わる『普賢寺変遷史略』には、「祖穀庄、南北興戸村也。興戸家館、南興戸西南ニアリ…」とあり^(註6)、これも「城」と「家館」の違いこそあれ、おおかた先の比定地付近に城館が存在したことを示す史料になるかもしれない。いずれにせよ、この遺跡内では発掘調査例はなく、地上に残された城館を示す形跡も認められない。

さて、今回の調査の対象となった興戸宮ノ前遺跡については、過去に1度発掘調査が実施されている(1980年)。調査地は、今次調査地点の北東側で、北興戸集落の中を東西に貫く道路と、防賀川にかけての低台地上が対象となった。その結果、防賀川の流路の変遷過程、及び中世の遺構が存在する可能性を示す土器類が出土したことなどの成果を得た^(註7)。また、これとは別に、今回の調査地のすぐ東側で丘陵部の中腹を南北に通じる道路があるが、この道路下に幹線水道管が通じている(第46図水道道)。この水道管

埋設工事のときには(1981・82年)、正確な位置は不明ながらも、青磁椀が出土したという伝聞を知った^(註8)。現在、その所在はつまびらかでない。青磁椀は、鎗手蓮弁を劃花であらわした龍泉窯系とみられる。さらに、調査対象地内の丘陵部から、過去に須恵器片が採取されているらしい^(註9)。時期や器形を知ることができないため、その性格は容易に判断できないが、出土地点の立地環境から、古墳の副葬品、または窯の生産品の可能性が指摘できる。

2. 調査の経過

調査地は、はじめにも記したように、大半が平地部(興戸集落付近)との比高差20~30mを測る丘陵地帯であり、巨視的にみると、南南西から北北東に主軸をもつ尾根筋の先端付近にあたる。さらに、地形を詳細に観察すると、調査区の中央やや南寄りに、尾根筋に直交して西側に深く



第44図 工事対象路線図

貫入する谷地形(崩落谷地形)があり、これを境に北側は急峻な丘陵地形、南側は緩傾斜地となる(第46図参照)。調査前の土地利用をみると、北側の丘陵部は、自生した竹藪に混じって落葉広葉樹が主体を占めて繁茂する自然の植生景観を示すのに対し、崩落谷以南は整備された竹藪で、土入れなどの人工の手が加えられた形跡が認められる。また、北側の丘陵部は、第44図の地形図には表現されていないが、その西側に南北主軸の谷地形(谷B)が深く貫入し、独立した尾根を形成している。この支尾根上には、2か所のピークがあり、特に南側(山頂A)は、北側のピーク(山頂B)との間に溝状の陥没地形を挟んで独立した円丘状を呈していた。北側の山頂Bは、南北に長い楕円丘状で、北・東・南の三方は自然地形に繋がってそのまま下降している。

調査は、北側丘陵部の二つのピークが古墳状の隆起を呈していたため、その確認を目的として、ピークを三分割するトレンチをそれぞれ設定した(試掘トレンチ3～6)。また、崩落谷地形以南の竹藪部分についても、土入れによって旧地形が地表下に埋没して保護されていると予想して、この緩傾斜地にも試掘トレンチを設けた(試掘トレンチ1・2)。

各試掘トレンチで調査を実施した結果、試掘トレンチ1・3～6で遺構の存在を確認した。このため、これらの遺構の広がりを目指す目的で各トレンチを拡張した。すなわち、試掘トレンチ1では、調査区を東側に拡張し、試掘トレンチ3～6は、各トレンチを連結した上で、なおかつ部分的に調査区を大きく拡張して、面的な調査に切り替えた(第45図参照)。この際、面的な調査区が崩落谷を挟んで南北に二分されたため、報告の都合上、南側を1トレンチ、北側を2トレンチと呼称して記述する。なお、2トレンチ周辺の、特に北側で小規模な谷状あるいはテラス状を呈する地形がみられたので、4か所にサブトレンチ(S-1～4トレンチ)を追加して状況確認を実施した。

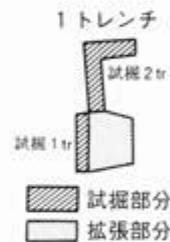
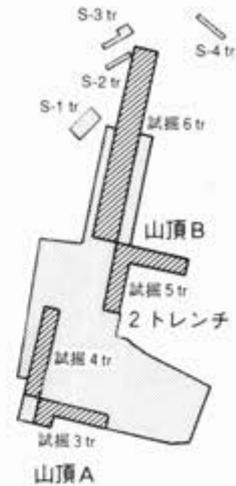
調査は、平成7年8月17日から同年12月18日まで実施し、最終的な調査面積は、1,500㎡である。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美・同主任調査員引原茂治・同調査員伊賀高弘・奈良康正が担当した。調査に係る経費は、全額京都府土木建築部が負担した。なお、京都府教育委員会、田辺町教育委員会、京都府立山城郷土資料館、同志社大学校地学術調査委員会、大山崎町歴史資料館、田辺町の文化財を学ぶ会などの関係諸機関からご協力・ご教示いただいた^(注10)。また、現地作業には作業員・整理員・学生諸氏の協力があつた^(注11)。感謝の意を表したい。

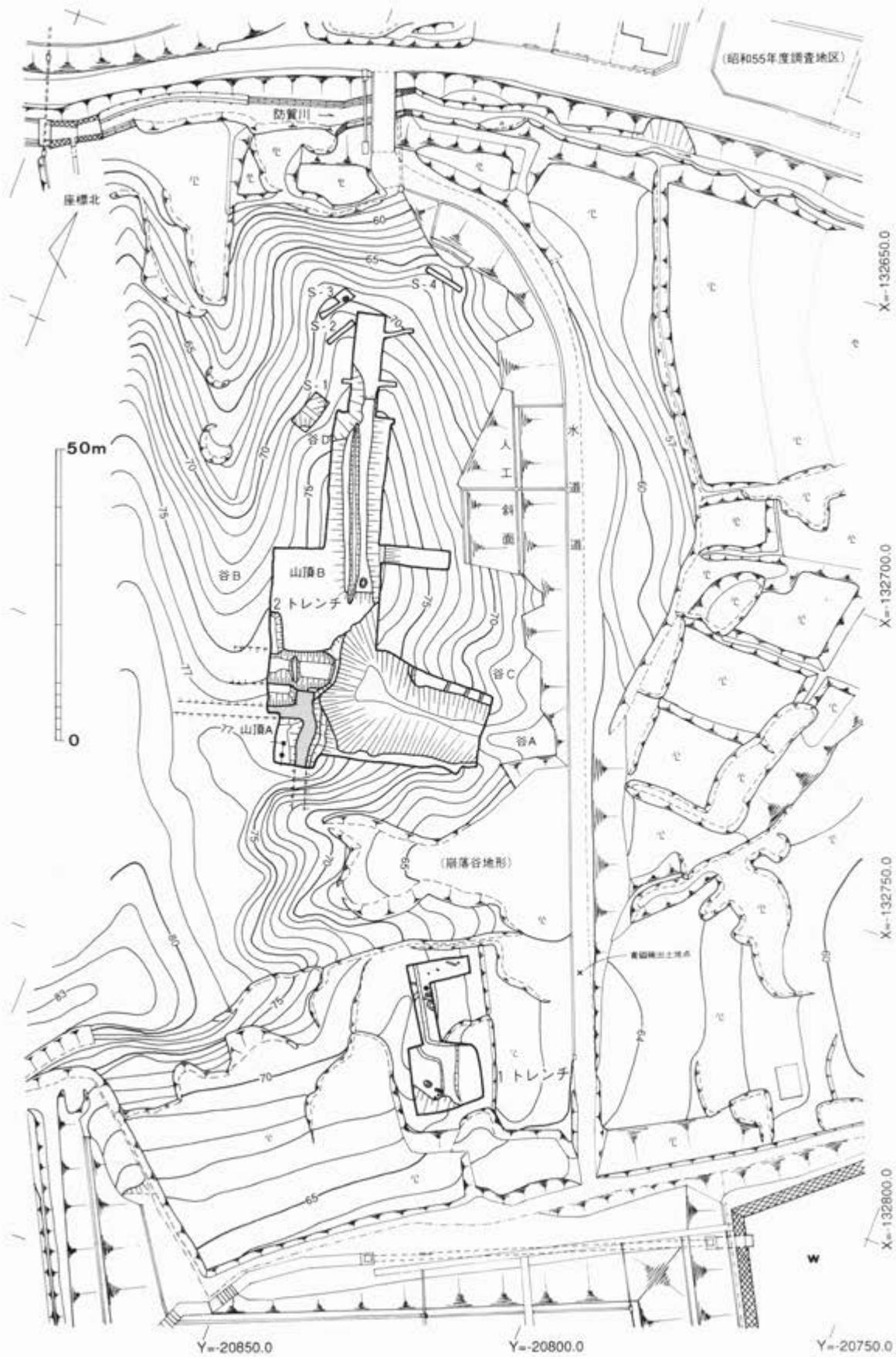
3. 調査概要

(1) 1トレンチ

崩落谷の南方の1トレンチでは、集石土坑や素掘り溝などを検出した。調査区の現況の地形は、試掘トレンチの南北トレンチ部分が高く、ここを頂点として東方あるいは南方にゆるく傾斜して



第45図 トレンチ名称図

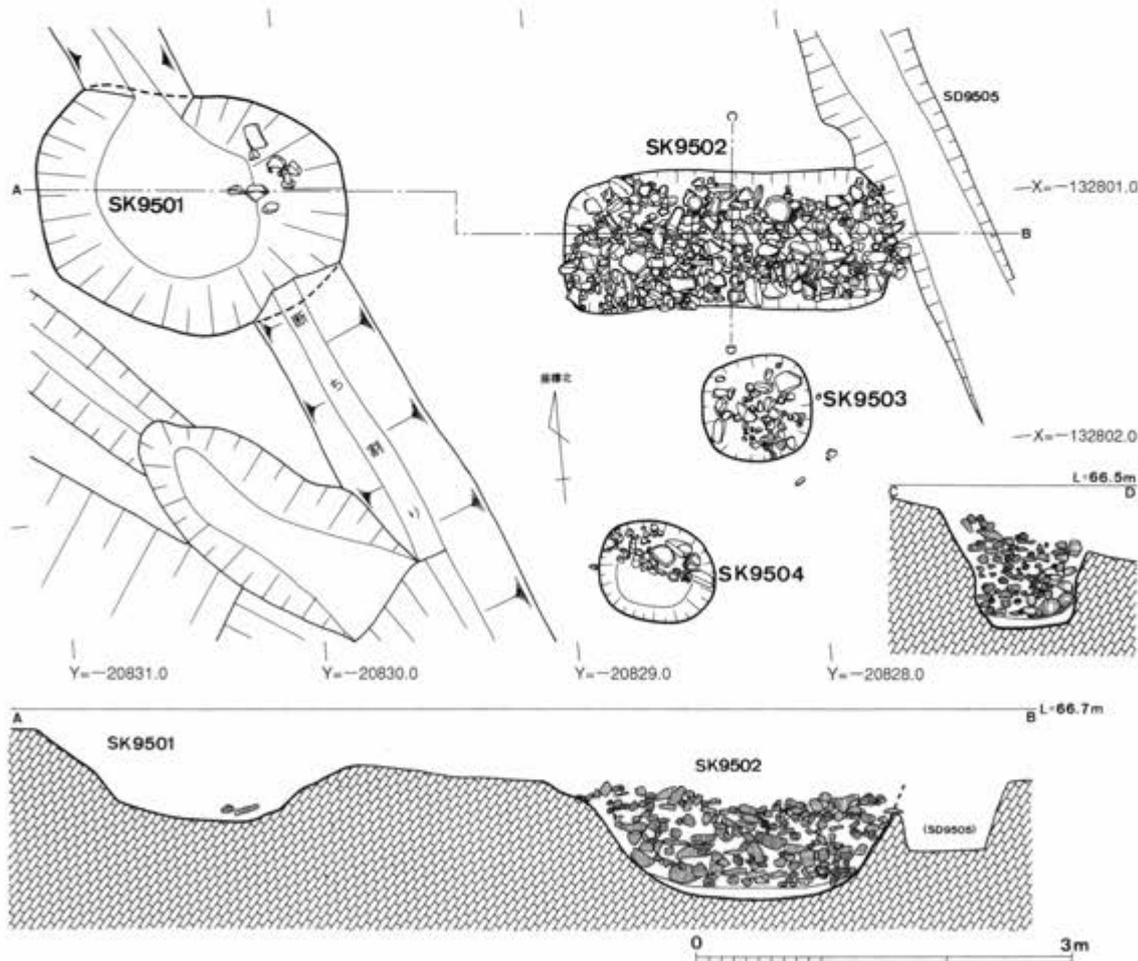


第46図 興戸宮ノ前遺跡調査地周辺地形図

面は、逆台形あるいは底部と側壁との境界がゆるやかな「U」字形を呈し、1トレンチ南半部では地形の勾配に合わせて、底部が階段状に深く掘り込まれる。溝内の埋土は暗褐色土で、内部から近世以降の陶磁器片が出土した。この地区が竹藪に利用される以前(地元の人の話では戦前とのことである。)の土地の境界、あるいは耕作に関連する施設とみられる。

集石土坑(S K 9501~04) 1トレンチ南西隅部の東西3.5m・南北2.0mの範囲に集中していた礫堆を有する特殊な土坑である。形態や規模はそれぞれ異なるが、埋土中に多量の礫を混じえる点が共通する。

最も西側のS K 9501は、試掘トレンチ1の断面観察を目的としたトレンチ東壁際断ち割りによって、その中央部を破壊し、記録作業以前に内部の大半の堆積土を除去してしまったので、礫の堆積状況を示す図を残していない(第48図は礫の大半を撤去した後の状況を示している)。掘削時の観察によると、坑内埋土は上下2層に分かれ、上層は黄茶色粗砂、下半1/3は黄茶色混礫土で多量の礫を含む。つまり、他の3土坑と比べ、検出面に露出していた上層埋土中には直径3cm程度の小礫が少量混入するにすぎず、他の遺構が検出面から多量の礫を含んでいたのと様相を異にする。ただ、下層中の礫は密に混入しており、一辺10cm程度の扁平な自然石(河原石)が目立って多い状況であった。下層の礫堆土中から、8世紀の須恵器蓋片(第54図R P - 5)が出土した。土



第48図 1トレンチS K 9501~9504実測図

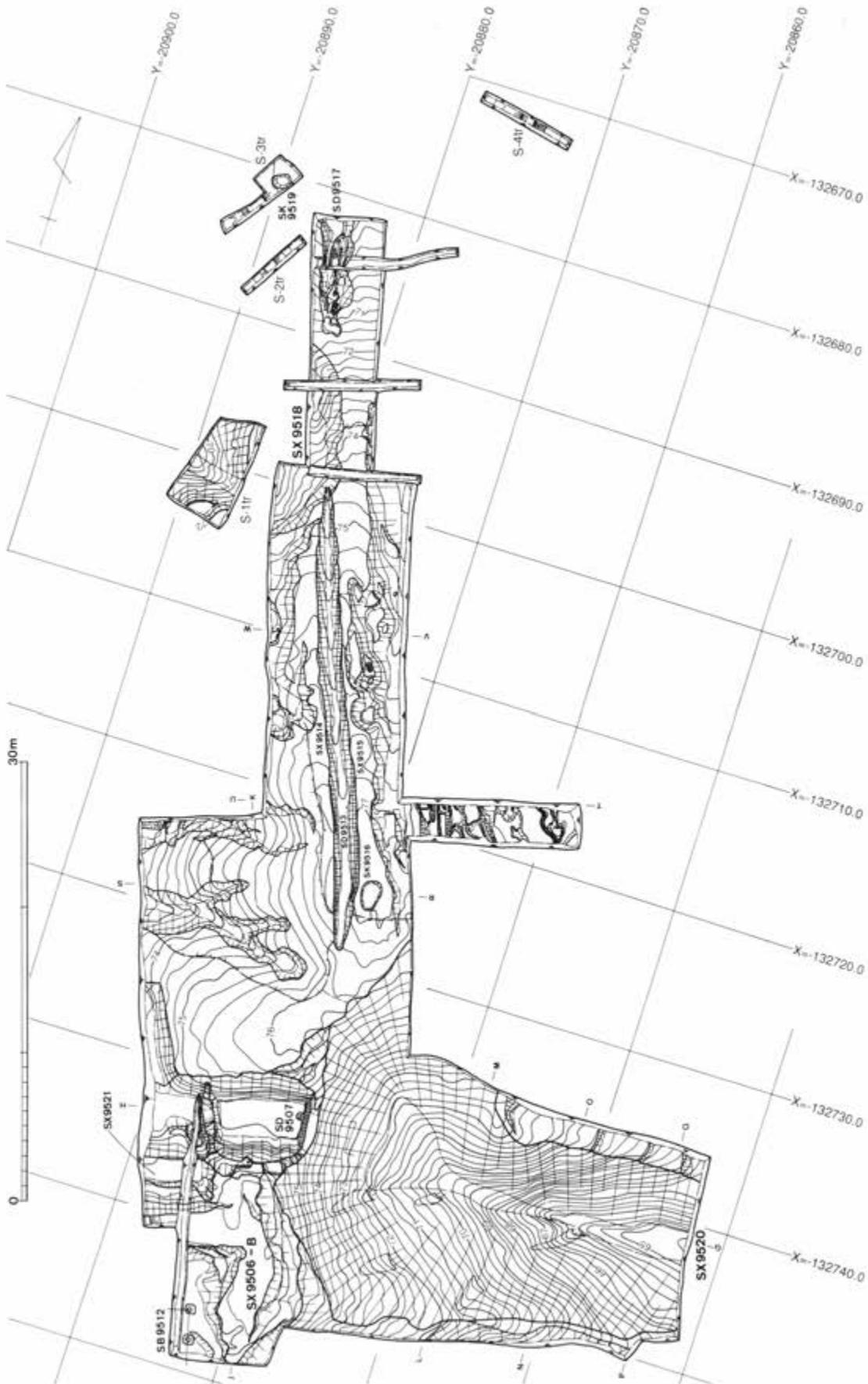
坑の平面プランは、やや東西に長い長円形(長径1.25m・短径1.0m)を呈し、断面形は、少しカーブを描く底面から屈曲した側壁が外上方に外反ぎみに立ち上がる形態を示す(検出面からの最大深さ0.4m)。

S K 9502は、S K 9501の真東約1.0mに位置する土坑である。東西に主軸をもつ(E-5°-S)隅丸長方形プランを呈する。検出面での規模は、土坑東端が一部後出するS D 9505に切られ破壊されるが、主軸長1.35m・幅0.6mを測る。断面形は、縦横位置で少し異なり、主軸上の断面がゆるく円弧を描く底部から、そのまま小口側の東西両側壁に変換点を設けずに連続し、側壁は内湾ぎみに外上方に立ち上がる形状を示す。一方、横断面は、土坑の中央部付近では、平坦な底部と側壁との境はやや鋭く屈折し、側壁は下半が垂直に近く立ち上がった後、その中位から折れて外上方に直線的に立ち上がる(北側の高い方の検出面からの深さは0.5mを測る)。土坑の埋土は、検出面から底付近の一部を除いて、ほとんど礫堆で占められる。礫はいずれも自然石(河原石)で、径3cm前後の円礫と、長辺10cm内外の扁平な板状石材に分類できるが、特に、その配置に規則性はみいだせない。礫間の充填土は茶灰色砂質土であるが、礫の占める割合の方が高い。この礫堆の下位で、底部付近に茶褐色土が薄く(層厚約0.05m)レンズ状に堆積する。遺物は、西小口付近の礫堆上面から土師器細片が1点出土したのみである。

S K 9503・9504は、S K 9502の南に接するように分布する小規模な集石土坑である(S K 9502とS K 9503との距離は0.3m)。S K 9503とその南方に位置するS K 9504との間隔は0.55mで、両者をつなぐ線は北北東から南南西(N-38°-E)を示す。この付近の検出面は、北東から南西方向に向けて傾斜しており、南西に位置するS K 9504は遺存状態が悪い。いずれも、S K 9502と同等の規模の集石を伴うが、削平を受けて礫堆の遺存は悪い(礫堆の厚さ10cm程度である)。ただ、礫堆下に比較的深い(検出面からの深さ約0.2m)掘形を有しており、この掘形の示すプランは四隅の角の屈曲がやや目立つ円形(直径約0.45m)を呈する。掘形の下半部には、茶灰色砂質土が堆積していたが、上下層ともに出土遺物はない。

(2) 2 トレンチ

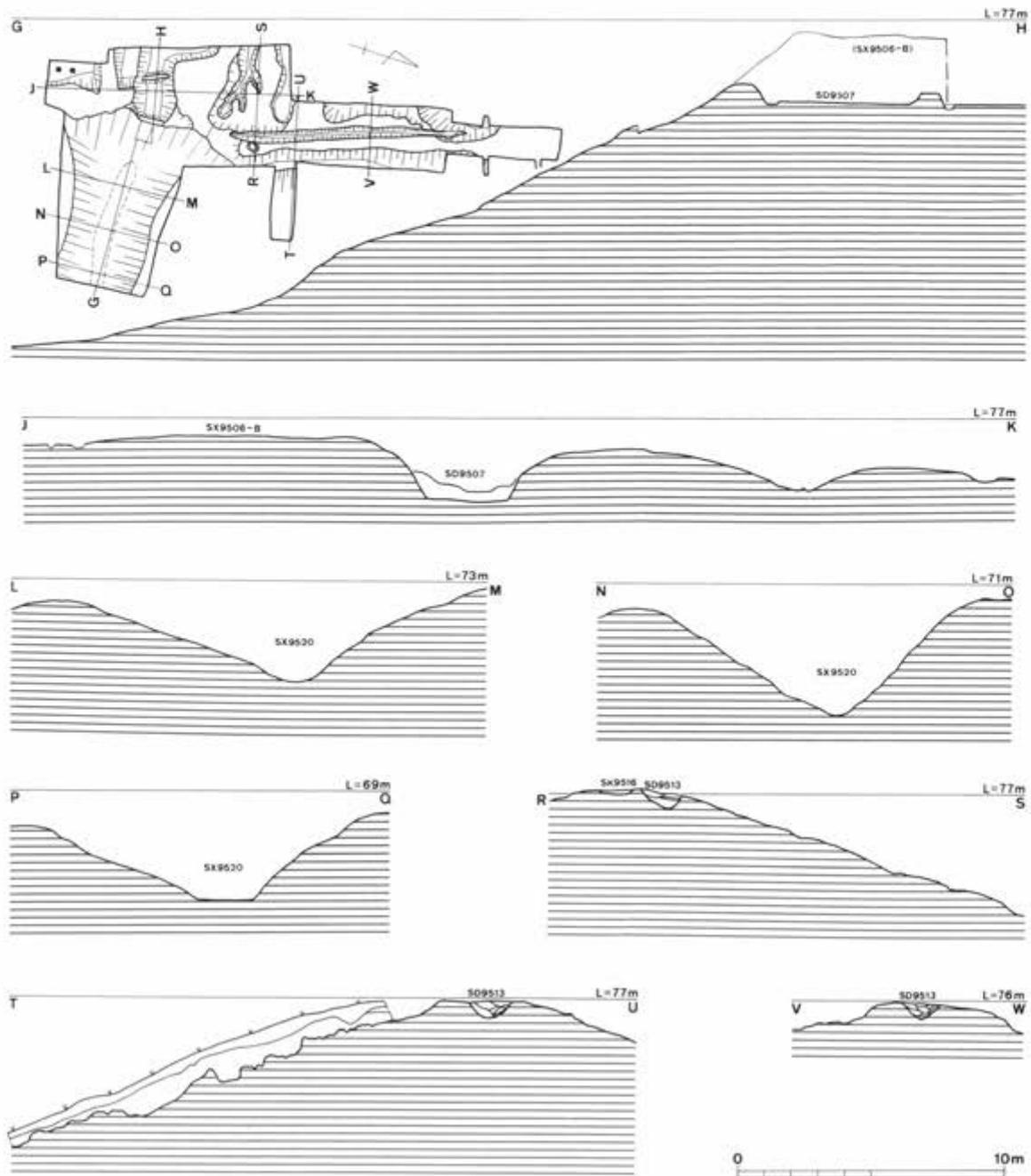
丘陵頂の2つのピークのうち、特に南側の山頂Aは、独立した円丘状を呈していたため、古墳の可能性も考慮して調査にあたった。その結果、まず隆起の北側に位置する東西に軸線をもつ溝状の陥没地形が、城郭遺構の尾根続きの侵攻路を遮断する目的で設けられた堀切であることが判明した。そのため、これに南面する隆起部も流土などを除去したところ、「ㄣ」形に曲がる土塁及びそれに囲まれた郭の一部であることが判明した。一方、北側の山頂Bは、最高点が77.0mと現存する土塁の高さと同じ標高を示し、山頂Aに認められた郭を見下ろさないまでも、同じ標高(防禦性としては同等の立場)にあることから、城郭の構えとしては、当然この地点にも何らかの防禦施設の存在が予想された。ところが、調査の結果、この地区では屋根の頂部の稜線上に、屋根筋に沿った素掘りの溝が南北に掘られ、溝の両側(東西側)に一定幅の平坦部を敷設するという特異な遺構を検出した。調査地の層序は、基本的には腐植土である表土の直下がすぐ地山となり、現地表からの深度は0.05~0.3mと非常に浅い。ただし、谷地形Aの東半部や、山頂Bの南北溝



第19図 2トレンチ平面図

の両側でも、特に東側では、地山との間に非常に淘汰のよい遺構廃絶後の堆積層（淡褐灰色系砂礫）が間層として入り、地山までの深さも最高1.0m前後と深くなる（第50図T-U断面参照）。以下、各遺構ごとに内容を説明する。

S X 9506 山頂Aの高まりを構成していた帯状の土壇状の高まりで、それだけでは明言できなかったが、典型的な箱堀と判明したS D 9507などの城郭関連遺構との関係から、郭を囲む土塁と判断した。面的な調査と併行して断ち割り断面観察を行ったところ、第53図にあるように、自然地形（地山と自然流土）上に盛り土することで構築している。すなわち、地山は、土塁の東縁にあたる谷Aへの傾斜変換線付近を最高所として西側に向かって約18°の傾斜角で下がる（第53図の



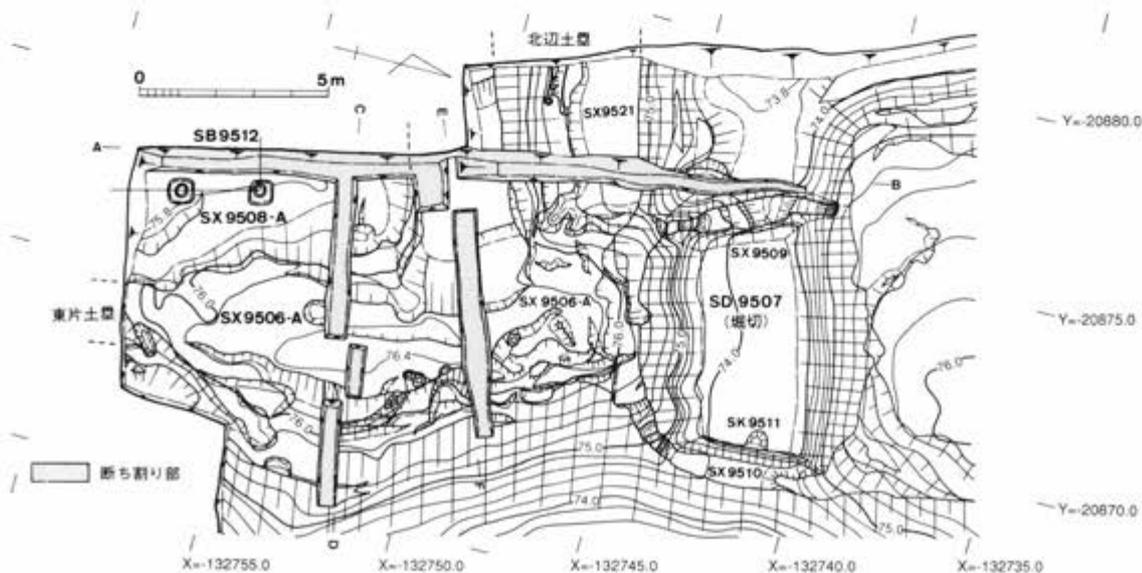
第50図 2 トレンチ断面図

C-D・E-F断面参照)。これは、おそらく谷Bがこの付近までのびており、その東側斜面の名残りと考えられる。

この地山斜面上には、土塁構築以前(谷A = S X 9520掘削以前)に堆積した土層がある。この層は、土質の違いから大きく2層に分層できる。下半は、黄褐色硬質砂土で、地山斜面の下半(西半)にのみみられる非常に硬く締まった土である〔土塁下基礎Ⅰ〕。上半は、黄灰色系砂質土(同系粘質土混じり)で、地山の最高所から調査区内全面にわたってほぼ均等な厚みをもって堆積する。その状況は、基本的には水平基調で、人為的に入れた土とはみなしがたい〔土塁下基礎Ⅱ〕。同層位から、古墳時代土師器片(体部)・古墳時代須恵器(RP-1)・土師器皿(RP-2)が出土した。以上2層は、谷B縁辺に自然に堆積した土砂と考える。この層上に土塁盛り土がのることになるが、トレンチ西縁付近には、さらに土塁盛り土との間に別の土層が薄く貫入する。これも西に向かうにつれて層厚を増すとみられるが、A-B断面地点では、約40cmの厚みがあり、淡黄灰色土に灰白色粘土がブロック状に混入した汚れた土層で、明らかに人為的に敷設した土とみられる。

さらに、この層の上半は腐植土に漸移しており、一定期間地表に面していた可能性がある。この層は、後述する郭(S X 9508)を構成する平坦地の造成土とみられる。土塁の盛り土作業は、郭造成土上を基礎に行うが、東半部は同層位が途切れるため、より下位の土塁下基礎Ⅱ直上をベースに盛り土する。盛り土の作業工程は、A-B断面に顕著に示されるように、土質・土色の違いから大きく、2段階の工程(段階)を看取できる(土塁盛り土Ⅰ・Ⅱ)。土塁盛り土Ⅰは、灰色系の粘土と土を交互に積み上げ、非常に硬く叩き締めている。作業過程としてはE-F断面にみられるように、西寄りに台形状の土塊(核)を設け、この核の斜面に重ね積みするように盛り土を加える。

一方、盛り土Ⅱは、灰色系土と褐色系土を交互に敷き詰めるよう盛り、盛り土Ⅰに比べると粘土の占める割合が低く、相対的には軟質である。C-D断面をみると、東端に小さな土手を設置して、この土手斜面に順次土を敷き詰める。個々の盛り土単位は、薄い層状を呈する特質が確認



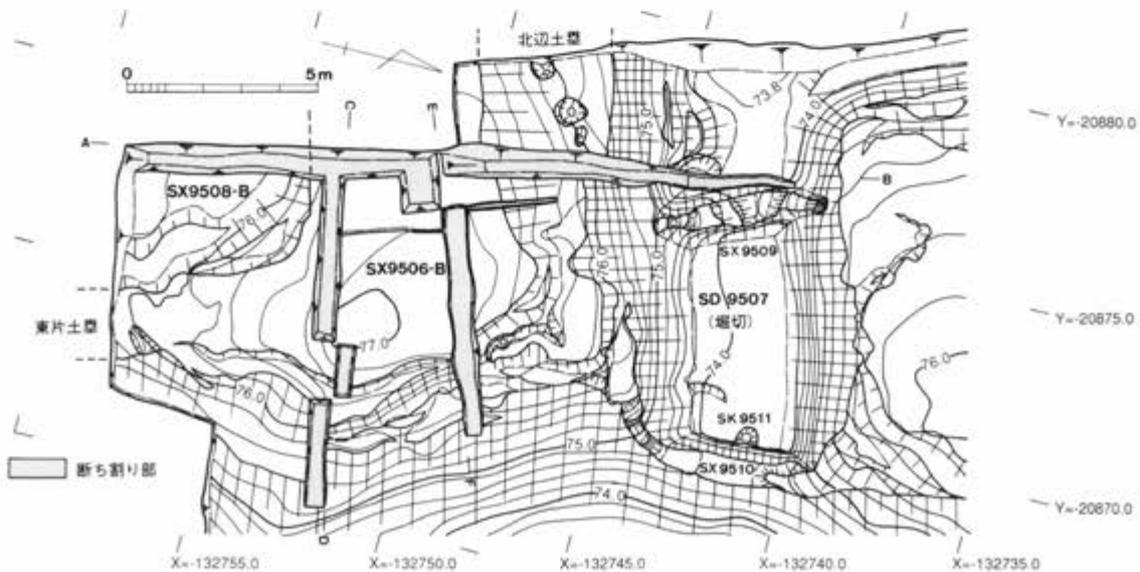
第51図 土塁・堀切・郭実測図(1) 土塁盛り土Ⅱ除去段階

できる。以上のような盛り土構築上の2単位が一回の普請における工程上の作業単位なのか、各単位間に一定の時間的な隔りがあるのかは、両者から時期差を示す遺物が出土していないことから容易には判断できない。ただ、盛り土の第1段階(土塁盛り土Ⅰ)の上面が幅約3cmにわたって灰白色粘質土(一種の腐植土)に変質している点を重視すると、後者の立場、つまり両者の間には時期差が存在すると考える。したがって、これを土塁Ⅰ期・Ⅱ期と区別して整理する。

報告では、Ⅰ期の土塁の面的な形態はS X 9506-A(第51図)、Ⅱ期はS X 9506-B(第52図)として図示した。時期ごとにその形態をみると、Ⅰ期の段階では、国土座標のX=-132,750m付近を軸線として(塁線の軸線の示す方位はN-70°-Eを示す)東進してきた土塁が、調査区西端から約5.0mの地点のY=-20,870m付近で「T」字形に分岐する(南進する塁線との内角は90°を測る)。北側にのびるものは、約2.0m北進したところで堀切に切れ、現状ではこれ以上続かない。南側に折れたもの(東辺土塁)は、土塁幅と土塁高を徐々に減じながらも調査区では途切れず、さらに調査区外にのびるようである。土塁の断面形は、残りのよい東西部分(北辺土塁)では、極めて整美な台形を呈し(A-B断面)、上面には水平な平坦面を設ける(上面幅1.8m・基底幅約5.5m・高さ約1.0m・堀切底からの比高3.2m)。土塁側面の勾配は、直線的で、その傾斜角は内外ともに一律約30°を測る。

一方、土塁Ⅱ期の段階の形態を概観すると(第52図)、かつて土塁の盛り土に供給された土が郭内に多量に流入しており、検出遺構は、相当規模の縮小した姿を示しているとみられる。少なくとも北辺土塁は、Ⅰ期より一周り大きいことは事実である。現状での平面形態は、基本的にはⅠ期と変化がない。ただ、東辺土塁の西折部以北の張り出しが不明瞭となっている。

土塁幅は、北辺土塁で上縁幅が約5.0m(基底幅は、北側斜面がそのまま堀切斜面へと連続するが、傾斜変換点間で計測すると8.6m)、基底はⅠ期の土塁と基礎を同じくし、この土塁を覆うように盛り土造成する。土塁の横断面形は、郭内や堀切内に堆積する相当量の土砂から判断して、上面がかなり侵蝕されて旧状を失っているとみられる。特に、基底幅は変わらないにしても、上



第52図 土塁・堀切・郭実測図(2) 土塁盛り土Ⅱを残した段階

半部の形態は、かなり変形して塁高も減少していると推定される。

ちなみに、現状での横断面形は、台形というよりも上面に水平面をあまりもたない頂部の丸い低平な三角形を呈する(基底部つまり郭面からの残存高1.4m、堀切底部からの比高3.2mを測る)。ただし、東辺土塁は、盛り土下に芯となるI期の土塁盛り土がなく、自然堆積土とみた土塁下基礎Ⅱ直上に盛り土を行っている。その断面形は、北辺に比べると多少上面に平坦面をもつが、塁高はむしろ低く、上部が流失した姿を示しているとみられる。

S D 9507 当初、古墳の周溝跡かと思われた陥没地形を精査したところ、土橋状の堀底仕切を備えた城郭の堀であることが判明した。尾根の鞍部を軸線に対して直交する方向に掘っていることから、堀切と称するべき遺構であるが、土塁を備えた郭の辺に平行していることから、機能的には横堀とみることも可能である。

平面的には、東西に主軸をもち(軸線の示す方位はE-15°-N)、対向する斜面の上縁線は平行関係にあって、一定の幅を保つ(上縁幅約6.0m)。ただし、北側斜面の上縁ラインは、調査区の西端で北側に曲がり(偏角は約113°の鈍角を示す)、約6.5m北進した後、再び西に折れるようである。この北進部分は、東側斜面のみ確認しただけで、溝(堀)の幅は不明であるが、溝底が東西堀(切)より一段高いため、一周り規模を縮小した支堀とみて差しつかえない。

東側は、東の堀底仕切り(S X 9510)を境に途切れてこれ以上のびない(検出総長11.0m)。横断面形は、第53図A-B断面にあるように、内外両斜面・底面とも直線的な整美な逆台形を呈し、典型的な箱堀の形状を呈する(底面の幅2.7m・内外両斜面の傾斜角40~45°を測る)。

堀底仕切りは、堀の東端と調査範囲の中央やや西寄りに2か所設けられる。いずれも、堀の主軸に対して直交する方位で構築されるが、この軸線は厳密には堀の直交線に対してやや斜めに振る。両者とも堅固な地山を削り残して整形し、横断面が台形状になるように加工している(基底幅1.5~2.0m、中央部での堀底からの高さ0.5~0.8m)。上面は、幅の狭い平坦面が確保されている(堀底仕切り中央部の上縁幅が最も広く約0.7mを測る)。仕切りの上面の側面形は、堀の両斜面に向かって徐々にせり上がる形に造る。すなわち、堀の中央部にわずかな水平面を残し、それから斜面側は、数段の段差を設けて階段状に整形する(特に、郭側は土塁の高まりがあるため、段数が多く4~5段を数える)。こうした形態から、この堀底仕切りは、平坦な堀底の歩行を妨げる障壁として機能すると同時に、反面、防禦ラインである堀切を渡る土橋の役割も果たしたと理解される。

東側の仕切り(S X 9510)に接して堀内の底部に土坑S K 9511がある。堀の東辺(S X 9510)の中央付近に位置し、平面プランは、接する側を截断面とする半円形を呈する(東西0.6m・南北0.5m)。底部は、堀底仕切に向かって徐々に深くなるが、接する部分で急角度で立ち上がる(堀底からの最大深さは0.2mを測る)。当初は、堀内の水を東方に流す暗渠のような排水施設の掘形とみたが、S X 9510下にはのびず、排水出口も東方の斜面にはみられない。堀底にみられる地山は、粘砂質で、雨水などは堀内には滞水せず、自然に下方に浸透したと思われる(堀内堆積土中にも滞水を示す土壌は認められなかった)。

S X 9508 土塁の南西部に位置する平場(平坦地)で、先の土塁に縁辺を囲まれた郭の一部と考えられる。郭の中心は、調査区の南西方向に展開するとみられる。その全体像は、多くが調査対象区外で不明な点が残るが、現況地形(第46図参照)をみると、郭の北縁を画する北辺土塁の西延長部が現地表に帯状の高まりとして観察できる。現状では、北東隅の開始部から西へ約30mまでその痕跡を追うことができる(これから先は南北方向にのびる尾根の稜線に接して消えているが、この稜線自体西辺土塁の痕跡かもしれない)。

一方、東辺土塁は、調査区をはずれると間もなく崩落谷の崖面に切られ、これから先の痕跡は全く残っていない。調査区内検出部分の郭の造成は、西方に傾く谷Bの斜面を埋め立てることによって平坦面を形成する。つまり、土塁の盛り土作業を行う際のベースとなる面が郭の上面となり、北辺土塁が造成されるまでに一定期間、すなわち、地表面であった期間が存在したことが植生による土層の腐植化によって推定される。したがって、調査区内では地山を削平したところはない。

調査区内の郭の面上はやや起伏に富んでおり、土塁I期の段階には掘立柱方式による建造物が存在した(S B 9512)。検出したのは南北に並ぶ柱穴2基のみであるが、柱間寸法は2.1m(7尺)で、柱筋の示す方位は、土塁の墨線とほぼ一致する(N-15°-W)。掘形は、一辺0.6mの隅丸方形で、径0.3mの柱当たりをとどめる。中世の建物跡の柱穴としては異例に規模が大きく、掘立柱という古式の形式を採る。郭の隅に位置することから、槽台(見張り台)的な建物を想定できようか。

S X 9521 土塁I期の段階で、東辺土塁の北延長部と北辺土塁に囲まれた部分に小さな平坦地(テラス状の小郭)が存在する。現状では南北1.5m・東西3.8m以上(検出長)の東西に長い帯郭状の長方形プランを呈する。第53図のA-B断面をみると、この郭面上にはS X 9508にみられたような造成土はみられず、土塁下基礎II相当の土層が直接露頭している。ただし、土塁II期の段階には土塁盛り土に覆われてこのテラスはなくなる。

S X 9520 堀切S D 9507の東延長部の丘陵斜面に、掘削前から東西に主軸をもつ比較的規模の大きな谷状地形が観察されていた(谷A)。これを掘削(表土と流土などの二次堆積土を除去)すると、南北両斜面が急崖をなす地形が現われた。特に、北側斜面は、最大50°近い急傾斜を示し、斜面の断面が描く線は直線状を呈していた(第50図のN-O断面参照)。この急斜面は、礫・粘土混じりの堅固な地山から成り立っており、崩落や地滑りといった自然災害によって形成された地形とはみなしがたい。

さらに、谷底は非常に狭く「V」字形(L-M・N-O断面)や底面の狭い逆台形(P-Q断面)を呈している。このため、この谷地形は、人工的に加工の手が加えられた切岸を伴う遺構と考えられる。堀切の延長にあつて、軸線もほぼ堀切とそろえており、縦堀を巨大化したものと捉えることができる。おそらく、斜面側を回り込んでくる敵に対する防禦機能を十分果たすとみられる。

規模は、検出部の東側約1/2の南北斜面上縁間の幅がほぼ一定しており約12.0mを測る。深さは最大5.0m弱で、N-O断面付近が最も深い。この遺構の北側の斜面上には、東側にゆるやか

に下る平地が形成されており、4段の段状部に挟まれた人工的に削平されたとみられる緩傾斜面の小テラスが東西方向に連続する。ところで、調査は実施していないが、これから北側に隣接する斜面にも、上記よりはやや規模の小さな谷地形(谷C)が存在する。これも同様に堅堀を拡大したような遺構であれば、こうした防禦施設を二重に並べたことになる。

S D 9513 山頂Bから北方にのびる尾根の頂部に沿って、南北に直線状に掘られた素掘り溝である。溝の主軸線は、N-20°-Wの方位を示す。南北両端は、地形の下降に伴って溝幅を徐々に狭めて自然に消滅し、小口が立ち上がるなどの任意に掘り止めた形跡はない(検出長32mを測る)。溝の横断面は、「U」字形を基本とし、底部と側壁との曲率がほとんど変わらない形状を示す。このため、側壁の上半は残りのよいところで垂直に近く立ち上がる。溝の上縁幅は1.5~1.7mとほぼ同一間隔を保っている。深さは、検出面の標高(北側ほど低くなる)の変化に関係なく、一率0.6mを保っている。溝内埋土は、黄褐色系砂質土がレンズ状に互層をなして堆積し、自然に埋没している。溝内からの出土遺物は皆無であった。

S X 9514・9515 溝S D 9513の東西両側に接して南北にのびる小土塁状の地形である。現状では、堅固な地山(黄褐色硬質砂土)の東西両側を削り出したもので、両者ともに内壁は先のS D 9513によって、外壁は別の掘削によって断面を台形状に造作している。その造作過程を先のS D 9513と総合してみると、尾根の鞍部を幅5mほど残して、その両側の斜面側に楔形の掘り込みを入れて、尾根稜線を台形の土塁状に削り出す。そして、その中央部に南北溝S D 9513を掘って土塁を東西に二分割する。この小土塁の外斜面は、比較的直線的に降下し(比高差約0.8m)、下端で屈折して幅の狭い(約1.0m)平坦面を形成し(S X 9515例が顕著)、その外側は再び傾斜して自然の斜面地形に連続する。この平坦面から自然の傾斜面にかけて、これらの遺構が造営されて以後の二次的堆積が約1.0mの厚みでかなり高い位置からみられる(第50図のT-U断面参照)。堆積土の土質は、淡褐灰色砂(茶褐色砂礫混)の非常に淘汰のよい土である。このような堆積土が尾根頂部付近にみられること自体、自然にはありえないことで、解釈の一案として、頂部の小土塁上に盛り土されていた土砂が侵蝕によって流され斜面側に堆積し、さらに風雨に洗われて砂礫がちの土に変質したとみることもできる。とすれば、上記の土塁状遺構は現状よりかなり高かったことが予想され、土塼状の構造物(障壁)を想像することもできよう。

S K 9516 山頂Bの最高点をやや南東に降った地点で検出された焼土坑である。S D 9513のすぐ東側で、先に土塁状遺構とみたS X 9516上に掘削されたものである。現状の形態は、やや南北に長い不整形円形(長径1.9m・短径1.5m)を呈し、断面は非常に浅い皿形(検出面からの深さ約0.2m)である。坑底面は焼けて赤変色し、埋土に焼土・炭・焼灰を混じえる。出土遺物はない。

S K 9519 今回の調査対象となった尾根の北端付近で、傾斜が急崖に変化する変換点付近に小規模なテラス状地形が2か所あり、それぞれにサブトレンチを設定した(S-3・4トレンチ)。このうち、西側のS-3トレンチで検出した焼土坑である。主軸を東西にとる隅丸長方形プランを呈し(一辺約1.5m)、底部は起伏に富んでおり、側壁は垂直に近く立ち上がる(検出面からの深さ約0.7m)。坑壁は、熱により赤変あるいは黒変色していたが、埋土は後から流入したのか、焼

土焼灰を混じえない。出土遺物はなかった。

その他の遺構など このほか、丘陵部である2トレンチでは、起伏を示す大小の地形がいくつか観察できる。このうち、山頂Bの西側の斜面に、尾根筋と直交する中規模な谷状地形が南北に2～3条平行して並んでいる。一見、それらは畝形阻害のようにもみえる。しかし、これらは掘り込みが非常に浅く、横断面も非常に浅い「U」字形(皿形)を呈すること、主谷に合流するいくつかの支谷が発達しているものがある(南端の谷)こと、溝の上端(開始部)が非常にゆるやかに傾斜して自然の斜面に漸移すること、などの点から、自然に開析された谷状地形とみた方が適切と考える。

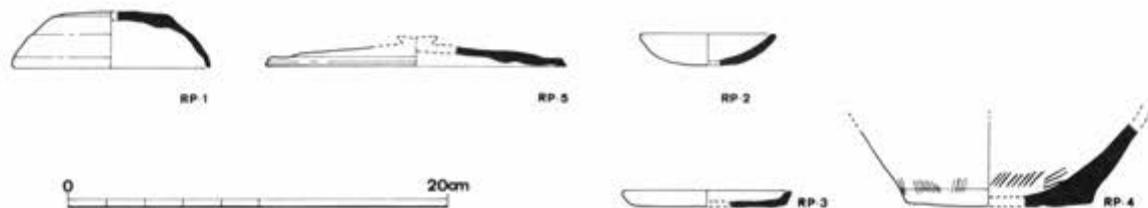
また、遺構番号を付したトレンチ北端のS D9517も、上記と同様の理由に加え、埋土に多量の流砂を含むことから地形図(第46図)に凹地として反映される自然の谷地形の開始部であろう。一方、トレンチ北西に設定したS-1トレンチで検出された陥没地形(谷状地形)は、このトレンチのS X9518で示した地形の西側への勾配の下部の状況を示したと考えられるが、サブトレンチの西壁では横断面が「V」字形となる。また、サブトレンチ付近の地山は、岩盤層で構成されており、自然の力で容易に開析されるとは考えがたい。薬研堀を意図した整堀の可能性が指摘できる地形であり、注意を要する。

4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は極めて少ない。また、残存度・遺存度の悪い資料が多い。遺物の出土地点は、RP-5がSK9501である以外は、すべて山頂Aの土塁・郭の断ち割り中に出土した。その出土層位は、第53図のA-B断面図に示したとおりである。個別の遺物について若干の補足を加える。

須恵器蓋(RP-1)は、平坦に近い天井部からゆるやかに屈曲した体部が、多少内湾しながら外下方に下り、口縁部付近でゆるく内方に屈曲する。口唇部は器厚を減ずるが丸くおさめる。体部外面から内面にかけてロクロナデ調整した後、天井部内面に不整方向の指頭ナデを加える。天井部外面は磨耗しているが、回転を伴う削りの痕跡が認められる。焼成は良好で、断面は暗紫灰色を呈する。

須恵器蓋(RP-5)は、全周の1/6ほどの小片であるが、焼きひずみが大きく、実測図の復原案に若干の問題を残す。しかし、いずれにせよ、天井高の低い扁平な全体形を示すと思われる。口縁部はゆるやかに「Z」字状のカーブを呈し、側端部には1条の弱い沈線が入る。天井部(外面の2/3)を回転ヘラケズリした後、口縁部外面から内面にかけてロクロナデする。さらに、天井



第54図 出土遺物実測図

部内面には不整方向のナデを加えて仕上げる。

土師器皿(RP-2)は、残存率が1/5以下と極めて小片であるため、実測図より浅い器形の可能性もある。いく分丸味をもった底部から、同一曲率で口縁部が立ち上がるプロポーションを示す。口唇端は丸くおさめる。内面から体部外面にかけて指頭によるヨコナデ調整する。底部外面には、軽いオサエ痕が認められる。黄褐色を呈し、胎土は精良である。

土師器皿(RP-3)は、平坦な底部から短く外上方に立ち上がる口縁を備えた、器高の極めて低い皿である。器表磨耗のため、調整方法は不明である。黄褐色を呈し、胎土は精良である。

瓦質揃り鉢(RP-4)は、底部付近の小片資料である。外形ラインは、平坦な底部から急角度に立ち上がって間もなく屈折して体部に移行し、外上方に内湾ぎみに開く。内面には屈折点はなく、体部からなめらかに底部に繋がる。器面は、内外とも縦位のハケで調整した後、内面はていねいなユビナデで平滑に仕上げる。内面の櫛目は8本一単位で、やや密に施文するが、下端の開始点から数cm以上までのびない。淡黄灰色(暗灰色黒斑有)を呈し、胎土中に長石粒を少量含むが、全体には精良である。

このほか、図示していないが、上段土壘盛り土中から器厚0.6~0.8cmのやや厚手の土師器片が20数点1か所に集中して出土している。接合するものは少ないが、同一個体とみられる。内外に細かいハケメが残り、胎土も比較的精良で砂粒を含まない。疑似口縁かとみられる突帯を付した破片がみられるので、二重口縁を呈する古墳時代前半の壺の可能性はある。

5. 小 結

ここまで、調査によって検出された遺構の事実報告に若干の考察を混じえて記してきた。最後に、今回の調査成果を列挙してまとめとし、今後の周辺域の調査に備えて一資料としておきたい。

(1) 1 トレンチで検出された集石土坑について事実としてまとめられる項目を再度整理しておくと、①規模や形状に差がある点。②1か所に集中的に群在する点。③坑内に径1.0cmから一辺10cm程度の自然の丸石、あるいは扁平な平石が密に詰まっている点。④土坑内の礫堆や坑壁に焼けたり熱を受けた形跡がない点。⑤わずかな出土遺物から8世紀に営まれた可能性が指摘できる点。などが抽出できる。特に、③の土坑内の礫堆は礫と礫の間にほとんど土砂を含まず、例えば坑内に腐りやすい容器などがかつて据えられていて、これが朽ちてその空間に上部の礫堆が落ち込んだとは考えられない。したがって、礫は当初から坑内に詰め込まれたとみられる。

ところで、今回検出の集石土坑群は、比較的自然的削平を受けやすい砂質の地山による傾斜した斜面上に分布する。すなわち、土坑掘開時の地表はすでに失われて、その下半部が検出されたと推定される。そうすると、土坑上半には礫の充填されない空間が存在したことも十分考えられる。SK9502が長方形プランを呈するのは、身長130cm前後の人物を伸展位で礫堆上に土葬した一種の埋葬施設と考えられないだろうか。この場合礫堆は礫床であり、排水機能も合わせもったことになる。①の形状の相違については、被葬者の年齢あるいは葬送姿勢を反映しているのかもしれない。②の1か所集中については、比較的短期間に継続的に造営されたことを意味し、おそ

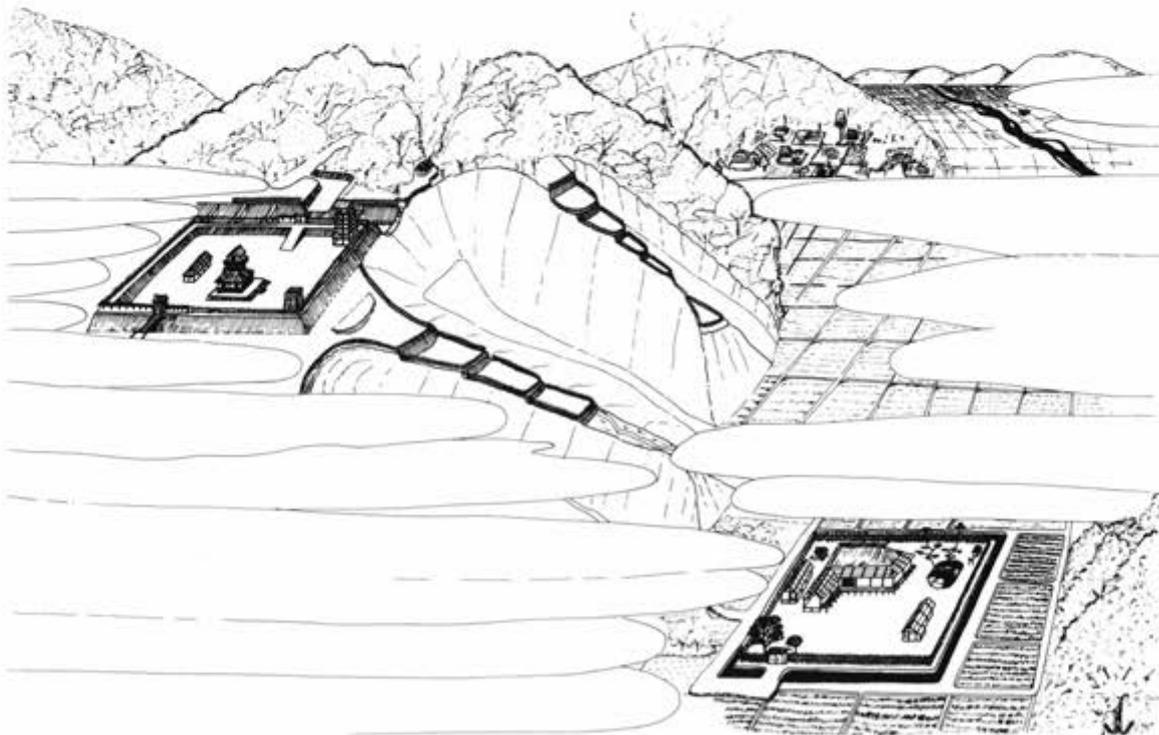
らく血縁的紐帯を有する家族墓的性格を想定できるかもしれない。今後、類例の蓄積を待って検討すべき遺構である。

(2) 2トレンチで検出された遺構のうち、その南半部、山頂Aを中心に展開する一連の遺構が中世の城郭関連遺構であることは誰の目にも疑いないであろう。直角に曲がる土塁に囲まれる郭内には、近世城郭でいう隅槽として機能したであろう大型掘立柱建物の片鱗を垣間みることができる。北面土塁の北側の尾根筋の鞍部には堀底仕切を敷設した箱堀の形態を採る堀切を配し、その東方斜面側に展開する谷地形には人工の手が加えられ防禦施設として切岸加工されている。

しかし、今回の調査では郭の中心部分が調査対象地外で不明な点が多い。現状地形を踏査して縄張り探査を実施したところ、今回検出された郭の東西長は約30mで、南西部は崩落谷によって大きく旧状を失っているが、東西長に近い規模の方形プランの郭を想定できる。

ただし、さらに周辺域を踏査した結果、若干の削平地らしき地形も観察されたが、多くは自然地形の可能性が高く、また、S X 9508のような規模の削平地は全く認められない。つまり、今回の調査で検出したS X 9508がこの城郭の主郭に相当するとみるのが妥当で、この点、城郭類型上、方形単郭式の小城郭と規定することができよう。ただし、今回検出した遺構のようすが一夜でできないことは、土塁の構築に大きく2時期が存在することからも明らかである。つまり、一定年月かけて修改築している要素がそこに認められる。たとえば、障子堀の形態をとる堀ではあるが、このような堀の形態は、堀底を城道として利用されるのを阻止する目的で仕切りを障壁として立てたもので、16世紀後半(永禄・天正年間)に一般化する横堀の特殊形態である。

一方、方形単郭式の縄張り構造や、土塁盛り土中出土の土器資料などは、明らかにこれに先行



調査地周辺復原想定イラスト(南方上空からの鳥瞰図)
主郭内施設・興戸城家館などは、あくまで想像である。

する所産(16世紀前半以前)とみられる。これを証す事例の一つを挙げれば、土塁Ⅰ期の段階の東面土塁北延長部と北面土塁に画された小規模な平場(S X9521)であるが、上記の報告では帯郭の一部かとみたわけであるが、別の見方をすれば、この郭が機能していた時期に隣接する堀切はまだ存在せず、比較的規模の大きな郭であった可能性がある。そして、東面土塁の北進部は、この郭の東辺を画する土塁の名残りで、堀切掘開以前にはさらに北進して、拡大S X9521の東辺を画していたのかもしれない。

それでは、次に具体的にこの城跡の機能時期について考察を加える。極めて出土遺物が少ない中であって、土塁盛り土Ⅱ及びその流土中から瓦質播り鉢と土師器皿の小片資料が得られた。遺存状態も残存率も低く、時期の決め手に欠くが、ほぼ16世紀の年代観を与えても大過ないであろう。この土塁Ⅱ期の段階では、東面土塁と北面土塁との交わり以北の張り出しがなくなり、郭S X9521も土塁盛り土に覆われて機能を失う。おそらく、この段階で箱堀(S D9507)が設定されたとみられる。したがって、この城郭の改修の下限はこの箱堀が障子堀を採用するという年代観から推察して、16世紀の中葉以降後半にかけての時期とするのが穏当な見解とみられる。それでは、さかのぼって築城時期についてはどうか。今回の調査で、この点を解明する素材は皆無に等しい。ただ、一般的に、この城郭のような単独の縄張りによる方形単郭小城郭は、15世紀後半～16世紀前半の山城の一つの特徴であるとの見解が通説化して^(註12)おり、これに従えば、16世紀前半以前の築城とみてさしつかえないと思われる。

次に、この城郭の性格について若干付言しておく。まず、出土遺物(特に日常什器)の少なさに示される非日常性、言い替えれば長期間の居住が認められないという点が挙げられる。郭の全貌を明らかにし得ない現段階では、居住施設の存在を全面的に否定することはできないが、その一面に配置された建物はその構造から槽台的性格をもつとみられる。要するに、この城郭遺構は、あくまで有事の際の砦(詰城)とみるにふさわしい構えを示しているのである。

それでは、この城郭の築城主体(国人領主層クラスとみられる)が日常起居する平時の居館についてはどうだろうか。筆者は、はじめにも記した遺跡地図の所載の「興戸城跡」(史料中の興戸家館)にその可能性を求めたい。この「興戸城」比定地と、今回検出した城郭遺構とは、直線距離にして約250mにすぎない。まさに、里とその裏山(里山)との関係を示している。つまり、村田修三氏の説く「山麓の居館(根小屋)が山上の郭群(詰の山城)と有機的に結合し合っている根小屋式城郭」の一例としてとられることができると考えられる^(註13)。そして、築造主体の候補としては、先の位牌に記された「藤原長門守季長」の一族とみるのが可能であろう。季長については、松永久秀の配下に属し、その子孫が本能寺の変(1582年)の折り、明智光秀に荷担したため豊臣秀吉に滅ぼされたと伝えられており、検出城郭が大規模化せず、単郭小城郭のまま廃城におこまれる事実と時期的にうまく符号するのである。

最後に山頂Bから北方に下る尾根筋に営まれた遺構について解釈を加えたい。ここで狙上にある遺構は、尾根の稜線に沿って南北に直線状に構築された、側面に盛り土土塁を伴う溝状遺構である。その性格は、山頂Aからみた場合、むしろ要害性が高く、防禦正面と認識されたであろう

山頂Bに、通路(城道)を設けること自体、城の構えとしては、やや不合理である。さらに加えて、このような壘壕状遺構の類例が他の城郭遺構では知られておらず、出土遺物が皆無である点からも、安易に山頂Aの城郭遺構と結びつけて考えるのは問題が残る。さらに、山頂Bにおける城普請は、上記の歴史的事情から途中で放棄されたことも考慮しなければならない。いずれにしても、これらの解釈は今後の検討課題としておきたい。

(伊賀高弘)

- 注1 中島 至「京都府の城」(『日本城郭全集』第8巻) 1967、竹岡 林・近藤 滋・河原純之他「京都・滋賀・福井」(『日本城郭大系』第11巻) 1980、西川英弘・鷹野一郎他「田辺町遺跡分布調査概報」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第3集 田辺町教育委員会) 1982、中井 均「南山城地方中世城郭跡」(『城』第113号 関西城郭研究会) 1982
- 注2 西川英弘・鷹野一郎他「田辺町遺跡分布調査概報」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第3集 田辺町教育委員会) 1982、『京都府遺跡地図』第5分冊[第2版] 京都府教育委員会 1985
- 注3 「同志社田辺校地及びその周辺の地質—南山城の自然史—」(『同志社大学校地学術調査委員会調査資料』No.13 同志社大学校地学術調査委員会) 1978
- 注4 今井啓一「式内社からみた南山城の開発」(『古代文化』第26巻第5号 (財)古代学協会) 1974
- 注5 村田太平『郷土田辺の歴史と伝説』 1955、村田太平『田辺町郷土史 社寺篇』 田辺郷土史会 1963
- 注6 「興戸の歴史」(興戸の歴史編集委員会編 1974年)で、この史料を示された。
- 注7 西川英弘・奥村清一郎・伊辻忠司「興戸宮ノ前遺跡発掘調査概報」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第2集 田辺町教育委員会) 1981
- 注8 地元の郷土史家、松村 茂氏が埋設工事の際土中から採取された。
- 注9 田辺町教育委員会の御教示による。
- 注10 とりわけ同志社大学の鈴木重治氏、大山崎町歴史資料館の福島克彦氏、山城郷土資料館の田中淳一郎氏、田辺町の文化財を学ぶ会の松村 茂氏からは調査を進めるにあたって格段のご配慮・ご教示いただいた。
- 注11 調査参加者(五十音順・敬称略)
石井伸卓・大庭篤史・岡 浩正・小原志奈子・田島 肇・永沢拓志・長谷川洋・福島正和・福永美千代・古川良子・堀之内淳・前野博史・牧 淳子・森脇一雄・芳谷興子・吉永清美・渡邊 努
- 注12 たとえば、こうした点を主張する研究として、山上雅弘「戦国時代の山城—西日本を中心とする15世紀～16世紀の山城について—」(村田修三編『中世城郭研究論集』 新人物往来社 1990)などがある。
- 注13 村田修三「中世の城館」(『講座・日本技術の社会史 第6巻 土木』 日本評論社 1984)にて用語規定されている。

6. 柿添遺跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、府道枚方山城線の道路改良事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、京都府相楽郡精華町北稲八間柿添に所在する。この道路改良工事に伴って当調査研究センターでは、精華町内で平成5年度に北尻遺跡、平成6年度に北稲遺跡・柿添遺跡第1次、今年度の柿添遺跡第2次調査と3年間にわたり調査を実施している^(注1)。

柿添遺跡は、遺物散布地として知られていた。昨年度実施した試掘調査の結果、古墳時代前期の溝などが見つかると、今年度は調査域を拡大して調査を実施することになった(I区)。また、開橋に接続する東西の計画道路内でも試掘調査を実施した(A～Eトレンチ)。調査期間は、平成7年8月21日～同年11月29日である。調査面積は、試掘調査面積を含めて約820m²である。調査費用は、京都府土木建築部が全額負担した。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美・同調査員有井広幸が担当した。調査の実施及び整理作業にあたっては、精華町教育委員会、地域の方々をはじめ関係者諸氏に多大なるご協力をいただいた^(注2)。記して感謝の意を表したい。

2. 位置と環境(第55・56図、図版第37)

柿添遺跡は、精華町北部の標高30m前後の平地に位置する。付近は、木津川(標高25m前後)と、西側の京阪奈丘陵(標高90m前後)から流れ出て木津川に合流する小河川によって形成された沖積地で、西から東にゆるやかに傾斜する小複合扇状地地形である。丘陵地内の谷部分には溜池が造られ、小河川のほとんどは水田用水化され、丘陵の裾付近から木津川西岸まで条里地割りが広がる。調査地周辺部の現況は、数件の民家以外は水田が広がり、西側の丘陵裾付近に沿って谷集落などの住宅地が続く(標高40m前後)。遺跡の東側には、府道八幡木津線、JR学研都市線、近畿日本鉄道京都線が平行して南北にのび、古代山陰・山陽道の推定ルートも付近を通るなど、今も変わらずこの地域は交通の要衝である。

柿添遺跡周辺の平地から臨む西側の丘陵上には鞍岡山古墳群、城山古墳群があり、さらに城山遺跡などの中世城郭が営まれる。遺跡北側約600mには里廃寺、さらに北に下粕廃寺と古代寺院があり^(注3)、南側には古墳時代前期・飛鳥時代・中世(12世紀中葉～13世紀前半)の集落などが確認された北稲遺跡がある^(注4)。



第55図 調査地位置図(1/100,000)



第56図 調査地周辺遺跡分布図(1/20,000)

- | | |
|----------------|------------|
| 1. 柿添遺跡 | 2. 北稲遺跡 |
| 3. 城山(稲屋妻城跡)遺跡 | 4. 片山遺跡 |
| 5. 里遺跡 | 6. 里庵寺遺跡 |
| 8. 下馬遺跡 | 9. 大福寺遺跡 |
| 11. 鞍岡神社遺跡 | 12. 鞍岡山遺跡 |
| 14. 拝殿遺跡 | 15. 下狗庵寺 |
| 17. 城山古墳群 | 18. 国名平古墳群 |
| 20. 中垣内遺跡 | 21. 石ヶ町遺跡 |
| | 7. 西垣内遺跡 |
| | 10. 長芝遺跡 |
| | 13. 鞍岡山古墳群 |
| | 16. 石塚古墳群 |
| | 19. 北尻遺跡 |

3. 調査概要

(1) 基本層序(第57図)

今回の調査地内の埋土は、基本的に①現在の耕作土、②床土・近世包含層(旧耕作土)、③・⑮中世包含層(旧耕作土)、④・⑯古墳時代包含層、⑤地山の順に堆積していた。

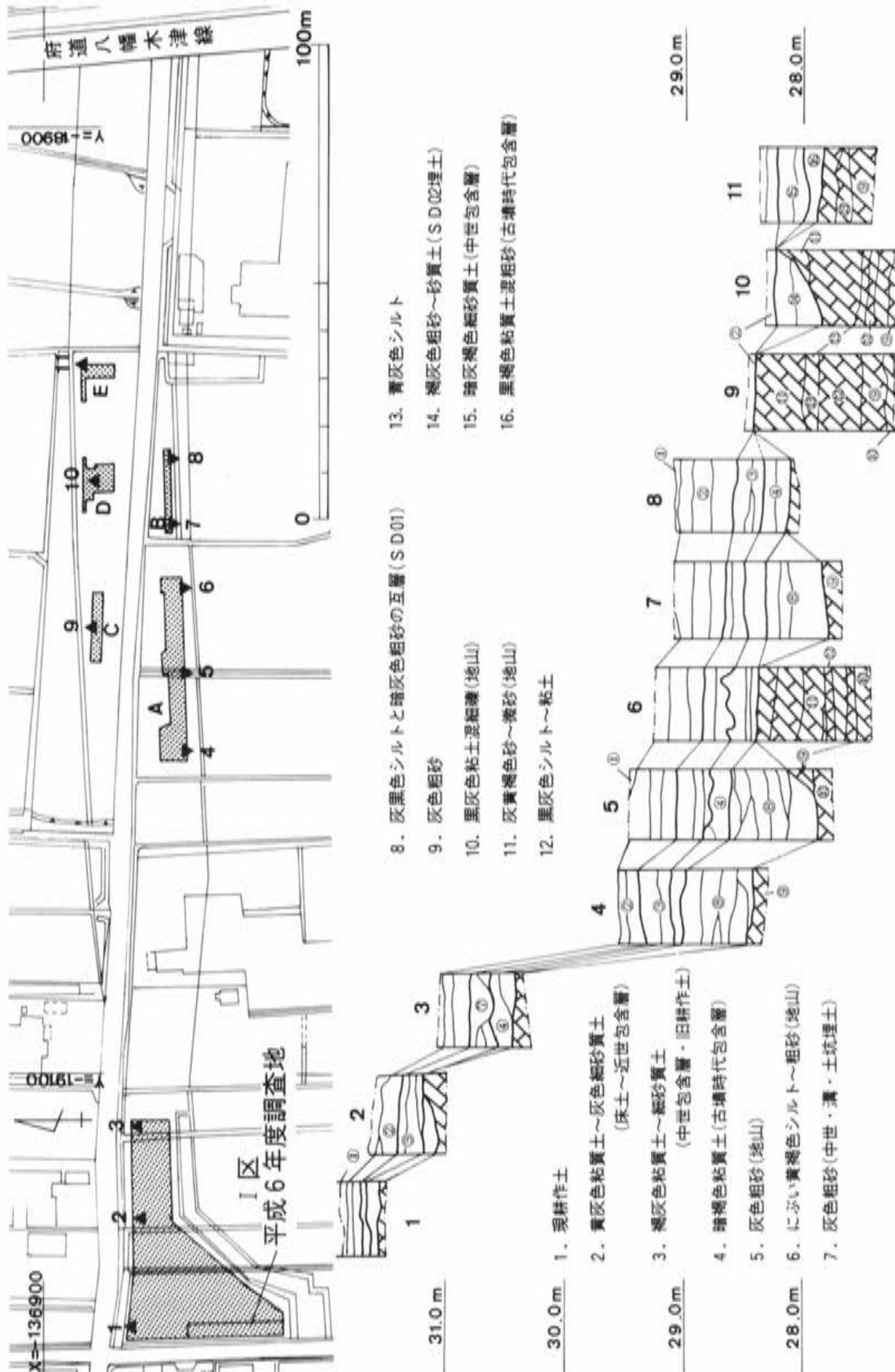
現在の耕作土は、工事の都合上調査前にほとんど除去されていた。②は、鉄分の沈着が著しく、黄灰色～灰色を呈し、粘質土ないし細砂質土で、厚さ0.1～0.4mで調査地全域で確認した。特に、A・Bトレンチで厚く堆積していた。磁器・陶器片などを包含する。③は、I区・A・Bトレンチで確認した褐灰色粘質～細砂質土で、瓦器・青磁・白磁・瓦質播り鉢・羽釜・奈良時代須恵器片などを含む。層の厚さは、I区西端では約0.05mと薄く、東に下がるほど厚くなり、I区東端や、A・Bトレンチでは約0.2mほどになる。⑮は、D・Eトレンチで確認した暗灰褐色の砂

質土で、東に下がるほど厚くなり、約0.2mになる。④は、I区・A・Bトレンチで確認した暗褐色粘質土である。I区内では中世段階に水田耕作で削平され、各水田の西側ではほとんど残らなかったが、東側ではよく残っていた。遺物の出土は、I区内では土師器片を中心にかなり多いが、A・Bトレンチでは少ない。⑤の地山層は、I区内では鈍い黄褐色シルトの部分と灰色粗砂の部分がある。粗砂は、西壁北側から東壁にかけてうねりながら分布し、断ち割った部分で遺物は確認できなかった。さらに古い時期の自然河道があると考えている。

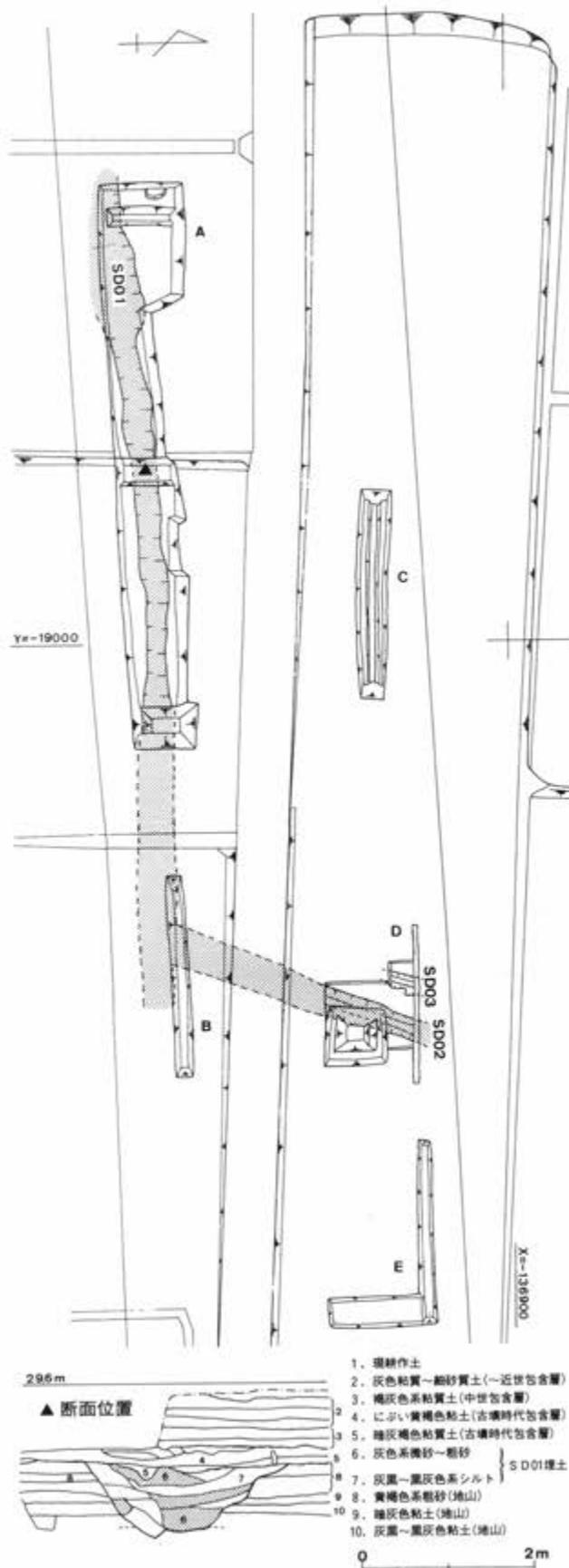
(2) 試掘調査(第58図、図版第38)

Aトレンチ 町道南側で3m×40mで設定した。近世包含層(暗黄灰色土・旧耕作土)・中世包含層(褐灰色土・旧耕作土)を全域で確認した。遺物は、瓦器片・土師器片が多く、奈良時代の須恵器片(甕・杯)も若干出土したが、いずれも小片である。さらに、下層の暗褐色土(古墳時代包含層)下面(G.L. - 1m前後)で、東西方向の溝(SD01)を検出した。SD01は、3か所で断ち割りを行い、幅約2m・深さ約1mの断面逆台形状の溝である。出土遺物は、土師器小片を少量確認した。溝の方向は、現存の条里地割りより若干北東方向へ振る(座標北に対しN-86°-E、以下方位の記述は座標北に対しての表示)。

Bトレンチ Aトレンチの東に1m×15mで設定した。トレンチ幅がないため、面的調査を行わず、土層断面観察を目的とした。土の堆積状況は、Aトレンチとほぼ同様で、地山上面はAト



第57図 トレンチ配置図・土層柱状図



第58図 A～Eトレンチ平面図・S D01断面図

レンチと同様に東に向かい徐々に下がる。S D01は、トレンチ西側で、二又に分岐する状況を断面で確認した。一方は東へのび、もう一方は道路北側のDトレンチのS D02へつながる可能性があり、北北東方向に向く(N-20°-E)。遺物の出土状況はAトレンチと同様である。

Cトレンチ 町道を挟んでAトレンチの北側に2m×15mで設定した。現況で道路北側は、Aトレンチ付近の標高より約1mほど低い。現代の床土層直下で地山と判断した灰黄褐色粗砂層が現われ、包含層・遺構は確認できなかった。G、L.-1.3mまで掘削を行い、粗砂層の下で黒灰色シルト～粘土の、有機層に似た水平バンド層(厚さ0.1～0.2m)を2層確認した。滞水と流水が交互堆積した状況と考える。同様の土層堆積は、それぞれレベルは異なるが、今回の試掘トレンチ全域で確認した。遺物は出土していない。

Dトレンチ Cトレンチの東側に5m×5mで設定した。現代の床土層直下で厚さ約0.1mの暗灰褐色砂質土の包含層を確認した。東へ行くにつれ厚みを増す傾向がある。包含層から土師器・須恵器・瓦器などの小片が出土した。中世・奈良・古墳時代の遺物が混在する。地山上面で南北方向の溝2条を確認した。東側のS D02は、幅約1.2m・深さ約0.5m、断面「U」字形で、遺物は土師器片が若干出土した。西側のS D03は、深さ約0.1m・幅約1m、浅い窪地状である。

Eトレンチ 今回の調査では北東端にあたり、Dトレンチの東約20mに2m×7mで設定した。Dトレンチで確認した

包含層は、厚さを増して2層に分層でき、上層から布目瓦が出土した。土師器などの遺物もDトレンチで多く出土しており、付近に遺構が分布する可能性が高い。

(3) I区調査概要

I区では、中世の水田跡を中心とした第1遺構面と、古墳時代の前期から中期にかけての集落跡を主とした第2遺構面の計2面を検出した。

①第1遺構面(第59・60図、図版第39-(1)・(2))

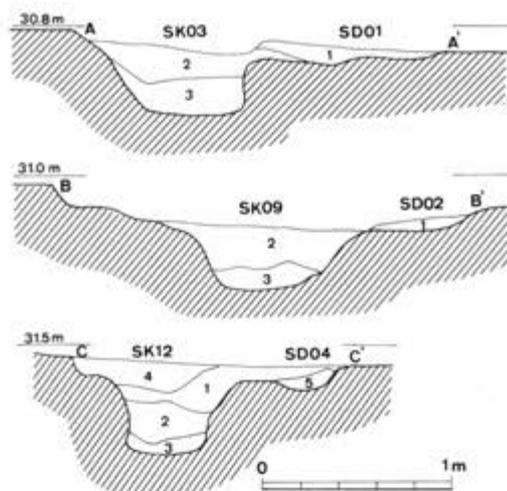
第1遺構面では南北方向の畦畔跡と、それに付随する溝及び土坑などを確認した。

畦畔の痕跡は計7条で、水田は計8枚確認した。そのうち、畦畔4以外は、各畔の両端とも調査区外に抜けている。畦畔の高さは、約0.1mあるが、隣り合う西の水田面と東の水田面は、比高差が約0.1~0.3mある。畦畔の方向は、 $N-4^{\circ}-W$ である。付近の現存条里地割りの南北軸は、ほぼ座標北を向き、検出した畦畔の方向は若干西に振っている。隣接地に残る畔の位置と畦畔3・5・7はほぼ重なり、近世以後に水田が大きくなっている。水田の東西幅は、西から2~5枚まで幅が狭いが、6・7枚目は、畔間9.5~10mを測りほぼ同規模である。仮に、畦畔2・4を傾斜調整用に設けた畔とすると、水田を畔間9.5m前後の単位で区画した可能性がある。

溝は、畦畔と同方向のものと、鋤溝と言われる小溝群を若干検出した。畦畔と同方向の溝には、その西側に近接して土坑が設けられる傾向がある。出土遺物は、瓦器片・土師器片が多い。



第59図 I区中世遺構配置図



第60図 I区土坑・溝断面図

- | | |
|---------------|-----------|
| 1. 褐色砂質土混じり粗砂 | |
| 2. 灰色粘土 | 3. 灰色砂礫 |
| 4. 灰色粗砂 | 5. 褐灰色砂質土 |

機能していたと考えている。

SD05・08・11は、土坑を伴わない断面弓形の浅い南北方向の溝である。埋土は、いずれも褐灰色砂質土である。遺物は、瓦器片などが少量出土している。

小溝群は、調査地北西端で南北・東西方向の幅約0.1m・深さ約0.1mの規模で数条検出したのみである。遺物は出土していない。

SK03・04・06・07・09・12は、よく似た規模と埋土の不整形土坑である。径は0.8～1m・深さ0.4～0.5mで、埋土は、底部分に灰色砂礫があり、上層に灰色粘土が穴を埋めるように堆積する。極端な湧水はないが、水が溜まりやすかった。遺物は瓦器が主である。

②第2遺構面(第61図、図版第39-(3))

古墳時代を主とする遺構面である。竪穴式住居跡1、掘立柱建物跡5(推定含む)、土坑5、自然流路跡?や溝数条その他を確認した。

SH23(第62図、図版第40) 調査地中央部北端で検出した、一辺約3.6mの方形に近い竪穴式住居跡である。住居跡の北半は調査地外に広がり、全体の規模は不明である。中央床面付近で、若干の炭片が広がっていたが、焼土などは確認できなかった。柱穴は2つ確認した。径は約0.2mと小さく、柱間は約2mである。周壁溝は三辺ともにあり、幅約0.2m・深さ約0.1mと浅い。床面は、南・西辺付近を幅約0.8m・高さ約0.1mほど、中央部より一段高く地山を削り残していた。

遺物は、須恵器杯身(14)、砥石(46)、土師器高杯片などが床面付近で出土している。須恵器の杯身片が小片のため遺構の時期を決定しがたいが、古墳時代中期末頃と考えている。

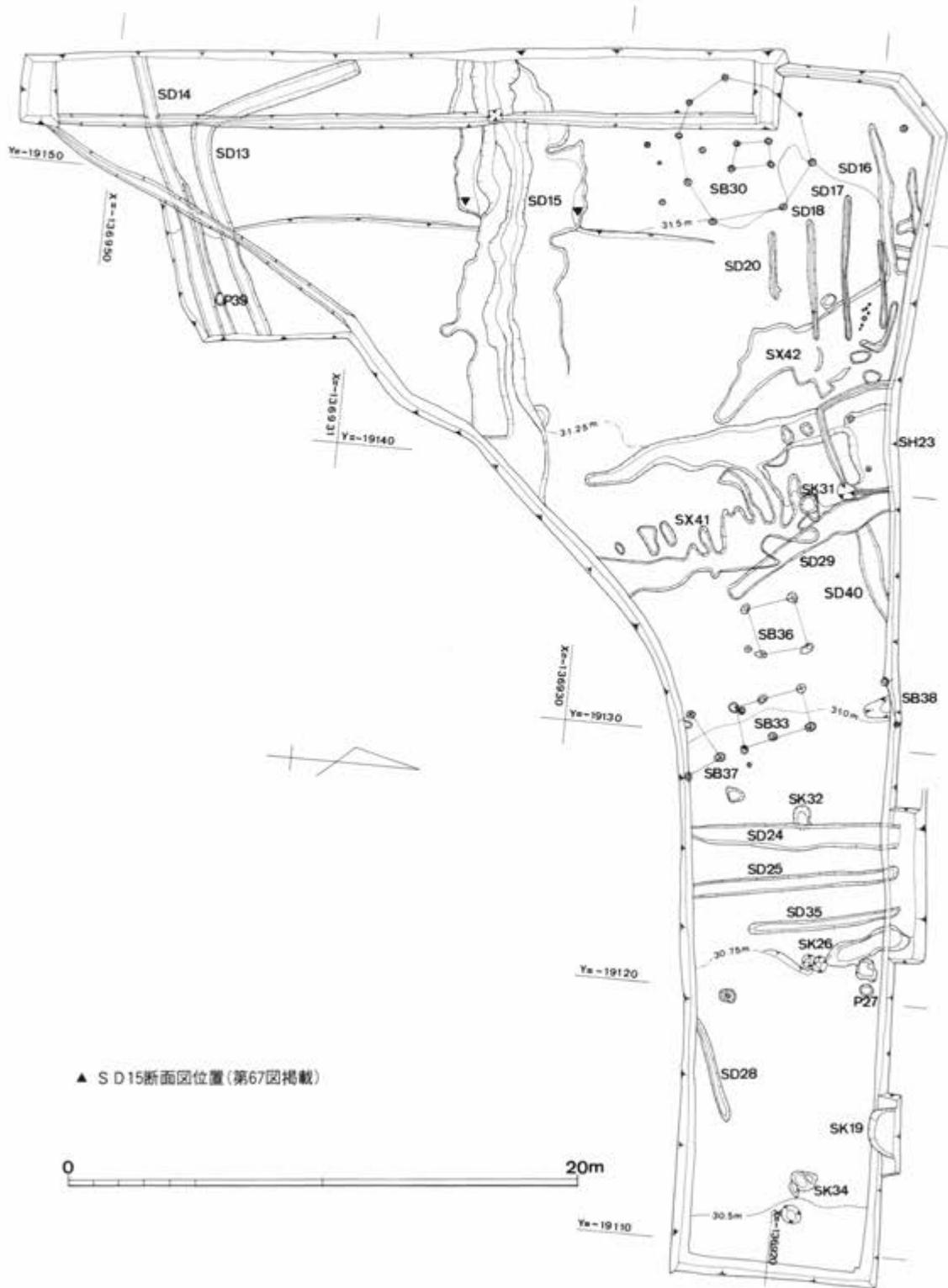
また、床面より上で琥珀製棗玉が2点(47・48)、住居跡外南東のSD29上面から同じく2点(49・50)出土した。各棗玉は、出土レベルにほとんど差がなく(31.23～31.31m)、1m以上の間隔で出土している。意図的に1列に置いた可能性もある。また、古墳時代の住居跡から琥珀製棗玉が出土した例は、管見によれば千葉県の一例しかなく、性格を考えるには今後の検討を要する。^(注5)

SD01は、畦畔7から約1.7m東にあって平行する、幅0.5～1.3m・検出長約8m・深さ約0.1mの浅い溝である。溝の南端は調査区外に続き、SK03付近から北にかけては幅が拡張し、SK07につながる。溝底の高さは南北でほとんど差がない。埋土は、褐灰色砂質土に粗砂が混じる。

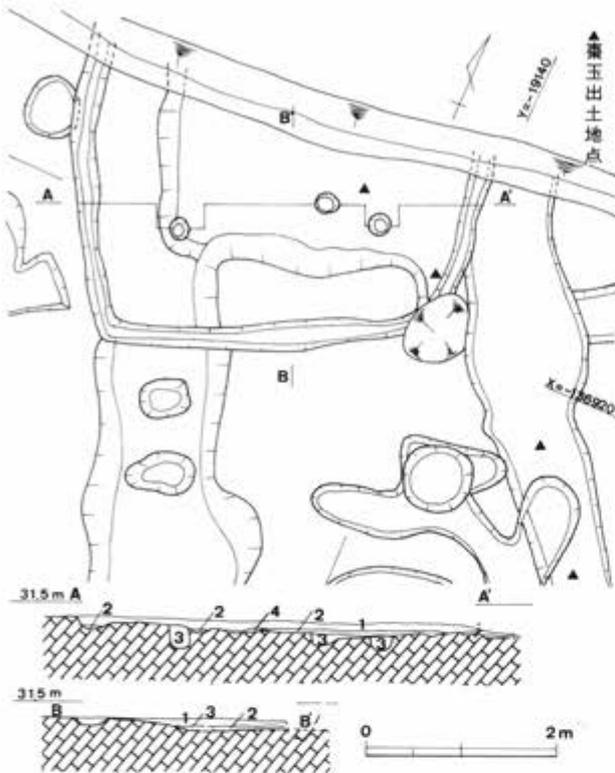
SD02も、SD01と同様の規模で埋土も同じである。溝の南端は調査区外に続き、SK09付近から北にかけては幅が拡がり、SK06につながる。溝底の高さは南北でほとんど差がない。

SD04は、検出長約6m・幅約1.2m・深さ約0.1mの規模で、北端は調査区外に続く。この溝も他の溝と土坑のように、SK12とほぼ同時に機

S B 30(第63図) 調査地西端で検出した主柱穴4か所と、その周囲をめぐる8~9か所の柱によって構成される建物になる可能性がある。弥生時代の円形竪穴式住居跡の可能性も考えたが、周辺部からは弥生時代の遺物は出土せず、ピットのいくつかから布留式の土師器小片が出土して



第61図 I区古墳時代遺構配置図



第62図 SH23実測図(1/80)

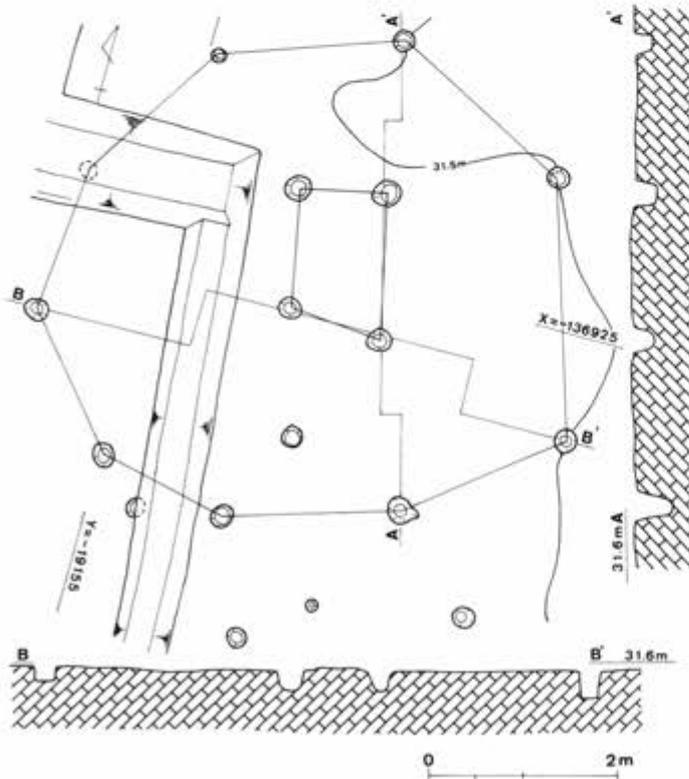
- 1. 暗茶褐色粘質土混じり粗砂
- 2. 黒灰色粘質土混じり粗砂
- 3. 暗灰色粘質土混じり細礫
- 4. 暗灰色粘質土混じり炭片

いるので、古墳時代の何らかの施設と推定した。各ピットは径約0.2mの円形のものが多く、西・北側のピットが比較的小さく浅い傾向がある。このことは、この付近がかなり削平されていることを示していると考えている。埋土は黒褐色粘質土である。

S B 33・36～38(第64図) 調査地中央東側で検出した小規模な掘立柱建物跡群である。各ピットの形状は不ぞろいで、隅丸方形・円形・不整形のものであるが、埋土は柱痕跡の部分が灰黒色粘質土、掘形部分が黒褐色粘質土と共通することから、ほぼ同時期の建物跡群と判断した。

S B 33は、東西1間(約1.6m)・南北2間(約2.7m)の掘立柱建物跡である。建物跡の主軸は座標に対して、 $N-24^{\circ}-W$ である。柱間は、南北方向の南側1間が約1.2mとやや狭い。ほとんどのピット内には柱痕跡が残り、いずれも径0.1m前後である。遺物は、建物跡南西端のピットに接する小ピット内から、布留期の土師器高杯脚部が出土している。小ピットは、埋土が建物跡のピットと同様なので、この建物関連のピットと判断している。

S B 36は、東西1間・南北1間の掘立柱建物跡である。柱間は、東辺・西辺とも約1.8mに対し、北辺約2.1m・南辺約1.8mと差があり、やや歪んでいる。建物跡の軸は、西辺で $N-18^{\circ}-W$ である。ほとんどのピット内には柱痕跡があり、いずれも径0.1m前後である。遺物は、



第63図 S B 30実測図(1/80)

ピット内から土師器片が若干出土した。建物跡の時期は、SB33と同じ頃と考えている。

SB37は、東西1間・南北1間?の掘立柱建物跡で、南側が調査地外で規模を確定できなかった。柱間は、北辺約2.1m・東辺1間約1.4m、建物跡の主軸は東辺でN-38°-Wである。遺物は出土しなかった。この建物跡は、SB33との位置や方位を考えると、前後関係は不明だが、建て替えられた可能性がある。

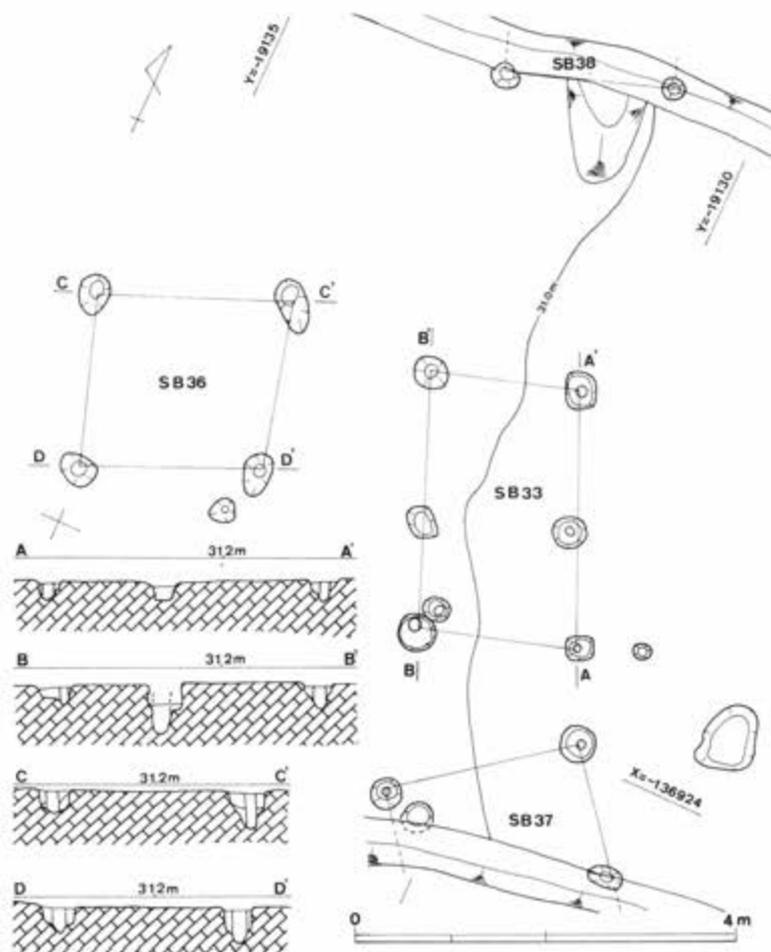
SB38は、調査地北端で検出したピット2個だけで、建物跡とするには根拠に乏しいが、埋土が他の建物跡と共通する点、集落が北側に広がる可能性が高いことから、建物

跡になると判断した。柱間は約1.8mで、遺物は出土しなかった。

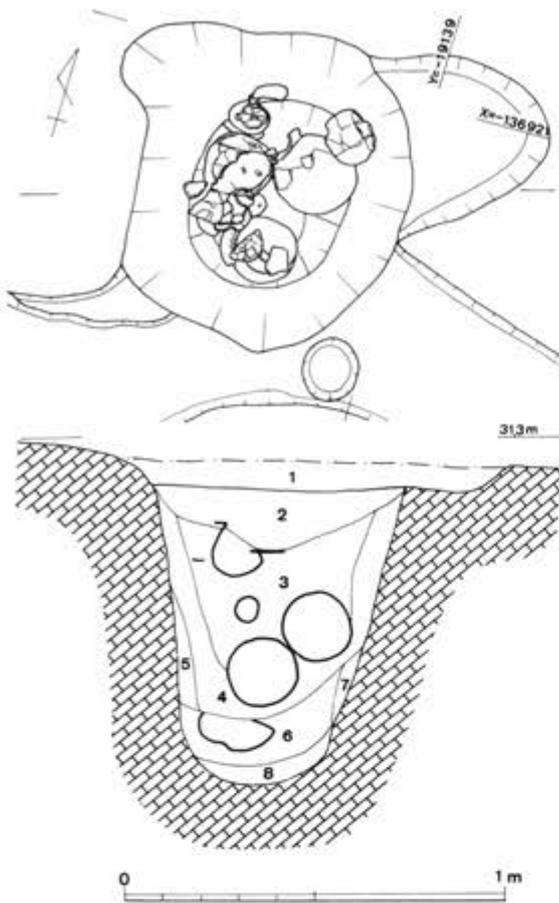
SK31(第65図、図版第41) SK31は、SH23の南東約1.5mにあり、径約0.8m・深さ約0.8mの大きさで、ほぼ垂直に掘られた平面円形に近い土坑である。埋土は、黒灰色粘質土がほとんどで、最下層の暗灰色粗砂には広葉樹の葉が若干混じっていた。この土坑は、地山の湧水層に達しており、底に粗砂層の堆積があることから、井戸と考えている。廃棄時に、使用可能な土器を意識的に埋めたと考えている。遺物は、すべて土師器類で、小型丸底壺(19・22)、甕(30・31)、壺(34・35)が完形または完形に近い状況で出土し、この他に脚部を欠いた高杯(16)が最上層で出土した。甕・壺類は、投げ込まれたのではなく、ていねいに積み重ねられたようで、互いの重みで割れた部分が目立つ程度であった。古墳時代前期末~中期初頭頃の良好な資料と考えている。

SK19(第66図、図版第41) SK19は、調査地北西端で検出した土坑で、幅約2m・深さ約0.2mの規模を持つ。北側部分は、調査地外になるため不明な部分もあるが、隅丸方形になると考えている。埋土は、黒灰色粘質土に炭片が含まれていた。土坑底部はほぼ平坦であった。まとめて出土した土師器は、高杯(15・17)、小型丸底壺(18・21)、甕(23~27・29)、壺(33)などである。ほとんどが破片になっており、廃棄されたと考えている。

SK26(第66図、図版第42) SK26は、長さ約3.3m・幅約1mの細長い土坑である。この部



第64図 SB33・36~38実測図(1/80)



第65図 S K31実測図(1/20)

- | | |
|-----------|------------------|
| 1. 褐灰色砂質土 | 2. 灰黒色粘質土混じり粗砂炭片 |
| 3. 黒灰色粘質土 | 4. 暗灰黒色粘質粗砂 |
| 5. 暗灰色粗砂 | 6. 黒灰色粘質土粗砂 |
| 7. 暗灰色礫砂 | 8. 暗灰色粗砂混じり植物遺体 |

m・深さ約0.3mの不整形土坑である。土坑底部も凹凸が目立ち、遺構の輪郭も不明瞭で、その用途は不明である。土師器片が少量出土した。

S D13・14(第67図、図版第43) S D13は、調査地西側南端で検出した「L」字に曲がる、検出長約15.5m・幅約0.6m・深さ約0.1mの溝である。埋土は、暗灰褐色粘質土に粗砂が若干混じる。溝は、北北西から南南東へ直進してきた後、S D14と平行してN-64°-E方向に向かう。遺物の出土量は、S D14に比べて極端に少なく、土師器高杯片が若干出土したにすぎない。

S D14は、調査地西側南端で検出の東西方向の溝で、検出長約11.5m・幅約0.4~1m・深さ約0.2mの溝である。断面は、逆台形で、東半分では北辺が二段に掘られる。埋土は、暗灰褐色粘質土に粗砂が若干混じる。遺物の出土量は多く、土師器(36~44)ばかりでコンテナ4箱を数える。遺物は、溝内からまんべんなく出土したが、完形に復原できたものはほとんどない。

P 39は、幅約0.5m、検出した深さ約0.1mで、褐灰色粘質土に粗砂が混じる埋土の楕円形ピットである。溝の検出レベルで面をそろえたため、ピットの掘り込み面はさらに0.1m上か。S D14が埋まった後に掘られており、口頸部を欠いた須恵器甕(13)が出土した。この甕は、横に寝た状況で出土し、性格は不明であるが意図的に埋められた可能性がある(図版第43-(3)・(4)参照)。

分は、後世の水田耕作による削平でS K26の西側と東側とで比高差約0.2mの段差ができており、この土坑の東肩はさらに高かったと考える。床面は、南半部が一段低いが、ほぼ平坦である。埋土は、黒灰色粘質土に親指大以下の炭片が散見する。遺物は、布留期の土師器甕片を主として、コンテナ箱約1/5ほど出土したが、図化できるものはなかった。

P 27は、直径約0.6m・深さ約0.15mのやや楕円に近い浅いピットで、埋土は暗灰色粘質土に炭片が若干混入する。布留期の土師器片が数点出土したが、小片で図化しなかった。

S K32(第66図、図版第42) S K32は、長径約0.9m・短径約0.6m・深さ約0.3mの楕円形土坑である。埋土は、ほとんどが黒灰色粘質土に粗砂が混じり、この層内から土師器甕(28・32)・小型丸底壺(20)・砥石などが出土した。S K32は、S D23に切られるが、溝とともに機能して、水を溜めて作業に使っていた可能性も考えている。

S K34は、I区東端で検出した、幅約1.2

S D 15(第67図、図版第42)
 S D 15は、調査地中央を東西に流れる検出長約18m・幅約3.7m・深さ約0.4mの溝である。溝中央部が一段と深く、南北両岸はなだらかな傾斜であり、自然流路に近い。両岸付近の浅い部分には、人の足跡状の凹みが多数観察できた。中央部には粗砂層が堆積しており、遺物は主にこの層から出土した。布留期の土師器が主で、須恵器は出土していない。土師器も小片が多く、図化できなかった。このほか、砥石(45)が出土している。

S D 24・25・35(第67図、図版第42) S D 24は、調査地東側で検出した南北方向(N-5°-W)の溝で、検出

長約9m・幅約0.9m・深さ約0.15mの溝である。南端は、調査区外へのびる。埋土は、黒褐色粘質土に粗砂が混じっており、S D 25とほぼ同じ埋土である。S K 32を切るが、同時並存もあると考えている。遺物は出土していない。

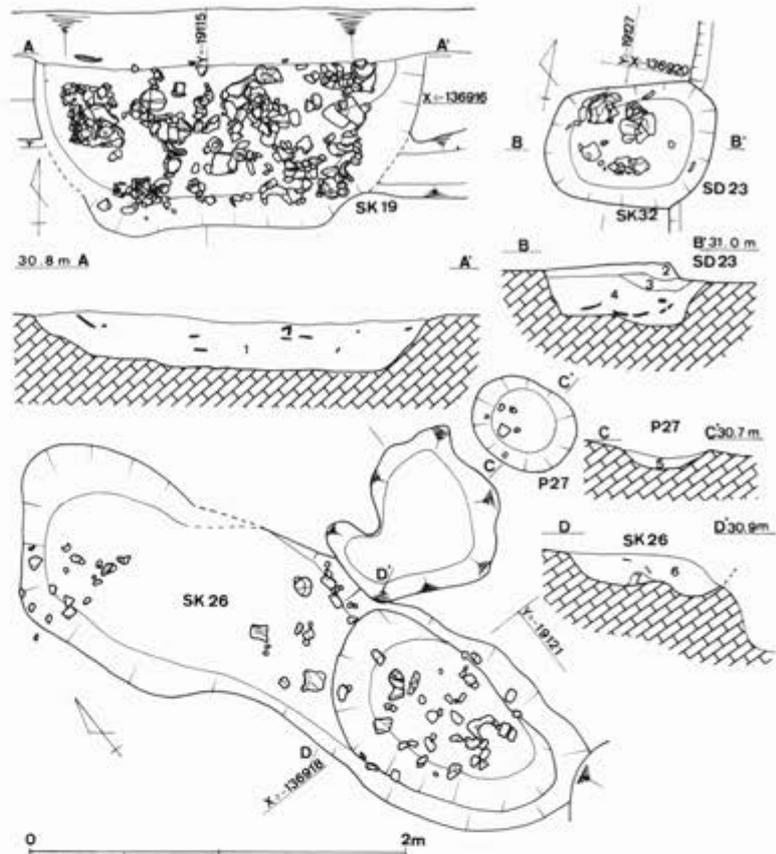
S D 25は、S D 24の東側で検出した南北方向(N-10°-W)の溝で、検出長約9m・幅約0.5m・深さ約0.1mの溝である。南端は、調査区外へのびる。S D 24に比べ、遺物の出土量は多く、コンテナ2箱の布留期土師器片が出土した。この付近は、中世の水田耕作によってかなり削平を受けていたようで、遺物の残りが悪かった。また、土師器は軟化が著しく、図化はできなかった。

S D 24・25は、検出状況からS D 13・14と同じ性格の溝と考えている。

S D 35は、S D 25の東側で検出した南北方向(N-10°-W)の溝で、検出長約6m・幅約0.3m・深さ約0.05mの溝である。遺物は出土しなかった。

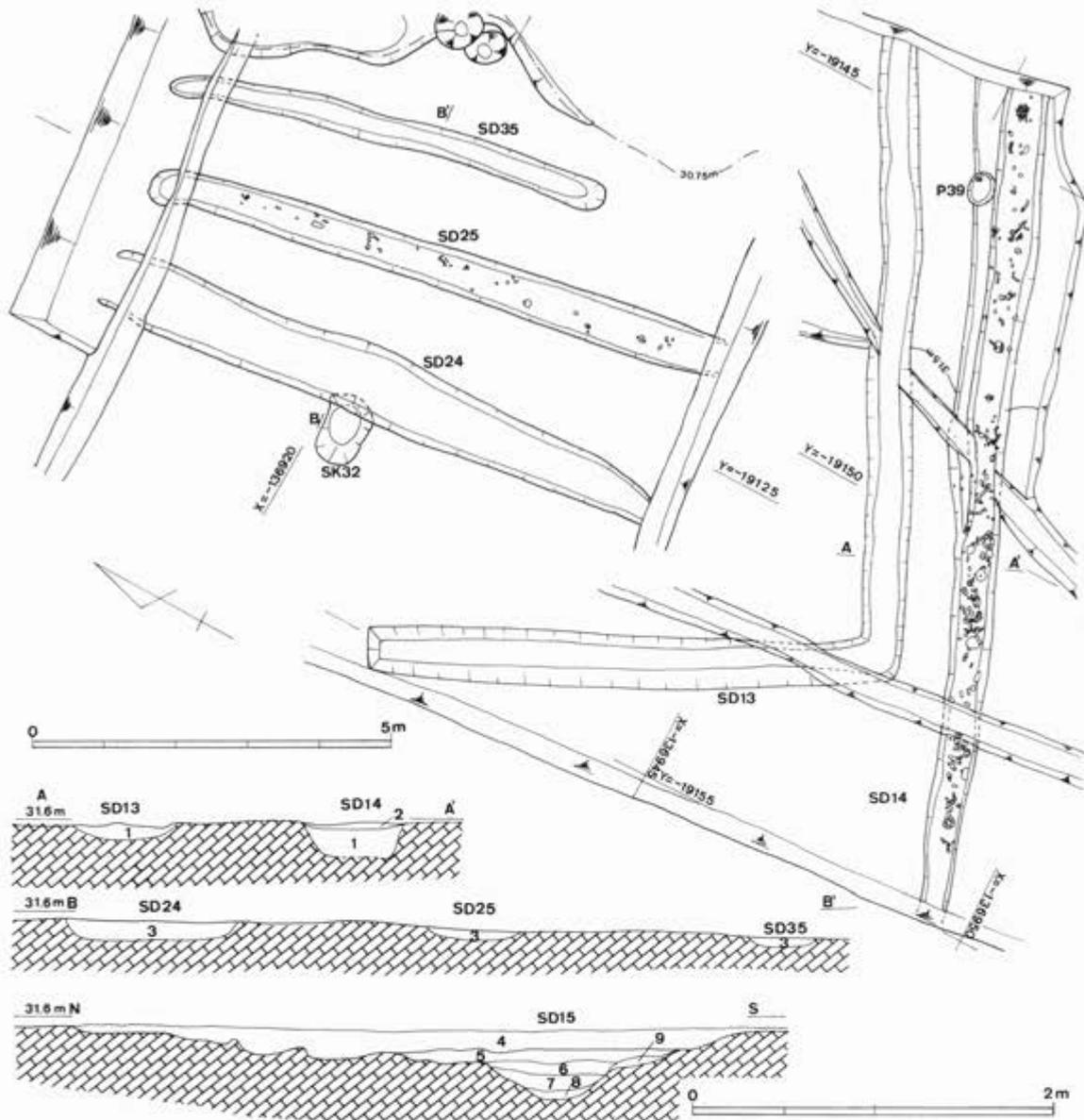
S D 28は、調査地東側南端で検出した東西方向(N-70°-E)の溝で、検出長約4.5m・幅約0.3m・深さ約0.1mの溝である。西端は、調査区外へのびる。遺物は、土師器片が若干出土した。

S D 29・40は、調査地中央部で検出した南北(N-35°-W)・東西(N-65°-E)方向の溝で、「T」字形につながる溝である。北端と東端は、調査区外に続く。検出長約11m・幅0.5~0.9m・深さ約0.15mの溝である。埋土は、上面にS X 41の埋土である黄褐色砂質土が部分的に覆っ



第66図 SK 19・26・32、P 27実測図(1/40)

- | | |
|---------------------|----------------|
| 1. 黒灰色粘質土混じり炭 | 2. 黒褐色粘質土混じり粗砂 |
| 3. 黒灰色粗砂 | 4. 黒灰色粘質土混じり粗砂 |
| 5. 暗灰色粘質土混じり炭 | 6. 黒灰色粘質土混じり炭 |
| 7. にぶい黄灰色砂質シルト・ブロック | |



第67図 SD13～15・23・24・35実測図(1/100)

- | | | |
|----------------|------------|-----------|
| 1. 灰褐色粘質土混じり粗砂 | 2. 黒褐色粘質土 | 3. 黒褐色粘質土 |
| 4. 暗褐色粘質土混じり粗砂 | 5. 暗褐色砂質土 | 6. 灰黒色粗砂 |
| 7. 灰黒色粗砂 | 8. 暗黄褐色砂質土 | 9. 暗褐色砂質土 |

ており、下に黒灰色粘質土がある。遺物は出土していない。

SD16～18・20は、調査地北西部分で検出した東西方向の溝(N-82°-E)で、検出長2.5～5.5m・幅約0.1m・深さ約0.1mを測る。SX42を切っている鋤溝状の溝群である。遺物は、土師器片が若干出土した。

SX41は、竪穴式住居跡の南側で検出した不定形な溝群である。埋土は、褐色砂質土で、深さは0.1m程度で浅い。南端部で東西方向の小溝が住居跡にかけて連続する傾向がある。SD15の影響による洪水砂とも考えられるが、この付近は土が硬化しており、集落内の道のような施設の可能性も考えておきたい。遺物は、土師器片が若干出土している。

SX42は、竪穴式住居跡の西側で検出した不定形な凹凸地形が集中する部分である。埋土は暗褐色粘質土で、深さは0.1～0.2m程度で西端は段状の地形になる。また、南端はSX41に切られ

る。人の足跡状の窪みが多数あり、小道のようなものか。遺物は、土師器片が若干出土した。

4. 出土遺物(第68～70図、図版第44～46)

出土遺物のうち、中世を主とする遺物は、小片が多く、図上復原がほとんどである。時期は12～14世紀頃のもののが大半を占める。

1は、青磁の椀で、外面に鎬蓮弁文を施している。釉薬ののりは良好で、特に外面は蓮弁中央の稜線が見えないほどかかっている。13世紀頃のものと考えている。2は、白磁の椀で、口縁端部をやや平坦に作り、口縁部外面付近に浅い沈線がまわる。12世紀頃のものと考えている。

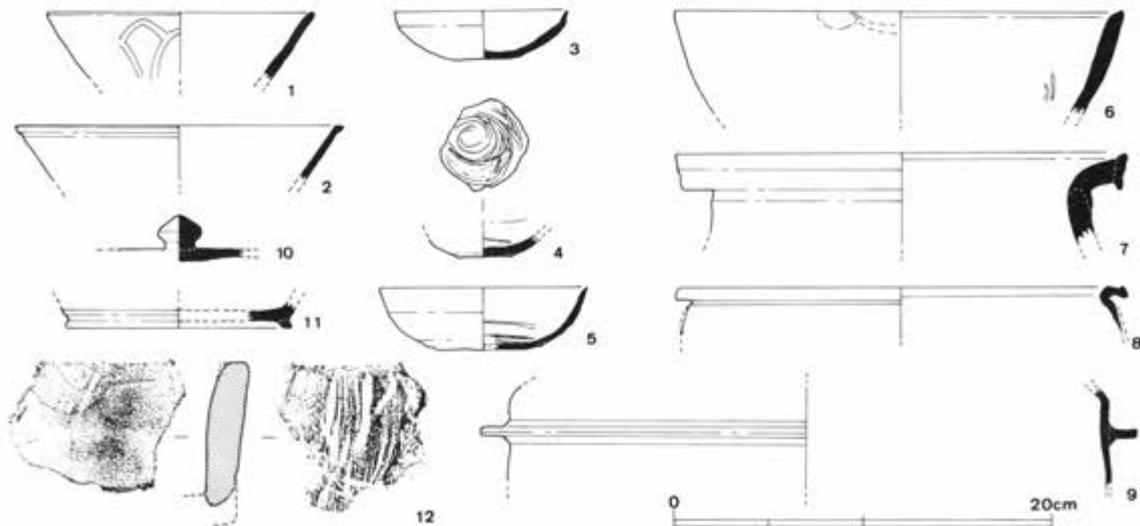
3は、瓦器皿である。4・5は、瓦器椀である。ともに高台は著しく退化し、底部より上に貼り付けている。内面に同心円状の暗文が観察できる。6は、瓦質の播り鉢片である。片口付近の破片で、端部外面に指頭痕がある。7は、常滑焼壺の口縁片と考えている。暗灰色を呈し、硬質に焼けている。13世紀後半頃であろう。8は、土師器甕片で、淡茶灰色を呈し、表面の剝離が著しい。9は、土師質羽釜片である。淡茶灰色を呈し、軟質である。

10は、自然釉のかかった須恵器壺蓋である。11は、須恵器杯Bの底部片で、淡灰色に堅く焼けている。12は、黒灰色を呈する丸瓦の玉縁部分である。端部は面とりを行い、外面はヘラ状工具による横ナデ、内面には布目痕が残る。

13は、淡灰色の須恵器甕である。胴部の穿孔部は粘土を貼り、注口状に作る。底部外面は粗い削りを行う。14は、SH23から出土した淡青灰色の杯身片である。胎土は密、焼成は良好である。

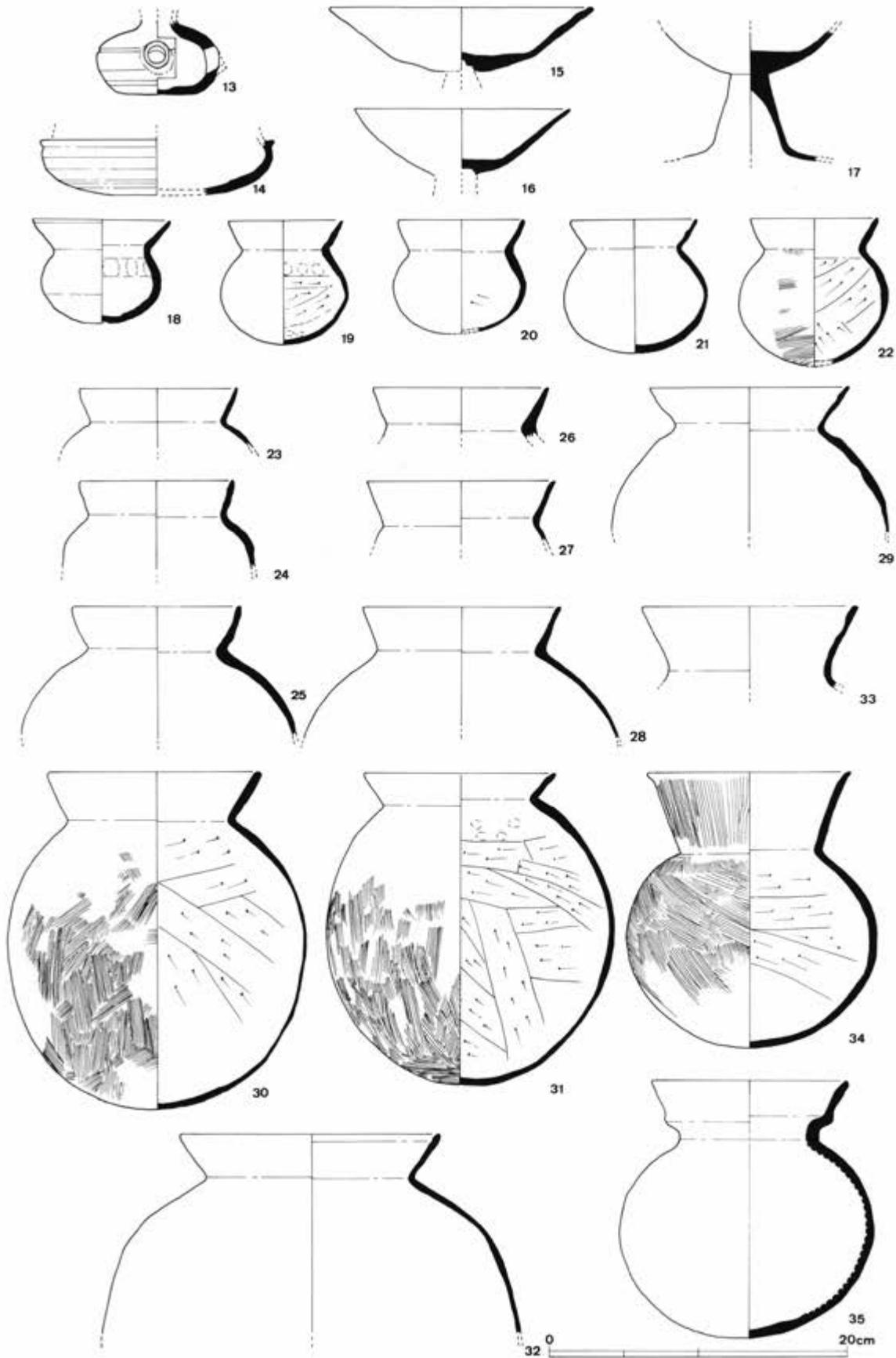
15～17は、土師器高杯である。色調は、15・16が淡黄褐色、17が淡黒灰色で、器壁の残りは悪い。17の脚部内面には、粘土の絞り状のしわが残る。18～22は、小型丸底壺である。ほとんどの個体が、外面は剝離しているが、内面は18では指押さえが目立ち、19以降はケズリ調整が主になる。

23～32は、土師器の甕で、30・31以外は小片である。色調は、淡黄褐色のものが多く、器壁の



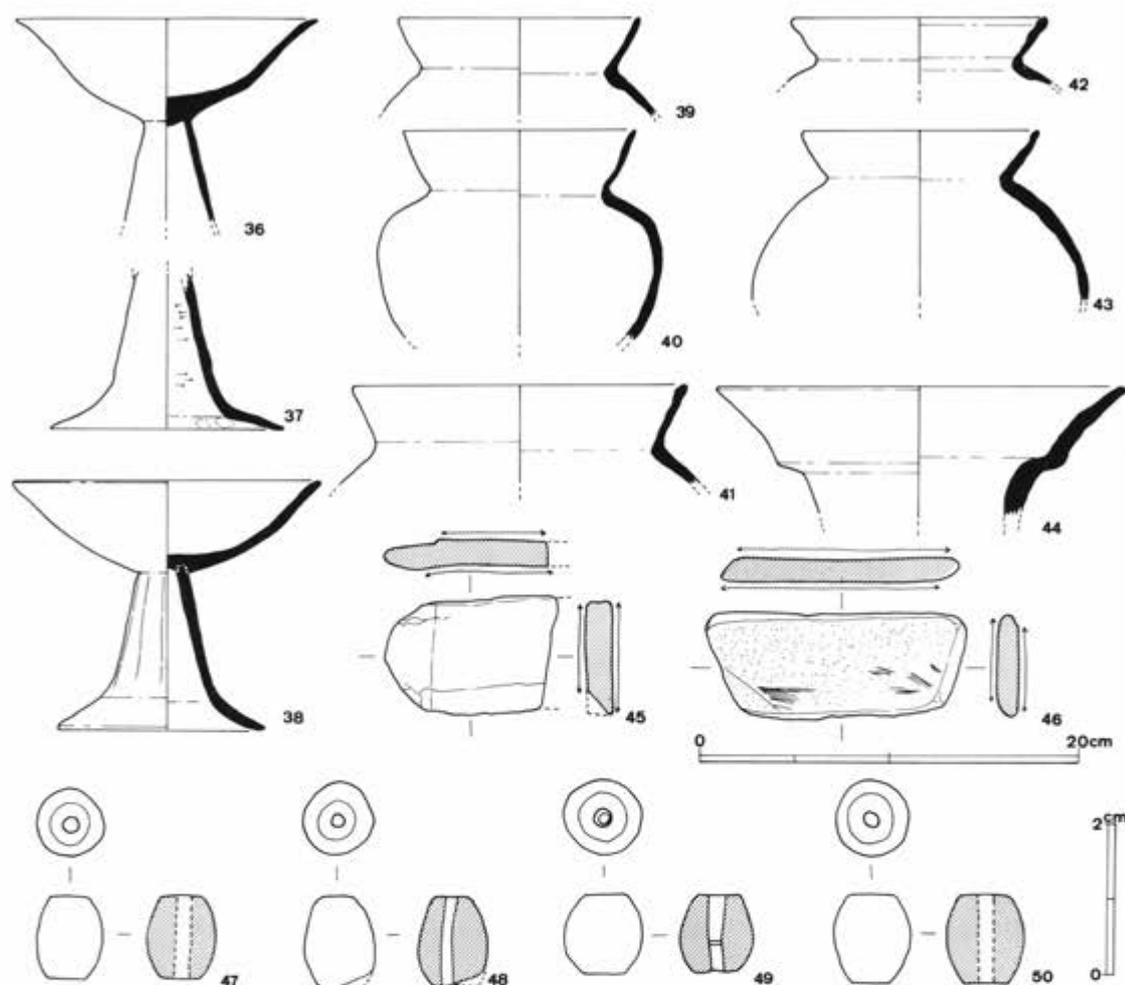
第68図 出土遺物実測図(1)

3. I区S D01(中世溝)出土 7. Eトレンチ出土 他は、I区包含層出土



第69図 出土遺物実測図(2)

13. P39出土 14. SH23出土 15・17・18・21・23~27・29・33. SK19出土
 16・19・22・30・31・34・35. SK31出土 20・28・32. SK32出土



第70図 出土遺物実測図(3)

36~44. S D14出土 45. S D15出土 46~48. S H23出土 49・50. S D29上面出土

残りも悪い。30は、胎土に4mm以下の砂粒を多く含み、やや軟質の焼成である。外面には煤がかなり付着している。31は、胎土に5mm以下の砂粒を含み、やや硬質の焼成である。外面に一部煤が付着する。33~35は、土師器の壺である。34は、外面にハケ目を多用し、口縁部内外面と、内面底部にナデ調整を行っている。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、やや硬質の焼成である。色調は淡黄褐色であるが、外面にはかなり煤が付着している。35は、胎土に3mm以下の砂粒がかなり多く含まれ、他の土器と胎土は異なる。焼成はやや硬質であるが、表面の剝離が著しく、細かい観察は困難である。胴部内面はヘラケズリを行い、外面はハケメ調整のようである。外面には一部煤が付着している。

36~44は、S D14から出土した土師器である。36~38の高杯は、淡黄褐色(36・37)・淡褐色(38)を呈し、胎土には3mm程度の砂粒を含み、焼成はやや軟質である。39~43は、甕の口縁部を主とした破片である。いずれも器壁の軟化・剝離が著しく、表面調整は観察が困難である。

44は、二重口縁壺の口縁部分である。淡灰白色を呈し、焼成はやや軟質、表面の調整は磨耗のため不明である。

45は、チャート製の砥石と考えている石片である。端部を片側欠損しているが、重量は144.6gあり、表面灰黄色である。両面が端面に比べ平滑になっており、研ぎ面として使っている可能性がある。46は、多孔質・暗灰色火成岩製砥石で、両面を使用している。重量は179.4gである。

47～50は、琥珀製棗玉である。長さは1.1～1.2cm、最大径は0.9～1.0cm、両側から穿孔している。色調は茶褐色で、いずれも検出時に一部欠損した。現重量は0.3g(47)、0.4g(48)、0.4g(49)、0.6g(50)で、欠損部を加えればもう若干重くなる。

5. ま と め

第1遺構面で検出した水田跡では、推定里境にあたる現町道付近に、野井戸状土坑が設けられていた。町道沿いには、用水が流れており、この用水と関連して溝と土坑は、ともに灌漑用の施設であったと考えている。水田跡は、現在の条里地割りに畦の方向がほぼ重なるので、遅くとも13～14世紀頃には、現在に近い地割りになっていたと考えている。

古墳時代前期末～中期にかけての集落の一部が確認できた。集落は、北へ広がっていると考えている。また、竪穴式住居跡内から、琥珀製棗玉が出土した例は稀で、祭祀関連や工房の可能性も考えられる。今後の検討課題としたい。

古墳時代の遺構で興味深いのは、SD13・14、SD24・25・35の性格である。ほぼ同時並存していた同規模の溝で構成されている溝群のうち、片方のみ遺物が集中する点は、機能が異なっていたことを示していると考えている。調査地東側に廃棄土坑と類推している一群の遺構があり、建物が溝群の西側・北側にあることをあわせると、集落の内と外を溝群で意識的に区画しており、集落の外側へゴミを捨てていたのであろう。

次年度も付近の調査予定があり、さらに柿添遺跡の内容が明らかになることを期待したい。

(有井広幸)

注1 a 伊賀高弘「北尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

b 伊賀高弘「北稲・柿添遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注2 調査に参加していただいた方々は以下の通りである(順不同、敬称略)。

木本昌英・五百磐和代・田島 肇・西根正弘・井ノ口雄三・五百磐頭一・岸本貢一・林 恵子・芳谷 興子・有馬三喜子・古川桂子

注3 平良泰久『精華町史』 考古編 1989

注4 注1のb文献参照

注5 奈良県橿原市曾我遺跡で、玉作り関連遺構群が確認され、琥珀製の玉類も確認されている。

関川尚功他「橿原市曾我遺跡発掘調査概要」I(『奈良県遺跡調査概報』1982年度版 奈良県立橿原考古学研究所) 1983、同「橿原市曾我遺跡発掘調査概要」II(『奈良県遺跡調査概報』1983年度版 奈良県立橿原考古学研究所) 1984

京都府内の出土例は、小池 寛によってすでにまとめられている(『南山城地域の後期古墳の一様相—城陽市・長池古墳を中心として—』(『京都府埋蔵文化財情報』第40号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991)。南山城では、城陽市長池古墳から琥珀製棗玉が16点以上出土し、傑出している。古墳時代の住居跡から出土した例は、千葉県芝山町下吹入遺跡群内の東台遺跡の3号住居跡(和泉期末葉)で琥珀製棗玉が1点出土している(『山武考古学研究所年報』No. 5 昭和61年度)。

圖 版

図版第1 石ヶ原古墳群



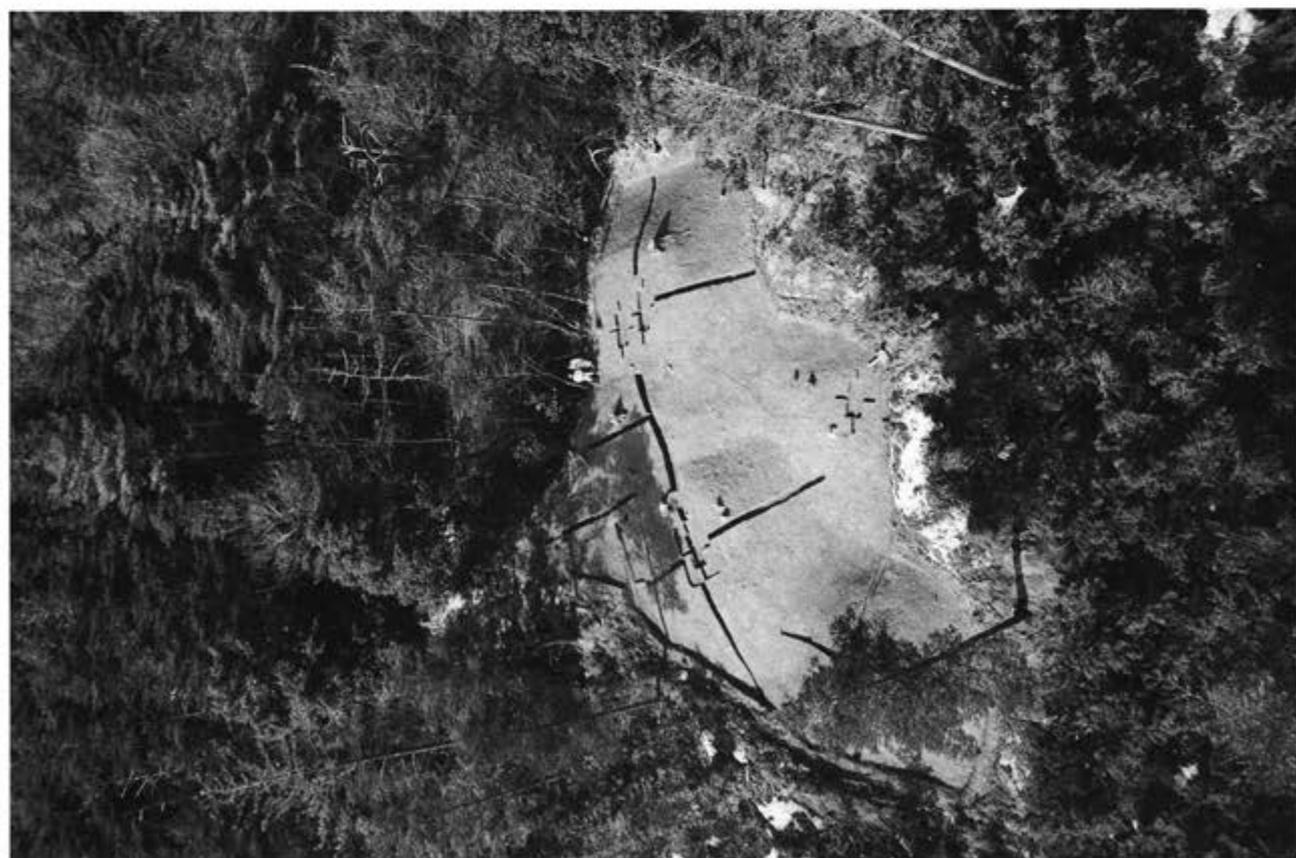
(1) 調査地遠景 (北東から)



(2) 調査前状況 (5・7・9号墳) (南から)



(2) 1号墳全景（北西から）



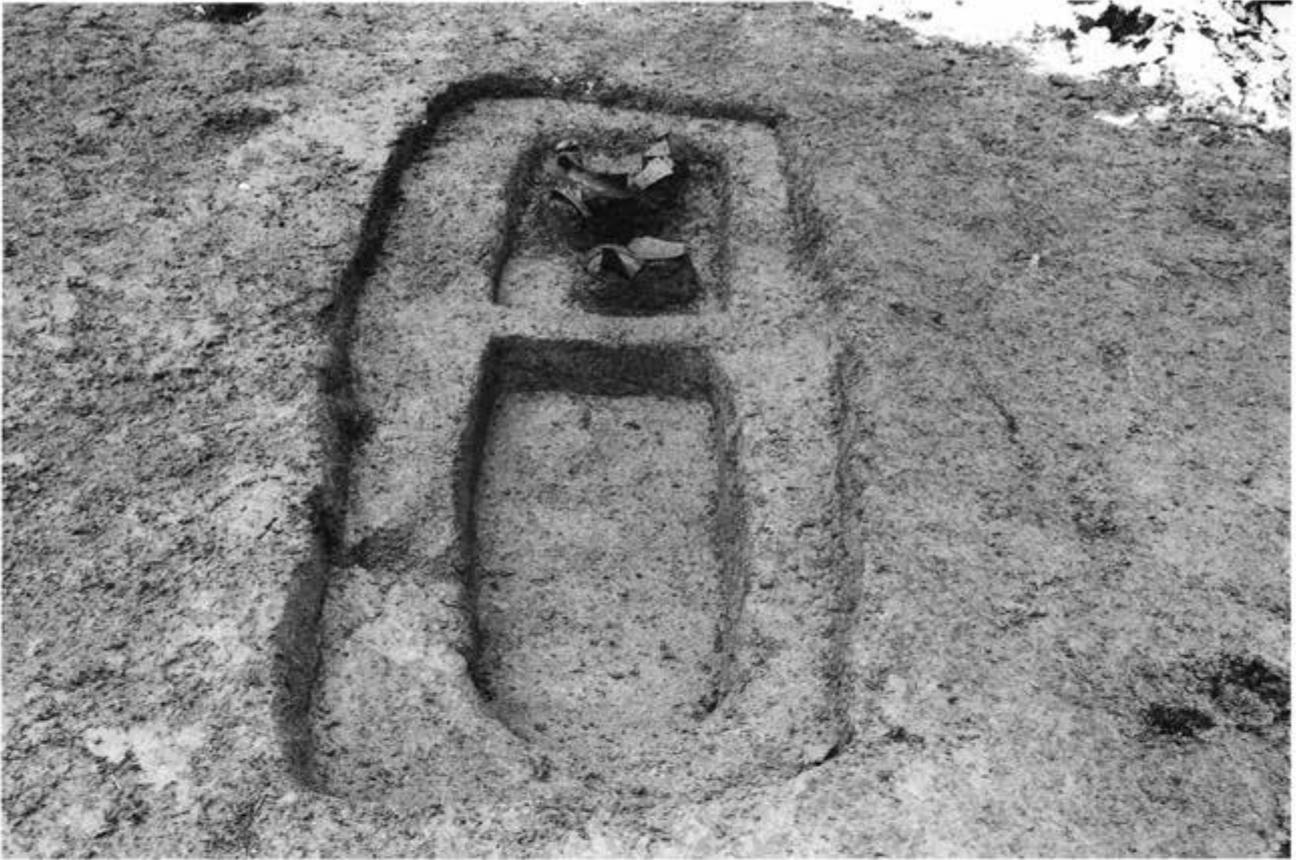
(1) 3～7・9号墳全景（東から）



(1) 1号墳調査風景（西から）



(2) 調査風景（手前：5号墳、奥：6号墳）（北から）



(1) 1号墳主体部遺物出土状況（北から）



(2) 5号墳主体部検出状況（北から）



(1) 9号墳第1主体部遺物出土状況（南から）



(2) 9号墳第2主体部遺物出土状況（北から）



1



5



2



6



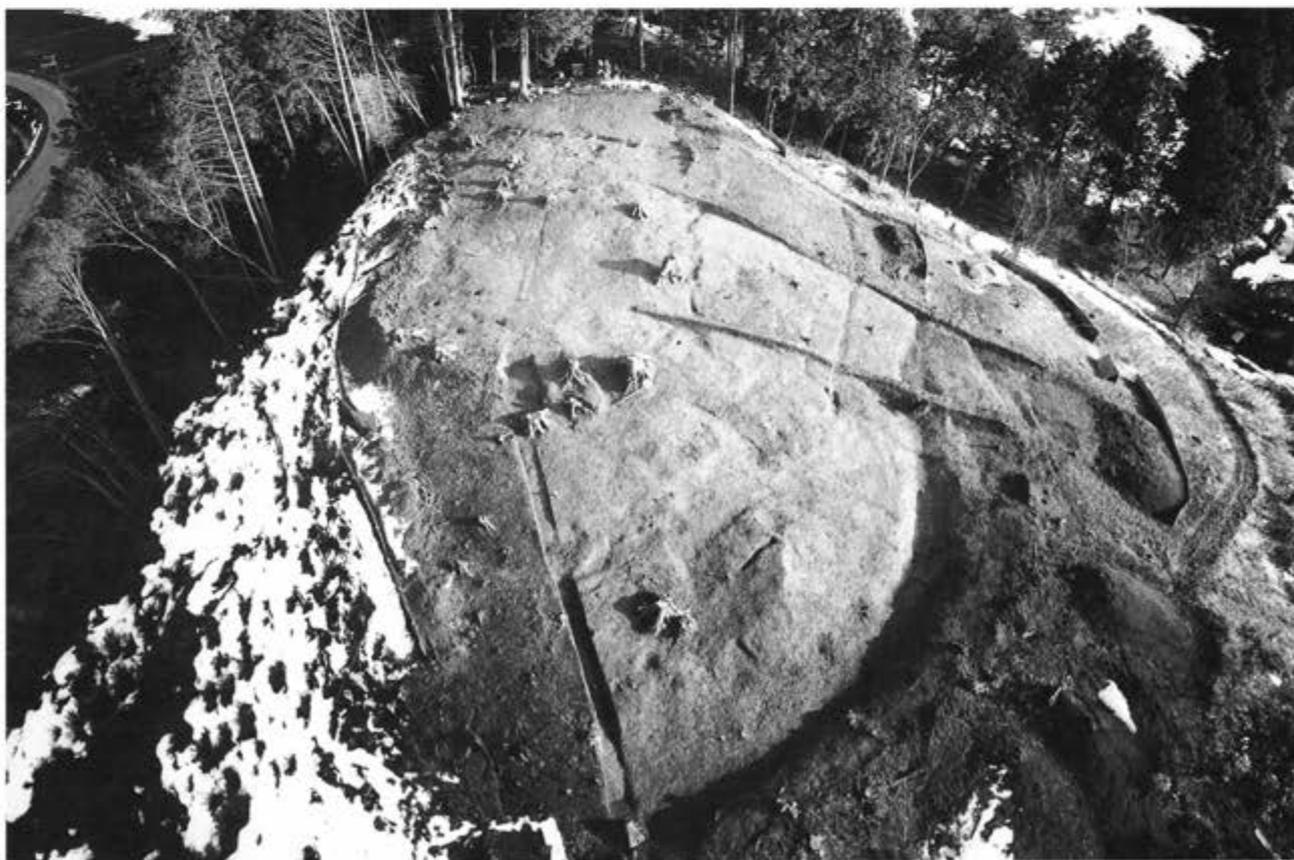
3



7



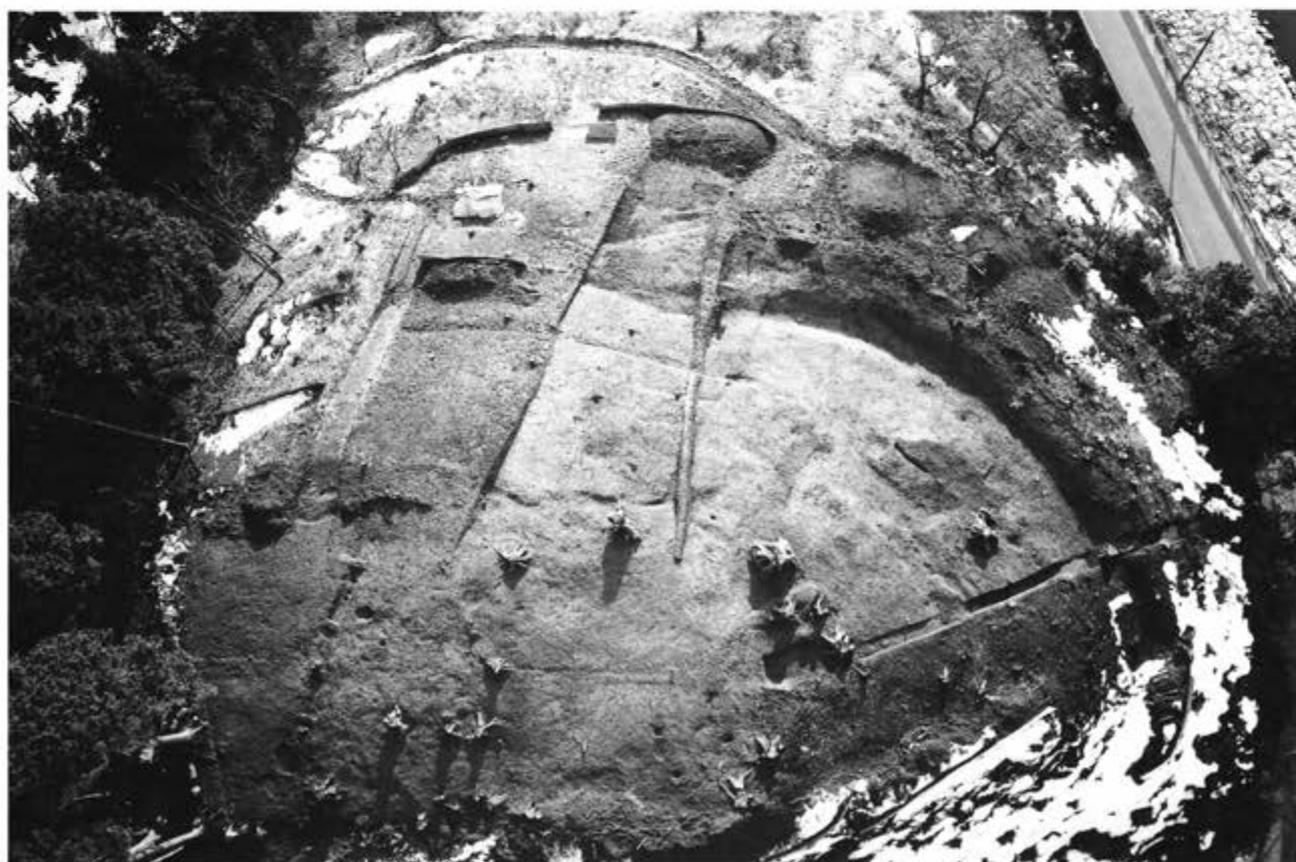
(1) 引地城跡遠景（南西から）



(2) 引地城跡全景（西から）



(1) 引地城跡全景 (南西から)



(2) 引地城跡全景 (真上から)



(1) 引地城跡土塁・横堀掘削作業（南から）



(2) 引地城跡帯郭1全景（北西から）



(1) 引地城跡柱穴掘削作業（西から）



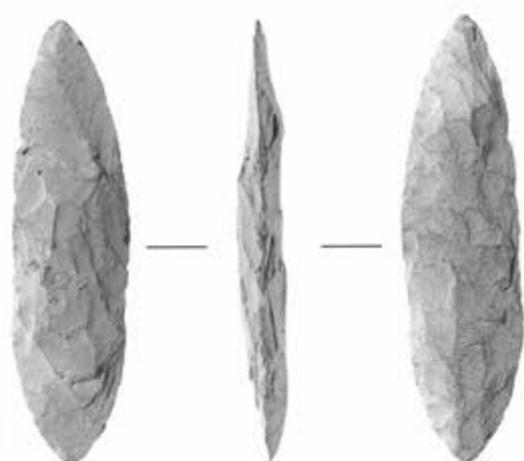
(2) 引地城跡焼土坑土層堆積状況（北から）



(1) 南有路城跡全景（西から）



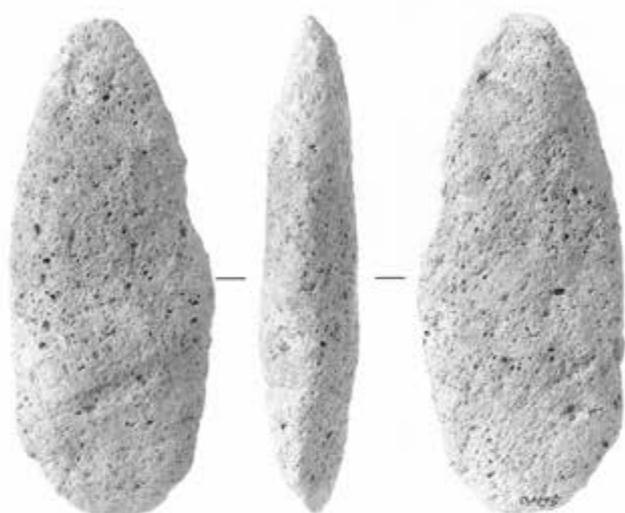
(2) 関係者説明会風景



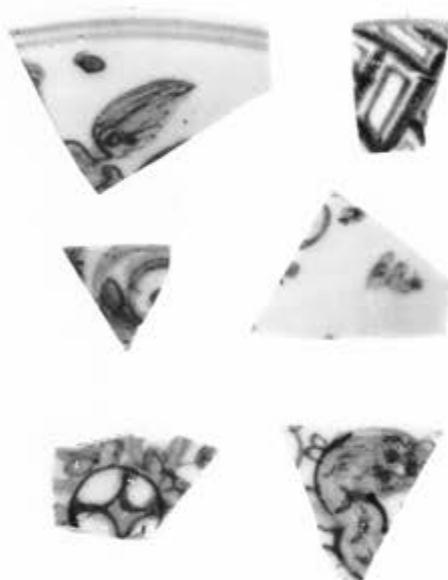
1



2



3



4



5



(1) 第1地点調査地遠景（北西から）



(2) 第2・3・4地点調査地遠景（東から）



(1) 第1地点トレンチ遺構検出状況(北西から)



(2) 第1地点トレンチ遺構完掘状況(北西から)



(1) 第4地点グリッド土層断面（西から）



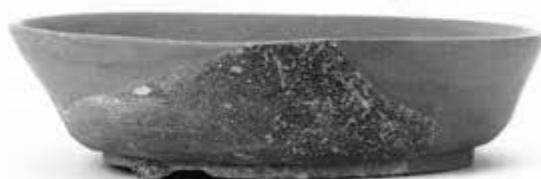
(2) 第5地点グリッド土層断面（西から）



(1) 第3地点トレンチ東壁土層断面（西から）



7



8



1



14



11



9

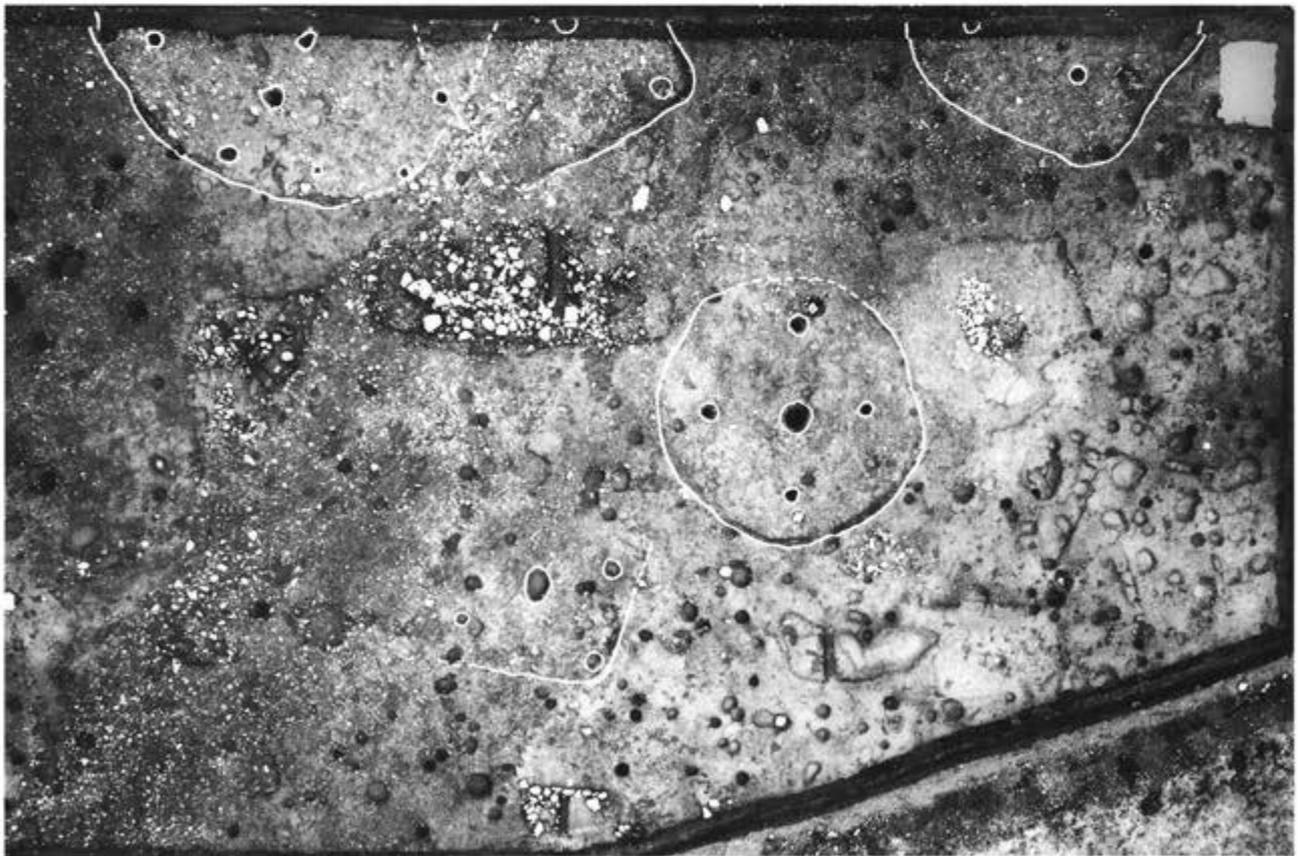


10

(2) 出土遺物



(1) 調査地遠景（東から）



(2) 第1トレンチ空中写真



(1) 第2トレンチ空中写真



(2) 第3トレンチ空中写真



(1) 第4トレンチ空中写真



(2) 第4トレンチ竪穴式住居跡7 (真上から)

(1) 第1トレンチ
竪穴式住居跡1
完掘状況(南から)



(2) 同上
竪穴式住居跡3
完掘状況(東から)



(3) 同上
竪穴式住居跡4
完掘状況(南東から)





(1) 第1トレンチ
土坑2
完掘状況（西から）



(2) 同上
土坑1
完掘状況（西から）



(3) 同上
土器溜まり
土器出土状況
（東から）



(1) 第2トレンチ
掘立柱建物跡2
完掘状況（北西から）



(2) 同上
ピット1 (P1)
完掘状況



(3) 第3トレンチ
流路1及び
集石遺構2完掘状況

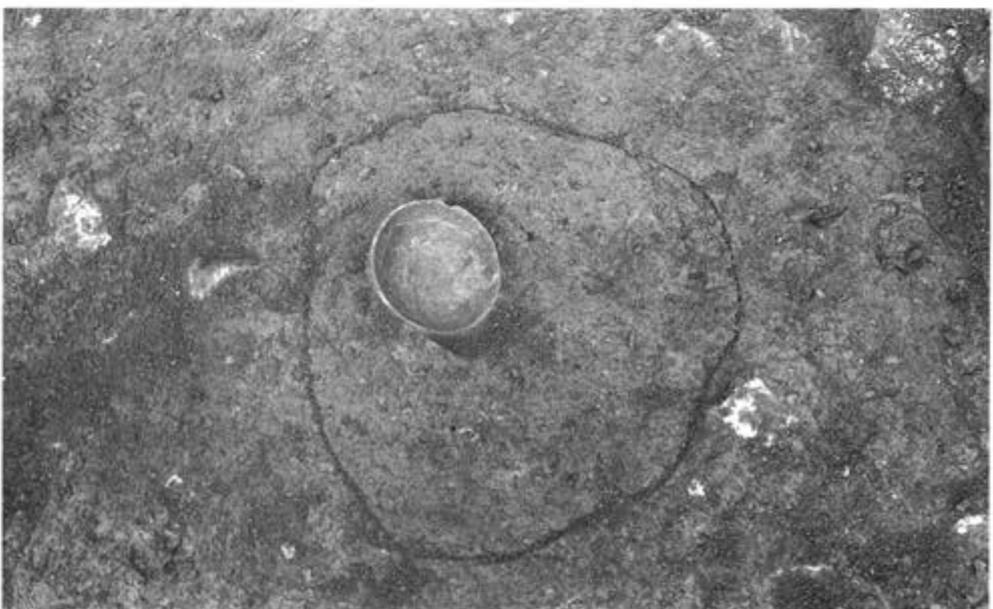
(1) 第4トレンチ
宮川2号墳
完掘状況（西から）



(2) 第4トレンチ
竪穴式住居跡8
完掘状況（南から）



(3) 第4トレンチ
中世墓（石材除去後）





1



2



3



9



18



19



27



25



29



22



45



47



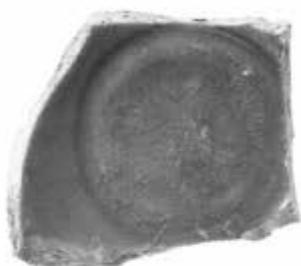
54



63



74



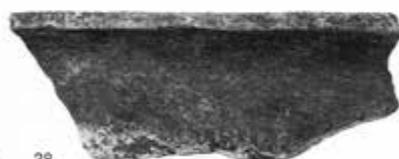
37



42



38



40



41



39



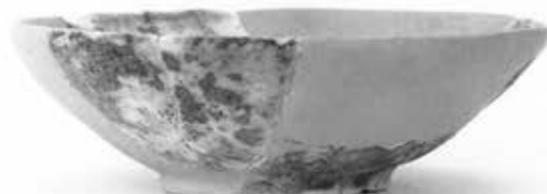
75



83



107



84



105



89



92



93



100



96



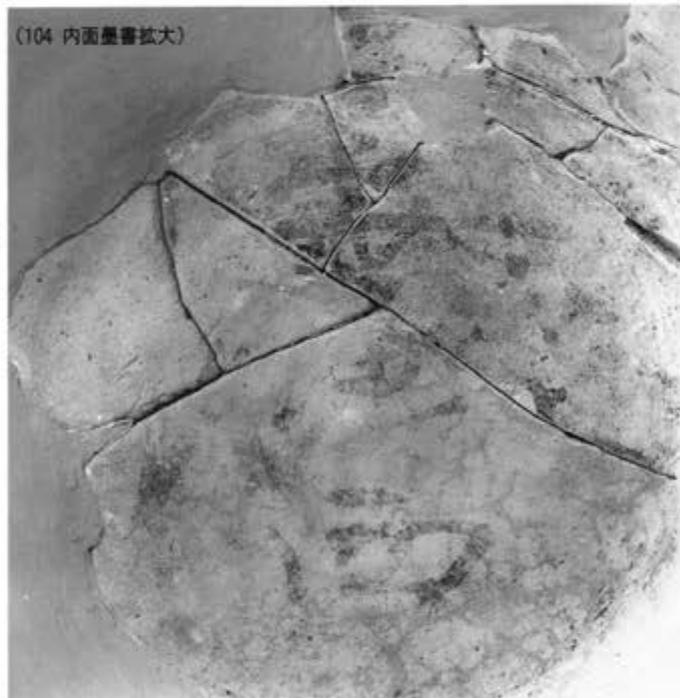
99



103



101



104



(1) 調査地遠景（井手町万灯籠山展望台から、東から）



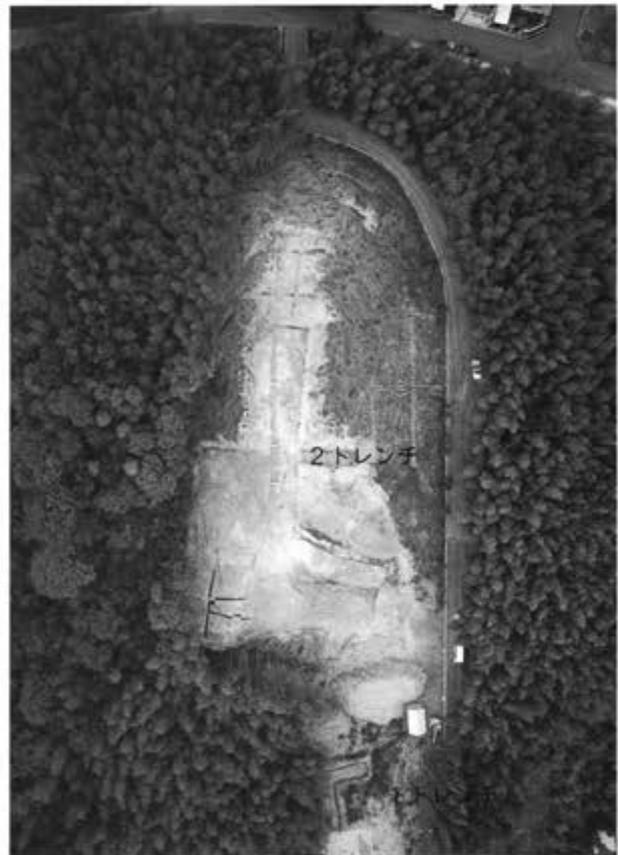
(2) 調査地遠景（航空写真、東から）



(1) 調査地遠景 (航空写真、北から)



(2) 2トレンチ全景 (航空写真、南から)



(3) 調査地全景 (航空写真、垂直、上が北)



(3) 1トレンチ S K 9501 ~ S K 9504 検出状態 (南から)



(4) 1トレンチ S K 9502 半掘状態 (西から)



(1) 1トレンチ 全景 (南から)



(2) 1トレンチ S K 9502 ~ S K 9504 検出状態 (南西から)



(1) 1トレンチ S K 9502 半掘状態 (北から、背後に S K 9503・9504)



(3) 1トレンチ S K 9501 ~ S K 9504 掘削状態 (S K 9502 完掘段階、南西から)



(2) 1トレンチ S K 9502 坑内礫堆積状態 (東半部、北から)



(4) 1トレンチ S K 9502 ~ S K 9504 完掘状態 (北西から)



(1) 2トレンチ山頂A掘削調査前風景(北から)



(2) 1トレンチ南半全景(山頂Bから山頂Aの諸遺構を望む、北北西から)



(1) 2トレンチ土塁・堀切・郭全景（土塁Ⅰ期段階、北から）



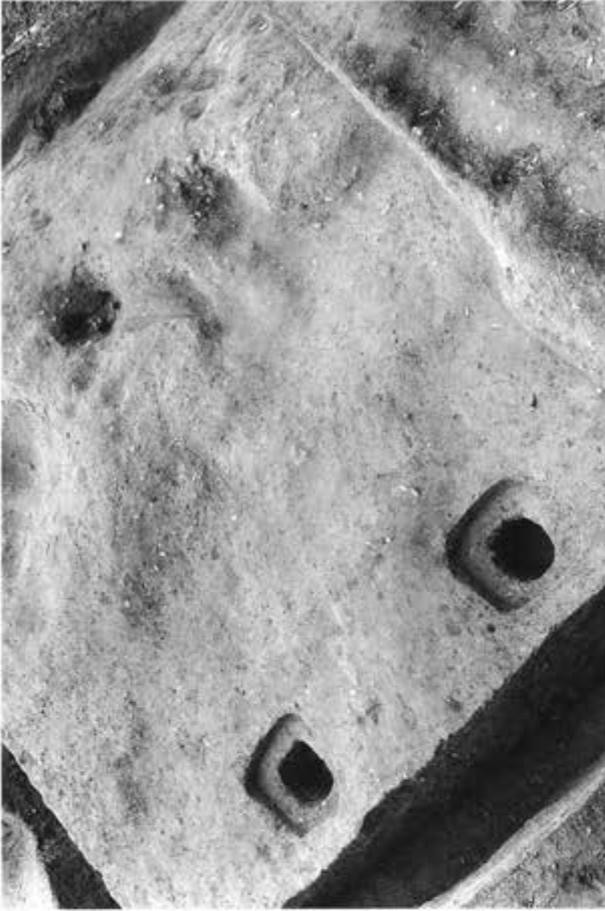
(3) 2トレンチ土塁・堀切（堀切底から土塁を望む、北から）



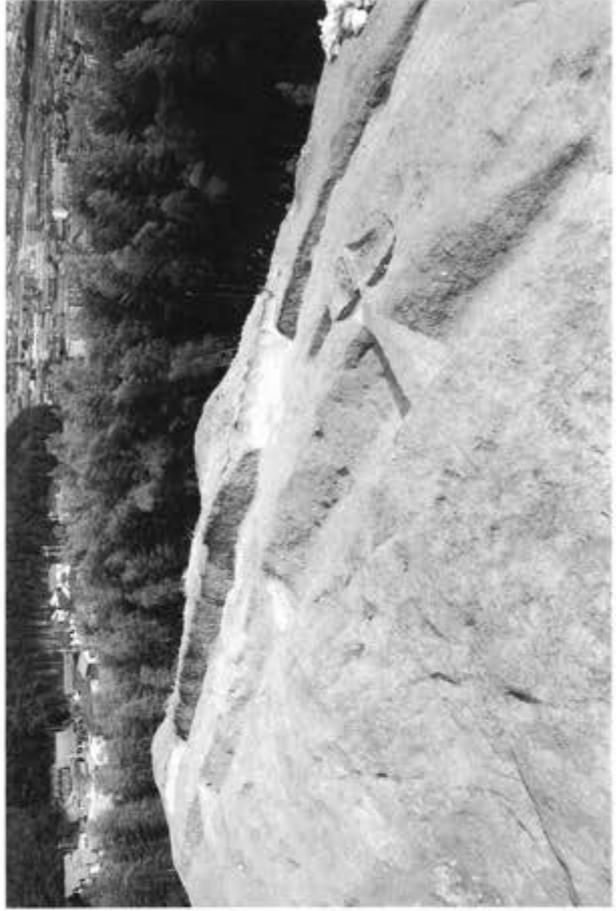
(2) 2トレンチ土塁・堀切・郭全景（土塁Ⅰ期段階、北から）



(4) 2トレンチ土塁・堀切・郭全景（土塁Ⅰ期段階、北北東から）



(3) 2トレンチ郭内掘立柱検出状況 (南西から)



(4) 2トレンチS D9513・S K9516全景 (南西から)



(1) 2トレンチ堀切全景 (西から)



(2) 2トレンチ堀切全景 (南から)



(1) 2トレンチSD9513・SK9516全景（南南東から）



(2) 2トレンチSD9513北半検出状態（北北西から）



(1) 2トレンチSX9520全景(東から)



(2) 2トレンチSX9520北側斜面(切岸、南から)



(1) 2トレンチSX9516焼土・焼灰検出状態(南西から)



(3) S-1トレンチ検出状態(V字断面の溝、拡張前、北西から)



(2) 2トレンチSD9513横断面(V-W断面、北から)



(4) S-3トレンチSK9519全景(北北西から)



(1) 調査地全景（南から）



(2) 調査地全景（東から）



(3) DトレンチS D02検出状況（北から）



(4) Eトレンチ北壁（南西から）



(1) A・B・Dトレンチ全景（東から）



(2) AトレンチS D01検出状況（西から）



(3) I区第2遺構面全景(手前が東)



(1) I区第1遺構面(南から)



(2) I区SD01・SK03・SK07、畦畔7全景(東から)



(3) 建物跡全景 (手前が東)



(1) 竪穴式住居跡SH23断面 (南から)



(2) 竪穴式住居跡完掘状況 (南から)



(3) SK19掘削状況(南から)



(4) SK19遺物出土状況(手前が北)



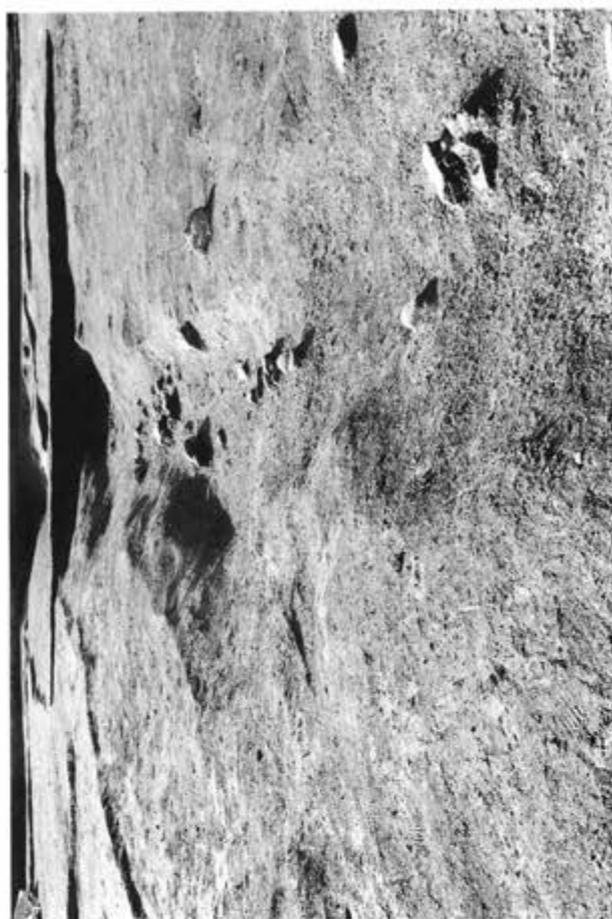
(1) SK31断面(北から)



(2) SK31遺物出土状況(北から)



(3) S D 24・S D 25・S D 35全景 (南から)



(4) S D 15掘削状況 (東から)



(1) S K 26・P 27遺物出土状況 (東から)



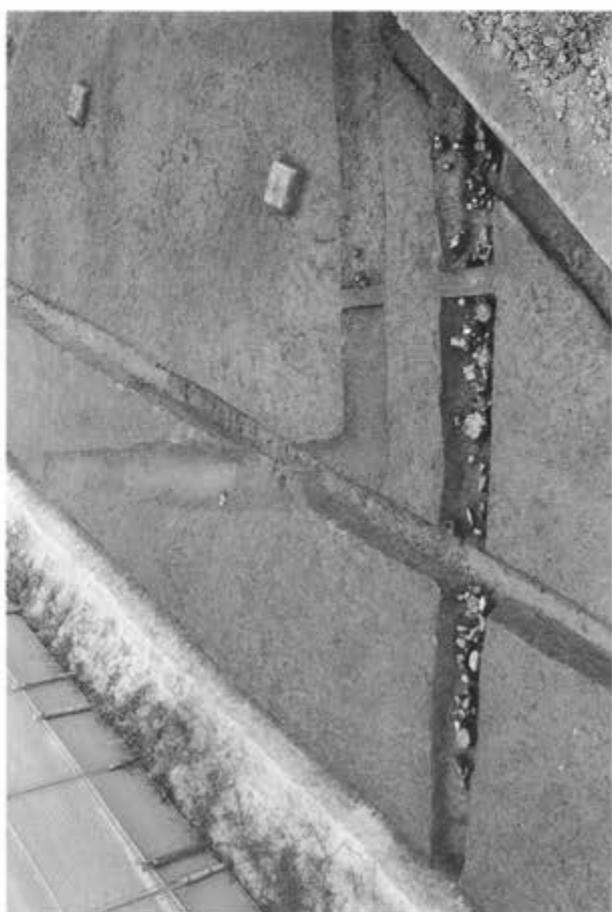
(2) S K 32遺物出土状況 (北から)



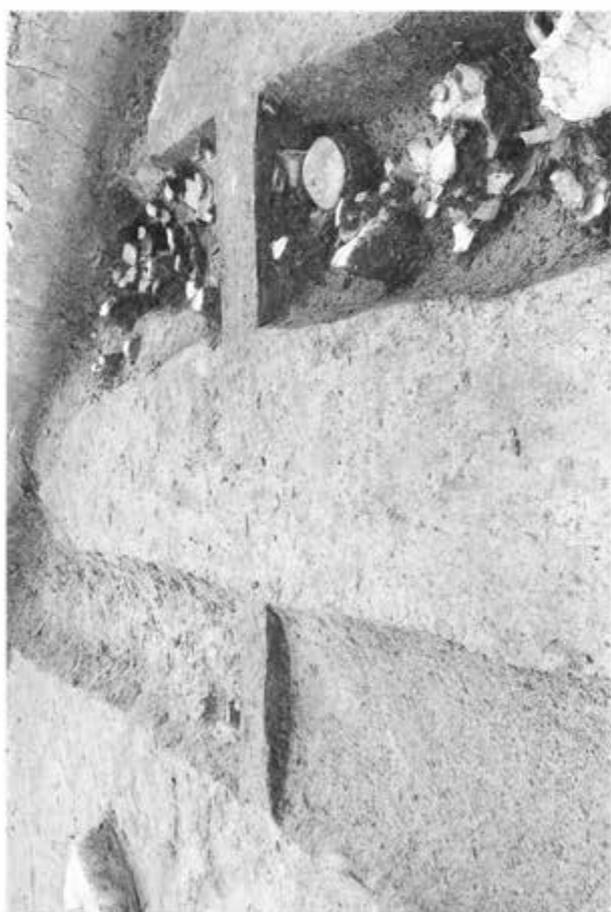
(3) S D13・S D14全景東側拡張部分 (南から)



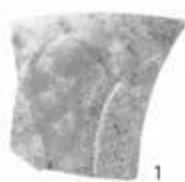
(4) S D13・S D14東側拡張部分遺物出土状況 (西から)



(1) S D13・S D14全景西側 (南から)



(2) S D13・S D14遺物出土状況 (西から)



1



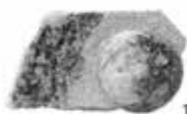
2



4



6



10



11



5



7



12



8



9



13



18



17



21



20



23



28



32



16



19



22



34



35



31



30



36



38



37



40



41



44



42



43



45



46



47 | 48
49 | 50

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第72冊							
編著者名	村田和弘・黒坪一樹・筒井崇史・野々口陽子・伊賀高弘・有井広幸							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				TEL 075(933)3877			
発行年月日	西暦 1996 年 3 月 28 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしがはら こふんぐん 石ヶ原古墳 群	たけのぐんたんご ちょうおおあざみ やけこあざいしが はら 竹野郡丹後町大字 三宅小字石ヶ原	502	106	35° 43' 17"	135° 6' 15"	19951204 ～ 19960228	540	農道整備
ひきちょう うあと 引地城跡	かさぐんおおえ ちょうみなみあり じ 加佐郡大江町南有 路	441	59	35° 23' 00"	135° 11' 20"	19951121 ～ 19960228	700	道路拡幅
みなみあり じじょうあ と 南有路城跡	かさぐんおおえ ちょうみなみあり じ 加佐郡大江町南有 路	441	52	35° 23' 20"	135° 11' 30"	19951121 ～ 19960228	40	道路拡幅
ちよかわい せきだい20 じ 千代川遺跡 第20次	かめおかしちよか わちょうゆい 亀岡市千代川町湯 井	206	22	35° 2' 50"	135° 32' 50"	19951106 ～ 19951208	200	河川改修
みやがわい せき 宮川遺跡	かめおかしみやま えちょうみやがわ 亀岡市宮前町宮川	206	24	35° 2' 7"	135° 28' 44"	19950509 ～ 19950811	1,600	ほ場整備
こうどみや のまえいせ き 興戸宮ノ前 遺跡	つづきぐんたなべ ちょうこうどみや のまえ・かわらだ に 綴喜郡田辺町興戸 宮ノ前・川原谷	342	79	34° 48' 11"	135° 46' 19"	19950817 ～ 19951218	1,800	道路建設

かきぞえい せきだい2 じ 柿添遺跡第 2次	そうらくぐんせい かちょうきたいな はちまかきぞえ 相楽郡精華町北稲 八間柿添	366	47	35° 45' 55"	135° 47' 27"	19950821 ～ 19951129	820	道路建設
所収遺跡名	種別	主な 時代		主な 遺構		主な 遺物		特記事項
石ヶ原古墳 群	古墳	古墳		墳丘、埋葬施設		須恵器、土師器		
引地城跡	山城	鎌倉、室町、戦国		郭、帯郭、横堀、土塁、溝、 通路		石器、須恵器、土師 器、陶磁器		
南有路城跡	山城	鎌倉、室町、戦国		なし		なし		
千代川遺跡 第20次	生産	明治、大正、昭和		溝、石列		土師器、陶磁器		
宮川遺跡	集落	古墳		竪穴住居		土師器、須恵器		
興戸宮ノ前 遺跡	平山城、墓(?)	室町、奈良		土塁、堀切、郭、竪堀、掘立 柱建物、焼土坑		須恵器、土師器、瓦 質土器		
柿添遺跡第 2次	集落	古墳、鎌倉、室町		竪穴住居、溝、土坑、掘立柱 建物		土師器、須恵器、瓦 器、青磁、白磁、玉		

京都府遺跡調査概報 第72冊

平成8年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

Tel (075)441-3155 (代)